

山口大学大学院東アジア研究科  
博士論文

ベトナム語の方向移動動詞  
—日本語との対照—

令和3年9月

DO THI VAN

## 目次

序論.....	1
1 本研究の必要性.....	1
2 研究目的.....	2
3 研究対象.....	2
4 研究範囲.....	2
5 研究方法.....	2
6 本論文の構成.....	2
第1章.....	5
方向移動動詞における理論的根拠.....	5
1.1 ベトナム語と日本語の概説.....	5
1.1.1 言語の種類.....	5
1.1.2 語順の種類.....	7
1.2 ベトナム語における理論的根拠.....	10
1.2.1 ベトナム語の品詞.....	10
1.2.2 ベトナム語のアスペクト.....	11
1.2.3 ベトナム語の動詞.....	16
1.2.3.1 ベトナム語の動詞の定義.....	16
1.2.3.2 ベトナム語の動詞の分類.....	17
1.2.3.3 ベトナム語の動詞の意味的特徴と文法的特徴.....	28
1.2.4 ベトナム語の前置詞句.....	30
1.3 日本語における理論的根拠.....	33
1.3.1 日本語の時制（テンス）.....	33

1.3.2	日本語の品詞.....	34
1.3.3	日本語の格助詞.....	34
1.3.4	日本語の相（アスペクト）.....	36
1.3.4.1	完了と未完了.....	37
1.3.4.2	「ている」型.....	39
1.3.4.3	完了形と未完了形の組み合わせ.....	40
1.4	移動動詞とは.....	41
1.4.1	ベトナム語の移動動詞.....	42
1.4.2	日本語の移動動詞.....	43
1.4.3	筆者による移動動詞の再分類.....	45
1.4.4	方向移動動詞.....	47
1.5	本章のまとめ.....	48
第2章	.....	50
ベトナム語の方向移動動詞.....		50
2.1	方向性を持つ方向移動動詞.....	50
2.1.1	ベトナム語における空間的移動.....	50
2.1.2	ベトナム語における空間移動の起点、経路、着点.....	54
2.1.3	ベトナム語の方向移動動詞のアスペクト.....	66
2.2	方向性を持たない方向移動動詞.....	71
2.3	ベトナム語の方向移動動詞の文法面の分析.....	77
2.4	本章のまとめ.....	86
第3章	.....	88
日本語の方向移動動詞との対照.....		88

3.1 方向性を持つ日本語の方向移動動詞.....	88
3.1.1 日本語における空間的移動.....	88
3.1.2 日本語における空間移動の起点、経路、着点.....	92
3.1.3 日本語の方向移動動詞のアスペクト.....	101
3.2 方向性を持たない日本語の方向移動動詞.....	105
3.3 日本語の方向移動動詞の文法面の変更.....	110
3.4 本章のまとめ.....	111
結論.....	113
問題点と今後の課題.....	115
参考文献.....	116
謝辞.....	119

## 序論

### 1 本研究の必要性

言語の品詞の中で、意味論および統語論に見られるように、動詞は複雑な品詞である。それはこの品詞の意味の本質に由来する。全体面では、動詞の意味は「動き」で、動詞は動作や状態を表す。文法面では、動詞は主に文の述語の役割を果たしている。ただし、前置詞、副詞などのような他の品詞と組み合わせることができるため、他の役割も担う。また、項として主語や目的語などの名詞をとる語である。そのため、異なる言語の意味論および統語論における動詞、あるいは、移動動詞—動詞の1つのグループ—との対照はベトナムと日本の研究者だけでなく、世界の研究者が関心を持っていると思われる。

多くの言語では、移動動詞は個別の意味的特徴と文法的特徴を持ち、動詞内の個別の特徴を形成する。ベトナム語の移動動詞においては、「移動」を意味する動詞は様々である。Đi bộ (歩く)、chạy (走る)、bay (飛ぶ)、bò (這う)、bơi (泳ぐ)、bước (歩む)、trèo (登る)などといった移動の様態を表すものの他に、特別な意味を持つもう一つのグループも存在している。そのグループの動詞は動詞単独の意味に移動の方向も含めている。例えば、đi (行く)、đến (来る)、tới (来る)、lại (来る/帰る)、về (帰る)、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)、sang (渡る)、qua (渡る)などである。

現在、ベトナム語の動詞については、Nguyễn Kim Thán (1977)、Đình Văn Đức (1986)などのような研究者は多いが、移動動詞に関する研究者は、Trần Kiều Hué (2005)、Mai Thị Thu Hân (2011)、Lý Ngọc Toàn、Lê Hương Hoa (2013)のみである。特に、外国語との対照研究は、ベトナム語と英語の対照をした者はいるが、ベトナム語の移動動詞と日本語の移動動詞を対照した研究者は、Trần Kiều Hué (2005)のみである。しかし、Trần Kiều Hué (2005)が研究したのは、科学雑誌に掲載された短い論文で、主に両言語の文法面からの対照であるため、十分とは思われない。

近年、日本においても外国語との対照研究は盛んに行われているが、日本語と対照されるのは、英語を筆頭とするヨーロッパの言語が中心であり、アジアの言語では中国語と韓国語が殆どである。本研究は、ベトナム語と日本語の方向移動動詞を中心に対照するという点で極めて稀有な研究となることが予測される。

上記の理由で、「ベトナム語の方向移動動詞—日本語との対照—」を本論文のテーマにする。

## 2 研究目的

本研究の目的は、ベトナム語と日本語の方向移動動詞を対照することにより、文法面、意味面における両言語の共通点、相違点を探ることである。具体的には、両言語を対照することにより、方向移動動詞の意味と文法はどのようになっているか、また、方向移動動詞の意味と文法の特徴は、それらの文の特徴及び他の要素との組み合わせにどのように影響しているかを明らかにする。

## 3 研究対象

本論の研究対象はベトナム語と日本語の方向移動動詞である。

## 4 研究範囲

本研究の範囲は、ベトナム語と日本語の方向移動動詞の意味構造と文法構造である。本研究で考察するベトナム語の方向移動動詞は đi (行く)、đến (来る)、tới (来る)、lại (来る/帰る)、về (帰る)、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)、sang (渡る)、qua (渡る)の11個とそれらに対応する日本語の方向移動動詞「行く」、「来る」、「帰る」、「出る」、「入る」、「上がる/上る」、「下がる/降りる」、「渡る」の8個である。

## 5 研究方法

ベトナム語と日本語の言語関係の資料により、両国の方向移動動詞の意味的特徴、文法的特徴を理解する。そして、資料の中の例文や筆者の作った短文により対照する。これを基に、両言語の共通点、相違点を明らかにする。

## 6 本論文の構成

本論文の構成は以下のようにになっている。

第1章では、理論的根拠としてベトナム語と日本語の両言語の動詞、移動動詞について述べる。

まず、ベトナム語と日本語の概説である。ベトナム語は孤立語で、語形変化をしないという大きな特徴がある。ベトナム語は日本語と異なり、時制やアスペクトなどを表すための語形変化をせず、副詞などを付け加えて表す。もう1つの大きな特徴は、「語順」である。ベトナム語の語順は SVO (主語、動詞、目的語)である。語順は文法的な機能を示すために必要であり、つまり、語の並び方によって様々な文法的機能を担う。

これに対し、日本語は語尾に接辞が接合する膠着語である。語順は SOV (主語、目的語、動詞)で、句の「主要部」が末尾にあるという特徴はベトナム語とは異なる。そして、日本語の時制は、過去形と非過去形の2種類に分類され、動詞に時制があるだけでなく、形容詞、名詞にも時制がある。

次は、両言語の動詞についてである。ベトナム語の動詞は、音韻構成によれば、単音節の動詞と複音節の動詞の2種類に分類される。意味構成からは、単音素の動詞と多音素の動詞に分けられる。そして、多音素の動詞は複合動詞、PHA 動詞、CHAP 動詞の3種類がある。

一方、日本語の動詞は、日本語の相 (アスペクト)においては、過去形では完了相であるが、「ている」は継続相、結果相、状態相のいずれかである。そして、完了相と継続相を組み合わせることができる。

両言語の移動動詞については、ベトナム語の移動動詞の先行研究 Trần Kiều Hué (2005)と日本語の移動動詞の寺村 (1982)、影山 (1997・2001)の研究を分析し、ベトナム語の方向移動動詞と移動様態動詞の特徴に基づき、ベトナム語の移動動詞を細分類する。

第2章では、ベトナム語の方向移動動詞を意味構造と文法構造から分析する。

意味構造から見れば、ベトナム語の方向移動動詞は、一定の方向を持つが、空間的移動 (ある目的地へ向けての移動)の時のみ方向性を持つ。また、ベトナム語の方向移動動詞は動詞単独と前置詞で空間表現の起点、経路、着点を表すことができる。

文法構造から見ると、ベトナム語の方向移動動詞は文の主動詞で、文の述語としての機能を果たしている。しかし、方向移動動詞が他の動詞の後ろに置かれる場合、その方向移動動詞は前置詞のような他の文法構文の機能を果たす。

第3章では、第2章におけるベトナム語の方向移動動詞の分析を基に、日本語の方向移動動詞

との対照を行い、両言語の共通点および相違点を明らかにする。

両言語の共通点は 4 点ある。1 点目は、両言語の方向移動動詞が空間的移動 (ある目的地へ向け、移動する活動)でのみ方向性を持つことである。2 点目は、ベトナム語と日本語の方向移動動詞の中では、đi (行く)、「行く」は「完了相」と「未完了相」を表し、それ以外の方向移動動詞は「完了相」を表す。また、両言語の方向移動動詞の「ている」形では、「継続相」を表す。3 点目は、方向移動動詞が本来の意味の他に「変化を表す意味」、「完了・結果を表す意味」、「心理的意味」を持っていることである。4 点目は、方向移動動詞の語彙的な意味のバリエーションにより、両言語の方向移動動詞が文法面で影響を受ける点である。つまり、方向移動動詞が文の述語の役割とは別の役割 (前置詞、補助動詞、後項動詞)を担っているのである。

両言語の相違点は 3 点あり、1 点目は、空間表現の起点、経路、着点に関する相違である。ベトナム語の方向移動動詞は方向移動動詞単独と前置詞で起点、経路、着点を表すのに対し、日本語は助詞で表すことである。2 点目は、日本語の方向移動動詞の「ている」形では、「完了相」を表すが、ベトナム語の方向移動動詞には「完了相」が存在しないという点である。3 点目は、両言語の文法面についての相違点である。「動詞+方向移動動詞」の形式では、ベトナム語の方向移動動詞は前置詞の役割を担うのに対し、日本語の方向移動動詞は補助動詞と後項動詞の役割を担っている。

最後に、まとめと今後の課題を述べる。

#### 本論で用いる略号と記号

CONJ	: Conjunction	接続詞
CLF	: Classifier for various categories	助数詞
COP	: Copulative verb	繫辞
FUT	: Future	未来
NEG	: Negative	否定
NUM	: Number	数詞
PAST	: Past Simple	完了
PRE	: Present Continuous	現在進行
*		非文法的な文
?		やや不自然な文
Φ		語彙的意味を持っていない要素



# 第1章

## 方向移動動詞における理論的根拠

ベトナム語の語順は「Anh yêu em (僕+愛している+君=君が好き)」のような SVO (主語+動詞+目的語/補語)の形であるのに対し、日本語の語順は「SOV (主語+目的語/補語+動詞) (僕+君+愛している=君が好き)」である。そのため、両言語の方向移動動詞を対照する前に、両言語の動詞一般を概観しておく必要がある。

本論は、ベトナム語の方向移動動詞の分析に基づき、日本語の方向移動動詞を対照することが目的である。そのため、本章においては、始めに両言語の特徴を示し、次に動詞、移動動詞を概観する。

### 1.1 ベトナム語と日本語の概説

本節では、ベトナム語と日本語の言語の類型と語順の類型の特徴について述べる。

#### 1.1.1 言語の類型

小泉 (1993)、斎藤 (2010)は、言語をその形態的な特徴から、孤立語・膠着語・屈折語の3種類に分類している。具体的には、小泉 (1993:110)は、語幹と接辞の接合、融合などに基づき、以下(1)のように、世界の言語を類型化した。

- (1) a. 語幹と接辞が語として独立しているタイプ.....孤立的言語
- b. 語幹に接辞が接合されるタイプ.....膠着的言語
- c. 語幹と接辞が融合しているタイプ.....屈折的言語

(小泉 1993:110)

小泉 (1993:110)は (1a)のように、語幹と接辞が語として独立しているものを孤立的言語と称し、(1b)のように、語幹に接辞が接合するものを膠着的言語、(1c)のように、語幹と接辞が融合しており、両者を区別することができないものを屈折的言語と称している。

それに対し、斎藤 (2010)は、語の文における語彙的意味と文法的意味に基づき、言語を分類した。斎藤 (2010)の分類を以下の(2)に示す。

- (2) a. 語は語彙的意味のみを表し、文法的意味は語順によって示される.....孤立的言語  
b. 語彙的意味を持つ語に文法的意味を持つ接辞が加えられる。  
その際、形態素の境界がはっきりしている.....膠着的言語  
c. 語彙的意味を持つ部分と文法的意味を持つ部分が融合しており  
形態素の境界ははっきりしていない.....屈折的言語  
(斎藤 2010:66・67)

以上から、小泉 (1993)、斎藤 (2010)は、日本語は膠着的言語であると指摘している。具体的には、以下の(3a)のように、「書く」を例にすると、語幹部 **kak** に次々と接尾辞 **ase**、**rare**、**ta** が付け加えられていく。(3a)と同様、(3b)の語幹部「たべ」に次々と接尾辞「させ」、「られ」、「ない」が付け加えられていく。

- (3) a. 書かせられた / **kak- ase- rare- ta**/ (小泉 1993:111)  
語幹 使役 受身 PAST  
b. 食べさせられない / **たべ+させ+られ+ない** (斎藤 2010:66)  
語幹 使役 受身 NEG

さらに、膠着的言語に関しては、Trần Thị Chung Toàn (2014:26)は、膠着語は、文法的機能を持つ助詞・助動詞などの付属語が自立語の語幹に結びつくことによって文の意味が示される言語であるとする。

一方、ベトナム語は膠着的言語ではなく、孤立的言語である (cf. Nguyễn Kim Thản (1977))。構造面では、ベトナム語の語においては、語幹と接辞を区別していない。つまり、語幹と接辞は独立であるとしている。具体的には、動作の進行を表す場合、(4a)の語幹 **chơi** (遊ぶ)の後ろ、あるいは、前に接尾辞を付け加えず、独立の時制を表す副詞 **đang** (PAST)と組み合わせさつ

ている。(4a)と同様、(4b)では語幹 *mắng* (叱る)の後ろ、あるいは、前に接尾辞を付け加えず、独立の状態を表す動詞 *bị* (受身)と結合する。

- (4) a. *đang chơi*  
PRE 遊ぶ=遊んでいる
- a. *bị mắng*  
受身 叱る=叱られる

孤立語の単語は語形変化をせず、文法的機能は主として語順によって示されることは本章の1.2で述べる。

以上述べたように、日本語は膠着語であるのに対し、ベトナム語は孤立語である。この相違は両言語の方向移動動詞に何らかの影響を与えていると予測される。

### 1.1.2 語順の種類

本節では、ベトナム語と日本語の語順について述べる。斎藤 (2010:66)は、孤立語は、語彙的意味のみを表し、文法的意味は語順によって示されると指摘した。

竹沢 (1998)は、主語 (S)、目的語 (O)、動詞 (V)が文中に現れる順に基づき世界の言語の語順を6種類に分類している。一方で、斎藤 (2010)は3種類に分類している。(5)は竹沢 (1998)の6種類である。

- (5) a. 主語－目的語－動詞 (SOV)  
b. 主語－動詞－目的語 (SVO)  
c. 動詞－主語－目的語 (VSO)  
d. 動詞－目的語－主語 (VOS)  
e. 目的語－動詞－主語 (OVS)  
f. 目的語－主語－動詞 (OSV)

(竹沢 1998:104)

次の(6)は斎藤 (2010)の3種類である。

- (6) a. SOV 日本語・朝鮮語・モンゴル語・トルコ語など多くの言語に見られる語順で、世界の言語の約 50%がこの語順である。
- b. SVO 中国語・英語・フランス語などに見られ、約 40%の言語がこの語順である。
- c. VSO アラビア語・アイルランド語・マオリ語などがこの語順で、世界の言語の 10%ほどがこのタイプである。

(斎藤 2010:103)

また、斎藤(2010)は、ほとんどの場合、SVOとVSOのタイプの言語が前置詞を持つのに対し、日本語のように目的語の後に動詞が来るSOVタイプの言語では後置詞が用いられると言っている。

竹沢(1998:104)は、日本語は主語－目的語－動詞(SOV)のタイプに属し、「主要部末尾型」の言語であると言っている。例えば、(7)を見てみよう。

- (7) a. 動詞句(VP) : NP — V (竹沢 1998:105)

目的語 動詞  
お茶漬けを食べる

- b. 名詞句(NP) : NP — N (竹沢 1998:105)

補語 名詞  
お茶漬けの味

- c. 後置詞句(PP) : NP — P (竹沢 1998:105)

目的語 後置詞  
スプーン で

(7a)-(7c)から分かるように、動詞「食べる」、名詞「味」、助詞/後置詞「で」をそれぞれ、V、N、Pとすれば、VP(動詞句)、NP(名詞句)、PP(後置詞句)内部の語順がSOVのタイプである。

また、竹沢 (1998:105)は、「お茶漬けを食べる」の動詞「食べる」、「お茶漬けの味」の名詞「味」、「スプーンで」の後置詞「で」を、それぞれの句の「主要部」と呼んでいる。つまり、日本語は、「主要部」は句の末に置かれるのである。

日本語が SOV のタイプであるのに対し、ベトナム語は SVO (主語、動詞、目的語) のタイプの言語である。

では、日本語と語順の異なる SVO (主語、動詞、目的語) のタイプのベトナム語の言語の主要部はどこにあるのであろうか。以下の例(8)を見てみよう。

(8) a. 動詞句 (VP) : V – NP

動詞 目的語

uống nước

飲む 水

b. 名詞句 (NP) : N – NP

名詞 補語

màu của bầu trời

色 の 空

c. 前置詞句 (PP) : P – NP

前置詞 補語

với bố mẹ

と 両親

(8a)の動詞句、(8b)の名詞句、(8c)の前置詞句を見ると、それぞれ句の「主要部」は、句の先頭にあり、「水を飲む」の動詞 uống 「飲む」、「空の色」の名詞 màu 「色」、「両親と」の前置詞 với 「と」であることが分かる。従って、ベトナム語は「主要部先頭型」であることが分かる。

以上のように、日本語の語順は SOV (主語、目的語、動詞) のタイプであり、句の「主要部」は末尾にある「主要部末尾型」であり、ベトナム語の語順は SVO (主語、動詞、目的語)

のタイプで、句の「主要部」は先頭部にある「主要部先頭型」である。これは、両言語のもう1つの相違点である。

## 1.2 ベトナム語における理論的根拠

本節においては、本研究に関連があるベトナム語の品詞、ベトナム語のアスペクト、ベトナム語の動詞と前置詞句について説明する。

### 1.2.1 ベトナム語の品詞

Nguyễn Kim Thán (1977)<sup>1</sup>と Diệp Quang Ban ed. (1996)は、ベトナム語の品詞を内容語と機能語の2つに分類している。内容語は文法的な機能を殆ど持たず、主に語彙的意味を表す語である。これには、名詞、動詞、形容詞などがある。

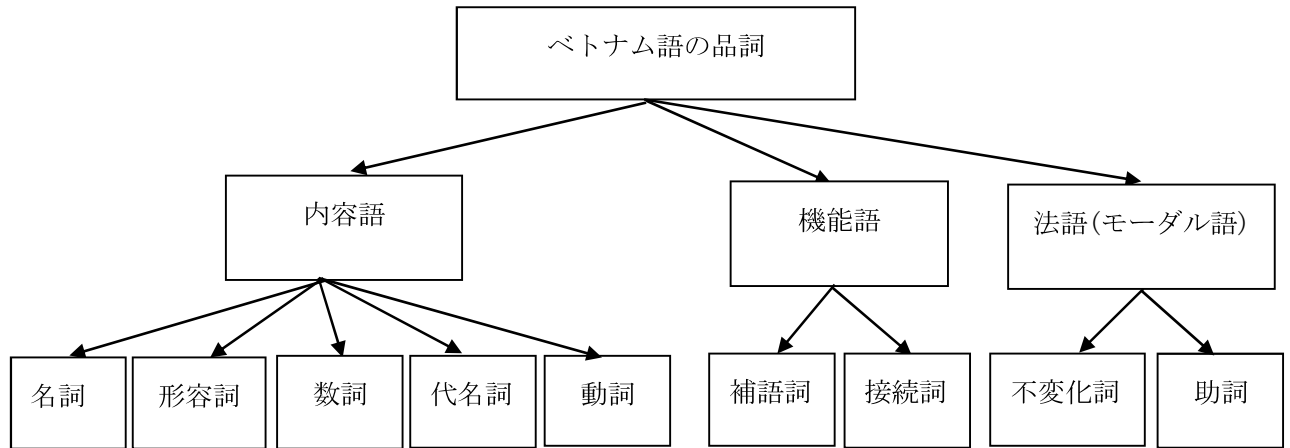
一方の機能語は、語彙的な意味を持たず、文法的な機能のみを果たす語であり、前置詞、副詞、接続詞、感嘆詞などがある。

さらに、Đinh Văn Đức (1986)は、ベトナム語の品詞を内容語と機能語と法語 (modal word)の3種類に分類している。Đinh Văn Đức (1986)は、また、この3種類を細分類している。詳細を以下の図1で示す。

---

<sup>1</sup> 本研究においては、Nguyễn Kim Thán が1977年に著した *Động từ trong tiếng Việt* (ベトナム語の動詞)と *Nghiên cứu ngữ pháp tiếng Việt* (ベトナム語の文法の研究)を用いる。以後、これらを引用する時は、この2冊を区別するため、*Động từ trong tiếng Việt* (ベトナム語の動詞)を示す場合は、Nguyễn Kim Thán(1977)のように著者のフルネーム(発行年)で表示し、*Nghiên cứu ngữ pháp tiếng Việt* (ベトナム語の文法の研究)を示す場合は、著者のフルネーム(発行年)と書名を記載する。

図1 Đinh Văn Đức (1986)のベトナム語の品詞



ベトナム語の動詞は Nguyễn Kim Thân (1977)、Đinh Văn Đức (1986)、Diệp Quang Ban ed. (1996)の分類においては、内容語に属している。

### 1.2.2 ベトナム語のアスペクト

上述したように、ベトナム語は斎藤の分類に従えば、独立語であり、「語形変化をしない」という特徴を持つ。「語形変化をしない」とは、主語や単数・複数や時制などによって単語の形が全く変わらないということである。例えば、日本語の「泳ぐ」という動詞は、「泳がない、泳げば、泳ごう」の形に変化する。英語でも文法機能に応じ、「swim、swam、swum」等の時制・人称の変化がある。

しかし、ベトナム語の *boi* (泳ぐ)は形態の変化がない。具体的には、過去を表すために、(9)の例文のように、日本語の「泳ぐ」は「泳いだ」の形に変化するのに対し、(10)のように、ベトナム語の *boi* (泳ぐ)は形が変化しない。

(9) 昨日、父と一緒に泳いだ。

(10) Hôm qua, tôi *boi* 3 tiếng.

昨日 私 泳ぐ 3 時間

昨日私は3時間泳いだ。

つまり、ベトナム語の動詞は文法形式としてのテンス(時制)を持たず、動詞そのものによって時間関係を表すことはできない。ベトナム語の時制、アスペクトの始動、継続、完了などを表す場合は、副詞 *sẽ* (FUT)、*đang* (PRE)、*đã* (PAST)等が用いられる (cf. Nguyễn Kim Thán (1977:187))。

例えば、未来に起きる動作を表すためには、副詞 *sẽ* (FUT)が用いられる。例えば、*sẽ đi* (FUT+行く=行く)、*sẽ đến* (FUT+来る=来る)、*sẽ về* (FUT+帰る=帰る)、*sẽ bơi* (FUT+泳ぐ=泳ぐ)、*sẽ học* (FUT+勉強する=勉強する)、*sẽ ngủ* (FUT+寝る=寝る)、*sẽ chạy* (FUT+走る=走る)、*sẽ hát* (FUT+歌う=歌う)などである。

以下の(11)と(12)は始動を表す場合である。(11)では、未来を表す副詞 *sẽ* (FUT)が動詞 *về* (帰る)の前に置かれ、(12)では、*sẽ* (FUT)が動詞 *học* (勉強する)の前に置かれており、それぞれ動作 *về* (帰る)、*học* (勉強する)の始動を表している。

(11) Năm sau con sẽ về nhà.

来年 私 FUT 帰る 家

来年私は家へ帰る。

(12) Từ ngày mai, tôi sẽ học chăm chỉ.

から 明日 私 FUT 勉強する 一生懸命

明日から私は一生懸命勉強する。

また、現在起こっている動作に言及する時には、副詞 *đang* (PRE)が用いられる。この場合、副詞 *đang* (PRE)は、動詞の前に置かれ、*đang uống* (副詞 *đang*+飲む=飲んでいる)、*đang chơi* (副詞 *đang*+遊ぶ=遊んでいる)、*đang nói chuyện* (副詞 *đang*+話す=話している)、*đang ngắm* (副詞 *đang*+見る=見ている)、*đang cắt* (副詞 *đang*+切る=切っている)、*đang nghe* (副詞 *đang*+聞く=聞いている)、*đang dùng* (副詞 *đang*+使う=使っている)などとなる。

以下の(13)と(14)は現在の動作を表す例文である。(13)では、副詞 *đang* (PRE)が動詞 *chơi* (遊ぶ)の前に置かれ、(14)では、*đang* (PRE)が動詞 *nói chuyện* (話す)の前に置かれており、それぞれ動作 *chơi* (遊ぶ)、*nói chuyện* (話す)の継続を表している。



(13) *Bọn trẻ đang chơi ngoài vườn.*

たち 子供 PRE 遊ぶ 外 庭園

子供たちは庭園の外で遊んでいる。

(14) *Bố tôi đang nói chuyện với bạn của ông ở phòng khách.*

父 私 PRE 話す と 友達 の 彼 に 居間

私の父は彼の友達と居間で話している。

また、ベトナム語では、過去に起きた動作を表すためには、2つの副詞を用いる。これらは動詞の前に置かれる副詞 *đã* (PAST)と動詞の後ろに置かれる副詞 *rồi* (すでに)である。

動詞の前に副詞 *đã* (PAST)を置く例は、*đã khóc* (副詞 *đã*+泣く=泣いた)、*đã cười* (副詞 *đã*+笑う=笑った)、*đã tốt nghiệp* (副詞 *đã*+卒業する=卒業した)、*đã tìm* (副詞 *đã*+探す=探した)、*đã tin* (副詞 *đã*+信じる=信じた)、*đã viết* (副詞 *đã*+書く=書いた)などが挙げられる。

まず、動詞の前に置く副詞 *đã* (PAST)である。以下の(15a)、(15b)は、行為 *tốt nghiệp* (卒業する)、*tin* (信じる)が完了したことを表すため、副詞 *đã* (PAST)がそれぞれ動詞 *tốt nghiệp* (卒業する)、動詞 *tin* (信じる)の前に置かれる。

(15) a. *Con trai tôi đã tốt nghiệp năm ngoái.*

息子 私 PAST 卒業する 去年

私の息子は去年卒業した。

b. *Em đã tin anh.*

私 PAST 信じる あなた

私はあなたを信じた。

次は動詞の後ろに置く副詞 *rồi* (すでに)である。*Khóc rồi* (泣く+副詞 *rồi*=泣いた)、*cười rồi* (笑う+副詞 *rồi*=笑った)、*tốt nghiệp rồi* (卒業する+副詞 *rồi*=卒業した)、*tìm rồi* (探す+副詞 *rồi*=探した)、*tin rồi* (信じる+副詞 *rồi*=信じた)、*viết rồi* (書く+副詞 *rồi*=書いた)などとする。

(16a)、(16b)は動詞の後ろに置く副詞 *rồi* (すでに)の例文である。(16a)、(16b)の過去を表す副詞 *rồi* (すでに)はそれぞれ動詞 *tốt nghiệp* (卒業する)、動詞 *tin* (信じる)の後ろに置かれ、行為 *tốt nghiệp* (卒業する)、*tin* (信じる)が完了したことを表す。

- (16) a. Con trai tôi tốt nghiệp năm ngoái rồi.  
息子 私 卒業する 去年 すでに  
私の息子は去年すでに卒業した。
- b. Em tin anh rồi.  
私 信じる あなた すでに  
私はすでにあなたを信じた。

このように、行為の完了を表すため、副詞は動詞の前に置かれる場合と動詞の後ろに置かれる場合があるが、これ以外に、副詞 *đã* (PAST)と副詞 *rồi* (すでに)の両方が用いられる場合もある。この場合は上述した 2 つの場合より完了性が一層強調される。具体的には、(17a)、(17b)の例文のようになる。

- (17) a. Con trai tôi đã tốt nghiệp năm ngoái rồi.  
息子 私 PAST 卒業する 去年 すでに  
私の息子は去年すでに卒業した。
- b. Em đã tin anh rồi.  
私 PAST 信じる あなた すでに  
私はすでにあなたを信じた。

次はベトナム語の否定形式についてである。否定を表すために、否定詞 *không* (NEG)、あるいは、否定詞 *chẳng*<sup>2</sup> (NEG)が動詞の前に置かれる。

(18)は否定詞 *không* (NEG)が動詞 *ăn* (食べる)の前に置かれ、(19)は否定詞 *chẳng* (NEG)が動詞 *đi* (行く)の前に置かれた例文で、ともに否定文になる。

---

<sup>2</sup> *chẳng* は *không* と同様、否定の意味に用いられるが、*không* より強い否定を表す。

- (18) *Điệp không ăn sáng.*  
 ディエップ NEG 食べる 朝  
 ディエップさんは朝ごはんを食べない。
- (19) *Chủ nhật, hắn chẳng đi đâu.*  
 日曜日 彼 NEG 行く どこ  
 日曜日、彼はどこにも行かない。

以上のように、ベトナム語は孤立語で、「語形変化をしない」ため、アスペクトに関しては動詞の前に副詞を置く、あるいは、動詞の後ろに副詞を置くという2つの形式を持っている。

ベトナム語の文法面のもう1つの特徴は「語順」である。前述したように、ベトナム語の語順はSVO(主語+動詞+目的語/補語)である。語順は文法的な機能を果たすために重要である。つまり、語の並べ方によって様々な文法的機能を与えることができる。

(20)の例文を分析してみよう。

- (20) *Cô ấy sẽ viết thư cho chị cô ấy.*  
 彼女 FUT 書く 手紙 使役 姉 彼女  
 彼女は自分の姉に手紙を書く。

(20)例文を見ると、この文には2つの *cô ấy* (彼女)が存在している。しかし、この2つの *cô ấy* (彼女)の意味と役割は異なる。まず、最初の *cô ấy* (彼女)は、文の先頭に置かれるため、主格の役割を持ち、「彼女は」という意味である。しかし、最後の *cô ấy* (彼女)は、*chị* (姉)という名詞の後ろに置かれるので、所有格「彼女の」の意味になる。

次に、(21)の例文を分析してみよう。(21a)の *ảnh hưởng* (影響する)は、過去を表す副詞 *đã* (PAST)の後ろに置かれるため、この場合の *ảnh hưởng* (影響する)は動詞、あるいは、述語の役割を担うのに対し、(21b)の *ảnh hưởng* (影響)は、文の先頭に置かれるため、文の主格、あるいは、文の主語の役割を担う。

(21) a. Con bão đã ảnh hưởng rất lớn đến đời sống người dân.

台風 PAST 影響する とても 大きい TO 生活 人民  
台風が人々の生活にとっても大きく影響した。

b. Ảnh hưởng của cơn bão này sẽ rất lớn.

影響 の 台風 これ FUT とても 大きい  
この台風の影響はとても大きい。

このことから分かるように、ベトナム語では語の位置が重要な役割を担い、文法関係は主に語順によって示される。

### 1.2.3 ベトナム語の動詞

本節においては、ベトナム語の動詞の定義、動詞の分類、文における動詞の役割などについて述べる。

#### 1.2.3.1 ベトナム語の動詞の定義

ベトナム語の研究では、動詞の定義はそれぞれの言語研究者によって異なる。例えば、Nguyễn Kim Thân (1977:200) “Nghiên cứu ngữ pháp tiếng Việt (ベトナム語の文法の研究)”は、動詞は、活動、動き、行動、状態などといった過程を表す語であり、名詞と異なる文法的特徴を持つと主張している。同著の中で、Nguyễn Kim Thân (1977:200) “Nghiên cứu ngữ pháp tiếng Việt (ベトナム語の文法の研究)”は、ベトナム語の動詞は直接文の述語の役割を担い、名詞と異なり、数字や指定代名詞などの後ろに置くことができないとしている。

Đinh Văn Đức (1986:127・128) は、ベトナム語の動詞は、「走る」、「読む」のような行動や「眠る」、「目覚める」のような状態を表す語であるとしている。また、動詞の全体的意味は、運動の意味であると主張している。

Diệp Quang Ban ed. (1996)は、ベトナム語の動詞について以下のように定義している。

「動詞は過程の全体的意味を表す語である。過程の意味とは直接主体の運動のことである。それは行動を意味する。」

Diệp Quang Ban ed. (1996:103)、筆者訳

このように、動詞の定義は様々であるが、本研究では、「動詞は、行動、状態、過程を表す単語、あるいは、句である」とする。

### 1.2.3.2 ベトナム語の動詞の分類

Nguyễn Kim Thán (1977:9)は、ベトナム語では、文の述語としての役割を果たす品詞の割合は、動詞が 88%、形容詞が 4%、名詞が 8% ぐらいであるとしている。つまり、動詞はベトナム語において非常に重要な役割を果たしている。

ベトナム語の動詞の構成は以下のようになっている。

Nguyễn Kim Thán (1977)は、ベトナム語の動詞を音韻と意味の上から 2 種類に分けている。そして、音韻構成を、音節が 1 つだけある単音節語の動詞と 2 つ以上の音節を持つ複音節語の動詞の 2 種類に分類している。

まず、単音節語は音節が 1 つだけあるタイプで、đi (行く)、ăn (食べる)、uống (飲む)、đọc (読む)、học (学ぶ)、viết (書く)、ngủ (寝る)、nghỉ (休み)、yêu (愛する)などである。

(22)の học (学ぶ)と(23)の yêu (愛する)は、音節が 1 つだけの例文である。

(22) Tôi học tiếng Nhật 5 tiếng mỗi ngày .

私 勉強する 日本語 5 時間 毎日

私は毎日 5 時間日本語を勉強している。

(23) Tôi yêu Việt Nam.

私 愛する ベトナム

私はベトナムを愛している。

Nguyễn Kim Thán (1977)の音韻による分類の複音節語の動詞は、2 つ以上の音節を持つタイプである。Nguyễn Kim Thán (1977)は、このタイプの動詞を音節重複がある動詞と音節重複がない動詞の 2 つの種類に細分類した。

まずは音節重複がある動詞である。Nguyễn Kim Thán (1977)は、このタイプの動詞を更に全部重複語の動詞と一部重複語の動詞に細分類した。全部重複語の動詞は2つの音節が全く同じである。**Gâu gâu** (ワンワン鳴く)、**meo meo** (ニャーニャー鳴く)、**rào rào** (ざあざあ降る)、**oang oang** (がやがやする)などは、この動詞の例である。

一方、一部重複語の動詞は、2つの音節の一部が異なり、**vo ve** (ぶんぶんと音を出す)、**khúc khích** (くすくす笑う)、**lo lắng** (心配する)、**băn khoăn** (不安になる)、**lăn tăn** (曖昧にする)、**ăn năn** (後悔する)、**cần nhần** (文句を言う)、**hậm hực** (不満である)などがある。

具体的には以下の(24)、(25)を見てみよう。(24)の **meo meo** (ニャーニャー鳴く)は、**meo** の全部重複の例文で、(25)の **lo lắng** (心配する)は、音韻1つだけが重複する例文である。

(24) Con mèo *meo meo* này giờ. Chắc nó đói rồi.  
 猫 ニャーニャー さっき 多分 あいつ 空腹 すでに  
 猫がさっきからニャーニャーと鳴いている。多分おなかが空いたのだろう。

(25) Mẹ không cần *lo lắng*. Anh ấy sẽ sớm về.  
 母 NEG 要る 心配する 彼 FUT 早く 帰る  
 お母さん、心配しないで下さい。彼は早く帰るわ。

複音節語の動詞のもう1つの種類は音節重複がない動詞である。**Giết chóc** (殺す)、**quét tước** (掃く)、**dạy bảo** (教える)、**giải quyết** (解決する)、**hợp tác hóa** (協力化をする)などは、この動詞の例である。

(26)の **giải quyết** (解決する) と(27)の **quét tước** (掃く)は、音節重複がない動詞の例文である。

(26) Vấn đề này, tôi tự *giải quyết* được.  
 問題 この 私 自ら 解決する 使役  
 この問題は自分で解決することができる。

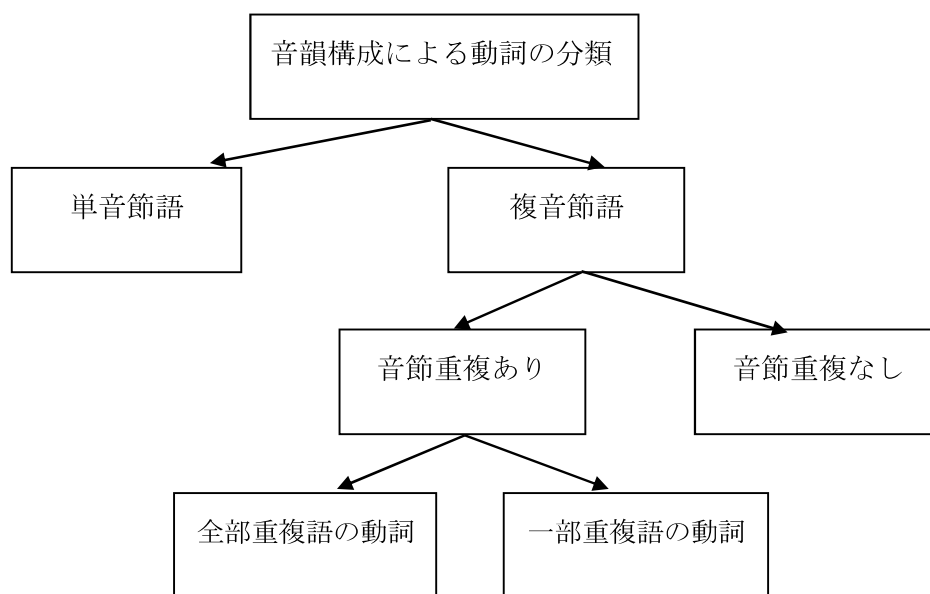
(27) Nhà sạch rồi nên không cần phải *quét tước*,  
 dọn dẹp gì nhiều.  
 家 きれい すでに 接続詞 NEG 要る なければならない 掃く、

掃除する 何 たくさん

家はすでにきれいだから、これ以上掃除する必要はない。

以下の図2は、Nguyễn Kim Thán (1977)の音韻による動詞の分類を示したものである。

図2 Nguyễn Kim Thán (1977)の音韻による動詞の分類



次は、意味による分類である。Nguyễn Kim Thán (1977)は意味構成により、動詞を単要素の動詞と多要素の動詞の2種類に分けている。

単要素の動詞は、1つだけの要素が意味を持ち、その要素は、同時に、文の述語になるという動詞であり、*nói* (言う)、*làm* (する)、*băn khoăn* (不安になる+Φ=不安になる)などがこのタイプの動詞である。

(28)の *làm* (する)と(29)の *băn khoăn* (不安になる)は、単要素の動詞の例文である。

(28) Anh đang làm gì đấy?

あなた PRE する 何 か

あなたは何をしているの？

(29) *Bố mẹ luôn băn khoăn về việc cưới xin của tôi.*

両親 いつも 不安 ABOUT こと 結婚 の 私

両親はいつも私の結婚に不安を感じている。

Nguyễn Kim Thân (1977)が意味構成から分類したもう 1 つの動詞は多要素の動詞である。このタイプは、2 つ以上の要素が意味を持つ動詞で、「複合動詞」、「PHA 動詞」、「CHAP 動詞」の 3 種類がある。

複合動詞は、本動詞として用いられる動詞が他の動詞、あるいは、形容詞と結合した動詞であり、4 つの種類に細分類されている。それらは、前項動詞と後項動詞の意味関係から「並立関係の動詞」、「支配関係の動詞」、「主従関係の動詞」、「関係動詞+名詞」という構造がある動詞である。

1 つ目の「並立関係の複合動詞」は、対等関係の 2 つの動詞から成るもので、*ăn uống* (食べる+飲む=飲食する)、*làm ăn* (する+食べる=生計をたてる)、*buôn bán* (買う+売る=売買する)、*cày cấy* (耕す+苗を植える=耕す)、*dụ dỗ* (勧める+誘う=勧誘する)、*chạy nhảy* (走る+跳ぶ=運動する)、*ca hát* (歌う+歌う=歌う)などである。

具体的には、(30)のように、動詞 *buôn* (買う)と動詞 *bán* (売る)は、同じ意味 (売買する)を持ち、対等な関係にある。

(30) *Anh buôn bán gì?*

あなた 買う 売る 何

あなたは何を売買しているの？

(31)の動詞 *ca* (歌う)と動詞 *hát* (歌う)も同じ意味 (歌う)を持ち、対等な関係である。

(31) *Cô ta ca hát suốt ngày.*

彼女 歌う 歌う 中 日



彼女は日中歌を歌っている。

2 つ目の「支配関係の複合動詞」は、*biết ơn* (分かる+恩恵=感謝する)、*dẫn đầu* (連れる、導く+頭=率いる)、*trả lời* (返す+言葉=答える)、*ra đời* (出る+人生=生まれる)、*vắng mặt* (空く+顔=欠席する)などである。「支配関係の複合動詞」では、前項要素は、行為を表す動詞で、後項要素は、前項要素の対象を表す名詞である。

具体的に言えば、(32)の複合動詞 *dẫn đầu* (率いる)では、前項要素 *dẫn* (連れる、導く)は「率いる」の行為を表す動詞で、後項要素の名詞 *đầu* (頭)は、*dẫn* (連れる、導く)の対象になる。

- (32) Con ngựa đang dẫn đầu là<sup>3</sup> con số 8.  
CLF 馬 PRE 連れる 頭 BE CLF 番号 8  
率いている馬は8番の馬である。

次の(33)に示した複合動詞 *vắng mặt* (欠席する)では、前項要素 *vắng* (空く)は「欠席する」の行為を表す動詞で、名詞 *mặt* (顔)は、*vắng* (空く)の対象になる。

- (33) Hôm nay, Nam lại vắng mặt.  
今日 ナム また 空く 顔  
今日、ナムさんはまた欠席する。

3 つ目の「主従関係の複合動詞」には、*đánh đổ* (打つ+倒れている=打倒す)、*đánh gục* (打つ+倒れている=打倒す)、*đập tan* (叩く+崩れている=粉碎する)、*đẩy lùi* (押す+後退する=退ける)、*thu hẹp* (狭める+狭い=狭める)、*mở rộng* (開ける+広い=拡大する)、*nâng cao* (上げる+高い=向上する) などがある。これらの前項要素が主動詞で活動を表し、後項要素が前項要素の結果、あるいは、状態を表す。

---

<sup>3</sup> ベトナム語の動詞 *là* は、文の主語と述語の間に置かれ、前者と後者の役割を表す。また、ある物/人/ことを定義するのに用いられる動詞である。例としては、*Tôi là Văn.* (私+動詞 *là*+ヴァン=私はヴァンです) が挙げられる。

(34)に示した複合動詞 *đập tan* (粉碎する)では、前項要素 *đập* (叩く)は、文の主動詞で、「叩く」という様態を表し、後項要素 *tan* (崩れる)は、前項要素 *đập* (叩く)の結果になる。

- (34) *Chúng ta hãy cùng nhau đập tan quân xâm lược.*  
私たち ください 一緒に 叩く 崩れる 侵略者  
私たちは一緒に侵略者を粉碎しよう。

(35)でも、前項要素 *mở* (開ける)が文の主動詞で、「開ける」という様態を表し、後項要素 *rộng* (広い)が前項要素 *mở* (開ける)の結果になる。

- (35) *Tôi phải mất nhiều tiền để mở rộng mối quan hệ.*  
私 なければならぬ かかる たくさん お金 ため 開ける 広い  
人脈  
人脈を広げるためには、お金がたくさんかかる。

4つ目は、「関係動詞<sup>4</sup>+名詞」という構造を持つ複合動詞である。このタイプは、前項要素は関係動詞で、後項要素は名詞である。しかし、複合動詞になると、関係動詞の本来の意味がなくなる。*Làm gái* (する+女=売春する)、*làm khách* (する+客=遠慮する)、*làm biếng* (する+怠ける=怠ける)、*đánh bạn* (打つ、叩く+友達=友達になる)などはこのタイプの例である。

以下の(36)の例文では、前項要素 *làm* は関係動詞で、本来の意味は「する」で、後項要素 *khách* は名詞で、本来の意味は「お客」である。動詞と名詞を結合した複合動詞 *làm khách* の意味は、関係動詞の本来の意味がなくなり、「遠慮する」の意味になる。

- (36) *Xin hãy ăn tự nhiên. Đừng làm khách.*

---

<sup>4</sup> ベトナム語の関係動詞は、自動詞であり、後ろの名詞と結合し、主語の役割/仕事などを明らかにする。このタイプの動詞の数は少なく、*làm* (する)、*hóa* (なる)、*trở nên* (なる)、*trở thành* (なる)、*thành ra* (なる)、*y như* (似ている)、*hệt như* (似ている)などである(cf. Nguyễn Kim Thân (1977))。例えば、*Bố tôi làm bác sỹ* (父+私+関係動詞 *làm* (やる)+医者=私の父は医者だ)では、関係動詞 *làm* (する)は、主語 *bố tôi* (私の父)の仕事指定する役割を担う。

ください 食べる 自然 ないで する 客  
どうぞ遠慮なくたくさん召し上がってください。

次の(37)の複合動詞 *đánh bạn* (友達になる)では、前項要素 *đánh* (叩く)は関係動詞の役割を担い、後項要素の名詞 *bạn* (友達)と結合すると、「叩く」の意味がなくなり、「友達になる」という意味になる。

(37) Từ ngày *đánh bạn* với quan nhà, tôi mới được học.

(Nguyễn Công Hoan 1957:186)

から 日 叩く 友達 と あなた 私 始める 使役 勉強する  
あなたと友達になってから、私は勉強させてもらった。

以上、Nguyễn Kim Thán (1977)が意味の面から分類した複合動詞を説明した。

次に、Nguyễn Kim Thán (1977)が3つに分類した多要素の動詞の2つ目、PHA動詞について述べる。PHA動詞とは何かを混ぜ合わせた後、本来の性質がなくなる動詞である。そのため、PHA動詞は2つの要素の結合からできた動詞である。そのうち、1つの要素は本来の語彙的な意味を持つのに対し、もう1つの要素は、語彙的な意味を持たない。PHA動詞は「重複語」、「強意」、「並立関係がある特別な複合動詞」の3つの種類に分けられている。

1つ目のPHA動詞「重複語」は、前項要素のみ語彙的な意味を持ち、後項要素は語彙的な意味を持たない。例としては、*bắt bớ* (逮捕する+Φ=逮捕する)、*bàn bạc* (相談する+Φ=相談する)、*gặp gỡ* (会う+Φ=会う)、*làm lụng* (する+Φ=する、働く)、*lo lắng* (心配する+Φ=心配する)、*tắm tấp* (浴びる+Φ=浴びる)、*trồng trọt* (植える+Φ=植える)などが挙げられる。

(38)の例を見ると、*bàn bạc* (相談する)の構造の前項要素 *bàn* は、「相談する」の本来の語彙的な意味を持ち、後項要素 *bạc* は、語彙的な意味を持たない。

(38) Vấn đề này, chúng ta hãy cùng nhau *bàn bạc*.

問題 この 私たち ください 一緒に 相談する Φ  
この問題について、一緒に相談しましょう。

(39)の例文の *tắm táp* (浴びる)の構造の前項要素 *tắm* は、「浴びる」の本来の語彙的意味を持ち、後項要素 *táp* は、語彙的な意味を持たない。

(39) Công việc bận rộn, chẳng có thời gian tắm táp.

仕事 忙しい Φ NEG ある 時間 浴びる Φ

仕事が忙しくて、シャワーを浴びる時間もない。

2つ目の PHA 動詞「強意」は、前項要素は動詞で、本来の意味を持ち、後項要素は、語彙的な意味を持たない。重複語とは異なり、この種類の後項要素は、前項要素と結合し、前項要素に感情、動作、状態等を加え、強める、つまり、前項要素を強調する役割を担う。例として、*nhắm nghiền* (閉じる+Φ=閉じる)、*trời nghiền* (結束する+Φ=結束する)、*há hóc* (開ける+Φ=開ける)、*tắt ngấm* (消える+Φ=消える)、*lăn kèn* (転がる+Φ=転がる)などがある。

具体的に、例文を分析してみよう。(40)では、前項要素 *nhắm* は動詞で、「閉じる」の本来の意味を持ち、後項要素 *nghiền* は、具体的な意味を持たない。しかし、*nhắm* (閉じる)と組むと、*nghiền* (Φ)は「しっかり」という意味合いを持ち、*nhắm nghiền* は「しっかり閉じる」という意味になる。このように、後項要素 *nghiền* (Φ)は、前項要素 *nhắm* (閉じる)の行動を強める。

(40) Mắt nhắm nghiền, đầu lắc lư theo tiếng nhạc.

目 閉じる Φ 頭 うなずいて (ゆれる) 通り 音 音楽

目をしっかり閉じて、頭が音楽の音通りにうなずいて (ゆれて) いる。

(41)では、前項要素 *tắt* は動詞で、「消える」の本来の意味を持ち、後項要素 *ngấm* は、具体的な意味を持たない。しかし、*tắt* (消える)と組むと、*ngấm* (Φ)は「全体に及ぶ」という意味合いを持ち、*tắt ngấm* は「全部消えた」という意味になる。このように、後項要素 *ngấm* (Φ)は、前項要素 *tắt* (消える)の状態を強調する。

(41) Giờ thì tắt ngấm mọi hi vọng.

今 機能語 消える Φ 全部 希望

今は全ての希望が消えた。

3つ目の PHA 動詞「並立関係がある特別な複合動詞」の特徴は、他の PHA 動詞と同様、前項要素は動詞で、本来の語彙的な意味を持つが、他の 2 つの PHA 動詞と異なり、後項要素も語彙的な意味を持ち、独立の要素になり、前項要素と対等な関係があるという点である。しかし、「語彙的な意味を持つ」と言っても、「並立関係がある複合動詞」とは異なり、このタイプの PHA 動詞の後項要素は、古代のベトナム語 (漢—越)、あるいは、ベトナムの中のいくつかの民族の言語だけに限られる。

具体的には、(42)の例文に見られるように、(42a)の *lo âu* (心配する)の *lo* (心配する) と *âu* (心配する)は対等の関係がある。この *lo âu* (心配する)は、(42b)に示すように、前項要素 *lo* (心配する)は、独立の要素になるのに対し、(42c)のように、後項要素 *âu* (心配する)は独立の要素になれないため、(42c)は不適格文になる。しかし、この後項要素 *âu* (心配する)は、(42d)のようなベトナム語の古代の詩で単純語として使われた。

- (42) a. *Đừng có lo âu, nghĩ ngợi nhiều.*  
ないで ある 心配する 心配する 考える Φ たくさん  
あまり心配しないでください。
- b. *Tôi tự về được, đừng có lo.*  
私 自分 帰る 使役 ないで ある 心配する  
私は一人で帰れるから、心配しないでください。
- c. *\*Tôi tự về được, đừng có âu.*  
私 自分 帰る 使役 ないで ある 心配する
- d. *Tơ hào chưa báo, hãy còn âu.* (Quốc âm thi tập<sup>5</sup>:1868)  
復讐 まだ する ください まだ 心配する  
まだ復讐をしていないから、心配です。

<sup>5</sup> Quốc âm thi tập (国家の詩集)は1986年、Nguyễn Trãiによって書かれたベトナムの chữ nôm (字喃)の最古詩である。

(42)と同様、(43a)の *hỏi han* の *hỏi* (聞く) と *han* (聞く) は対等な関係にある 2 語から成り立っているが、(43b)に示すように、前項要素 *hỏi* (聞く) は、独立の要素になるのに対し、(43c)のように、後項要素 *han* (聞く) は独立の要素にならない。しかし、この後項要素 *han* (聞く) は(43d)のように、ベトナム語の古代の詩で単純語として使われた。

- (43) a. *Hết giờ hỏi han chuyện gia đình rồi.*  
ない 時間 聞く 聞く こと 家族 すでに  
すでに家族の事を聞く時間がなくなった。
- b. *Hỏi gì, hỏi đi.*  
聞く 何 聞く 命令形  
聞きたいことは聞いてください。
- c. \**Han gì, han đi.*  
聞く 何 聞く 命令形
- d. *Hai em hỏi trước, han sau.* (Truyện Kiều<sup>6</sup>: 1814-1820)  
NUM お前 聞く 前 聞く 後  
あなたたち二人は聞き、また聞いている。

Nguyễn Kim Thản (1977)が3つに分類した多要素の動詞の最後は、CHAP 動詞である。CHAP とは、ある分解している2つの要素を合わせて、1つの固まりにすることを表す。

CHAP 動詞の1つの要素は、語彙的な意味を持ち、もう1つの要素は、文法的な機能を持つ。特に、本動詞として用いられる動詞が他の自動詞と結合し、その自動詞を他動詞化する文法的機能を持っているものが多い。

文法的機能を持つ動詞 *đánh* (叩く/打つ)を見てみよう。動詞 *đánh* (叩く/打つ)は、本来の意味は「人を叩く」、「太鼓を打つ」という意味を持っている。しかし、(44)のように、動詞 *đánh* (叩く/打つ) が自動詞 *roi* (落ちる)と結合すると、本来の意味「叩く/打つ」がなくなり、自動詞 *roi* (落ちる)を他動詞化し、他動詞 *đánh roi* (落とす)となる。

---

<sup>6</sup> *Truyện Kiều* (キエウ氏の物語)は1820年、Nguyễn Duによって書かれたベトナムの *chữ nôm* (字喃)の叙事詩である。

(44) *Đừng đánh rơi chìa khóa nhà nữa nhé.*

NEG 叩く 落ちる CLF 鍵 家 また 感嘆詞

家の鍵をもう二度と落とさないでくださいね。

*Đánh rơi* (叩く/打つ+落ちる=落とす) 以外に、*đánh bẩn* (叩く/打つ+汚れる=汚す)、*đánh rụng* (叩く/打つ+落ちる=落とす)、*đánh vỡ* (叩く/打つ+割れる=割る)、*đánh thức* (叩く/打つ+起きる=起こす)も、自動詞から他動詞になる例である。(45)のように、動詞 *đánh* (叩く/打つ)は、自動詞 *thức* (起きる)と結合して、他動詞となり、「起こす」という意味になる。

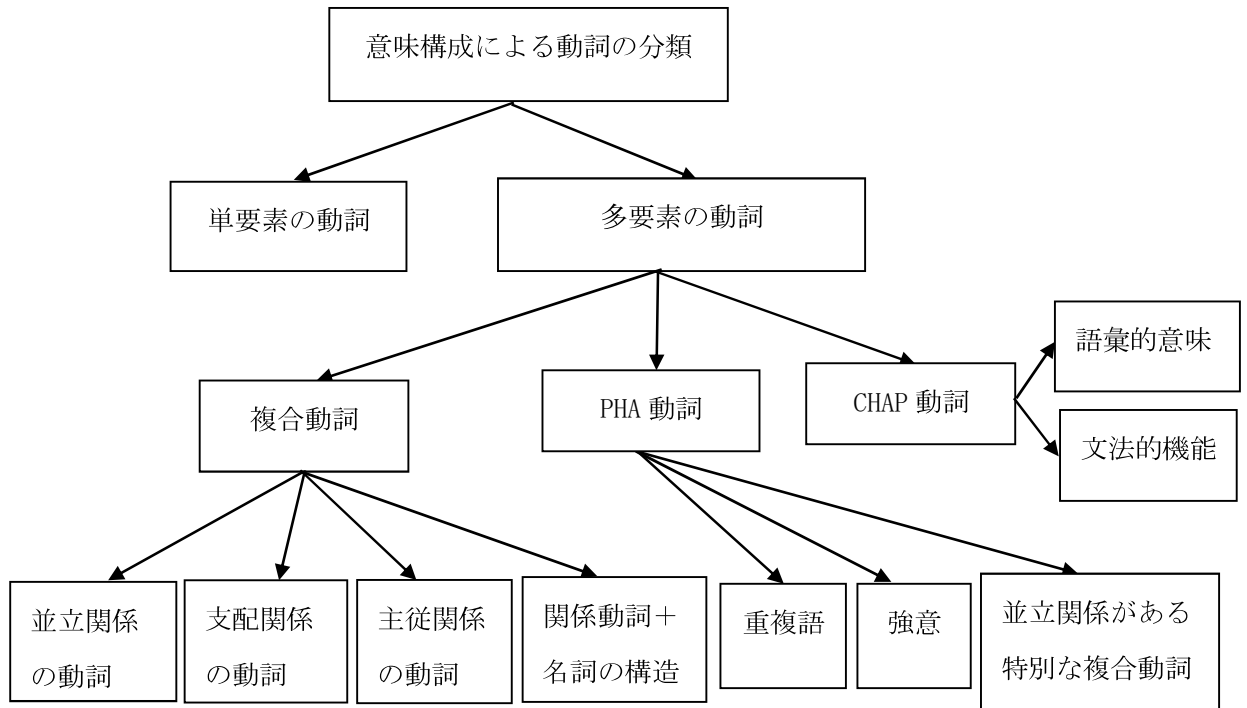
(45) *Mai là chủ nhật, không cần đánh thức tôi.*

明日 機能語 日曜日 NEG 要る 叩く 起きる 私

明日は日曜日だから、私を起こさないでください。

上述した Nguyễn Kim Thân (1977)の意味面による動詞の分類を以下の図3で示す。

図3 Nguyễn Kim Thân (1977)の意味構成による動詞の分類



### 1.2.3.3 ベトナム語の動詞の意味的特徴と文法的特徴

ベトナム語の動詞の意味的特徴について、Nguyễn Kim Thân (1977:23・24)は、動詞は過程を表す、つまり、過程内の様態、あるいは、状態を表すとしている。

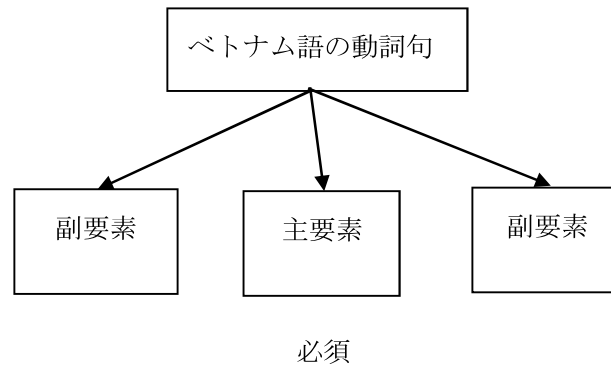
ベトナム語の動詞は文法面においては、述語、補語、副詞などの役割を担う。その内、主な役割は文の述語となることである (cf. Đinh Văn Đức (1986:132))。補語や副詞の役割を担う動詞は、句の中心動詞に関連する助動詞である。

形式面を見ると、ベトナム語の動詞は多様で豊かな活用をする。この様々な活用は、動詞句の構造で表現される。

ベトナム語の動詞句は、主要素と副要素を含む文法構想である。この内、主要素は文の中心で、副要素は主要素の前、あるいは、後ろに置かれる。副要素は省略されることがあるが、主要素は必須の要素で、省略されない。動詞句の主要素と副要素の関係を以下の図4で示す。



図4 ベトナム語の動詞句の構造



具体的には、以下の(46)を見てみよう。

(46) *Hồng đang đọc sách.*

ホン PRE 読む 本

ホンさんは本を読んでいる。

(46)では、*đang đọc sách* (PRE+読む+本)は動詞句である。この内、動詞句の主要素は中心動詞 *đọc* (読む)で、副要素は副詞 *đang* (PRE)と名詞 *sách* (本)である。

(47)でも、*đã về nước* (PAST+帰る+国)は動詞句である。この内、動詞句の主要素は中心動詞 *về* (帰る)で、副要素は副詞 *đã* (PAST)と名詞 *nước* (国)である。

(47) *Nụ đã về nước.*

ヌ PAST 帰る 国

ヌさんは国へ帰った。

主要素が省略されないのは、ベトナム語の動詞句の1つの特徴である。

ベトナム語の動詞句のもう 1 つの特徴は、副要素に関する問題である。ベトナム語の動詞句の副要素は、置く位置が決まっているものがある。主要素の前に置くものは副詞 *sẽ* (FUT)、*đang* (PRE)、*đã* (PAST) で、主要素の後ろに置くものは副詞 *rồi* (すでに) である。

一方、固定的位置に置かない副要素もある。つまり、このタイプの副要素は、動詞句の主要素(主動詞)の前に置くことも、主要素(主動詞)の後ろに置くこともある。

(48)は、置く位置が決まっていない例文である。(48a)の動詞句 *chạy băng băng* (軽快に走る)の副要素の役割を担う副詞 *băng băng* (軽快に) は、動詞句の主要素 *chạy* (走る) の前に置くことができ、(48b) の動詞句 *băng băng chạy* (軽快に走る) のように副要素 *băng băng* (軽快に) は、動詞句の主要素 *chạy* (走る) の前に置くこともできる。

(48) a. Xe buýt chạy băng băng.

バス 走る 軽快に

バスが軽快に走る。

b. Xe buýt băng băng chạy.

バス 軽快に 走る

バスが軽快に走る。

ベトナム語の動詞句の特徴は、主動詞の後ろに置く副要素が名詞、副詞以外に、動詞もあることである。例えば、*Nam chạy ra* (ナム+走る+出る=ナムさんは飛び出す)の動詞句 *chạy ra* (飛び出す)では、主要素は動詞 *chạy* (走る)で、副要素は動詞 *ra* (出る)である。これについては、本論の 2 章で詳述する。

#### 1.2.4 ベトナム語の前置詞句

斎藤 (2010)は、ほとんどの場合、SVO と VSO のタイプの言語は前置詞を持つとしている。SVO の語順を持つベトナム語も前置詞を持つ。

前置詞の定義について、Nguyễn Hoàng Phương (2010:130)は、前置詞は主部と補部の関係を示すのに用いられる単語であるとしている。Nguyễn Hoàng Phương (2010)の定義に基づき、以下の例(49)を見てみよう。

- (49) a. Người yêu của tôi  
 恋人 OF 私  
 私の恋人
- b. Ăn bằng đũa  
 食べる BY 箸  
 箸で食べる

(49a)の前置詞は của (OF) で、(49b)の前置詞は bằng (BY)である。(49a)では、前置詞 của (OF) は、主部 người yêu (恋人)と補部 tôi (私)の間に置かれ、これらの関係、つまり、所有の関係を表す。(49b)では、前置詞 bằng (BY)は、主部 ăn (食べる)と補部 đũa (箸)の間に置かれ、これらの関係、つまり、手段を表す。

前置詞の定義だけでなく、Nguyễn Hoàng Phương (2010:132)は、前置詞を本来の前置詞と名詞や動詞から転成した前置詞の 2 種類に分類している。

ベトナム語の本来の前置詞は tại (DUE TO)、bởi (BECAUSE)、vì (CAUSE)、từ (FROM)、tuy (THOUGH)、mặc dầu (ALTHOUGH)、nếu (IF)、dù (THOUGH)の 8 個である。一方、名詞から転成した前置詞には、của (OF)、trên (ABOVE)、dưới (UNDER)、trước (BEFORE)、sau (AFTER)、trong (IN)、ngoài (OUT)、giữa (MIDDLE)などがあり、動詞から転成した前置詞は、cho (FOR)、ở (AT)、đến (TO)、tới (TO)、vào (INTO/IN)、ra (OUT)、lên (UP)、xuống (DOWN)である (Nguyễn Hoàng Phương 2010:132)。

さらに、Nguyễn Hoàng Phương (2010:134)は、前置詞を意味面から意味を 1 つしか持たない前置詞と様々な意味を持つ前置詞の 2 種類に分類している。意味を 1 つしか持たないのは、máy tính của Lan=コンピューター+OF+ラン (ランさんのコンピューター)のような所有の意味を持つ của (OF)や sang Nhật để kiếm tiền=渡る+日本+TO+稼ぐ+お金 (日本へお金を稼ぎに行く)のような目的の意味を持つ để (TO)などである。

一方、様々な意味を持つものには、đến trường bằng taxi=来る+学校+BY+タクシー (タクシーで学校へ行く)、原料の意味を持つ bàn làm bằng gỗ=テーブル+作る+BY+木 (木で作られるテーブル)の前置詞 bằng (BY)、目的の意味を持つ gửi thư cho giáo sư=送る+メール+FOR

+教授 (教授にメールを送る)、受取者を表す意味の *mẹ mua cho tôi*=母+買う+FOR+私 (母が私に買ってくれる)の前置詞 *cho* (FOR)などがある。

次は、ベトナム語の前置詞句についてである。Nguyễn Hoàng Phương (2010:136)によれば、文法的には、前置詞句は前置詞と補語を含む構文であり、この構文は文の副詞や述語などの文法的な役割を果たす。以下の(50a、b)を分析していこう。

(50) a. *Vì mệt, tôi không đến trường được.*

(Nguyễn Hoàng Phương 2010:136)

BECAUSE 疲れる 私 NEG 来る 学校 られる  
疲れたから、学校へ行かなかった。

b. *Cái hộp này bằng vàng.* (Nguyễn Hoàng Phương 2010:136)

CLF 箱 これ BY 金  
この箱は金でできている。

(50a)の前置詞句 *vì mệt* (疲れたから)は、前置詞 *vì* (BECAUSE) と補語の役割を担う動詞 *mệt* (疲れる) から成り立ち、副詞の役割を担う。しかし、(50b)の前置詞句 *bằng vàng* (金で)は、前置詞 *bằng* (BY) と補語の役割を担う名詞 *vàng* (金) から成り立ち、副詞の文の述語の役割を担う。

ベトナム語の前置詞句には 1.2.3.3 で述べた動詞句と同様、句の主部と句の補部がある。前置詞句における主部は前置詞で、補部は前置詞の後ろに置く要素である。例えば、(50a)の前置詞句 *vì mệt* (疲れたから)では、句の主部は前置詞 *vì* (BECAUSE) で、句の補部は動詞 *mệt* (疲れる)である。また、(50b)の前置詞句 *bằng vàng* (金で)では、句の主部は前置詞 *bằng* (BY)で、句の補部は名詞 *vàng* (金)である。

ベトナム語の前置詞句の構造には、主部と補部以外に、*một vài tháng trước lễ cưới* (数カ月+BEFORE+結婚式=結婚式前の数カ月)の *một vài tháng* (数カ月) や *ngay sau bữa tối* (すぐに+AFTER+夜食=夜食後すぐに)の *ngay* (すぐに)のような修飾要素もある。

### 1.3 日本語における理論的根拠

本節においては、本研究に関する日本語の時制、格助詞、アスペクトについて述べる。

#### 1.3.1 日本語の時制 (テンス)

上述したように、ベトナム語は孤立語であるため、「語形変化しない」で、時制は、動詞の前に置かれ、あるいは、動詞の後ろに置かれる副詞で表現される。これに対し、日本語は膠着語で、「語形変化する」言語である。この「語尾が変化する」ということが日本語の時制においてはどのように表現されるかを見て行こう。

小泉 (1993:87)は、日本語のテンスを2分類している。1つは、発話時(現在)を基準とした時間関係により、もう1つは、「発話の現在」より以前の過去、つまり、過去時の出来事となる。それらは、それぞれ「非過去形」と「過去形」のテンスと呼んでいる。

具体的には、発話時(現在)を基準とした時間関係による場合、日本語の動詞「します」は形としては「した」と「する」であり、「した」が過去形で、「する」が現在形と未来形をかねる。進行中の動作を表す場合、「している」という表現が用いられる。

また、「過去形」と「非過去形」の分類では、「～た」は「過去形」を表し、「～る」、「～ている」は「非過去形」を表す。(51a)の動詞「行われた」は、過去の時制の例文で、(51b)の動詞「行われる」は、非過去の時制の例文である。

- (51) a. [過去形] 1992年にバルセロナでオリンピックが行われた。(小泉 1993:119)  
b. [非過去形] オリンピックは4年ごとに行われる。(小泉 1993:119)

さらに、過去形と同様、小泉 (1993:120)は、否定形にも、過去と非過去の対立があるとす。 (52a)の動詞「行かなかった」は、過去の時制の否定形の例文で、(52b)の動詞「できていない」は、非過去の時制の否定形の例文である。

- (52) a. [過去形] きのう、音楽会に行ったかね。(小泉 1993:120)  
行かなかった。  
b. [非過去形] もう、出かける用意ができたかね。(小泉 1993:120)  
まだ、できていない。

一方、日本語では動詞だけでなく、形容詞も「赤かった」のような過去を表す形があり、「赤い」のような非過去の形がある。また、動詞と同様、形容詞の否定形にも、「赤くなかった」のような過去と「赤くない」のような非過去の時制がある。

更に、名詞にも「雨だった」のような過去を表す形があり、「雨だ」のような非過去の形がある。名詞の否定形には、「雨ではなかった」の過去形と「雨ではない」の非過去形の2つの表現がある。

### 1.3.2 日本語の品詞

日本語の品詞には名詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞、助詞、助動詞、感動詞類がある。

しかし、斎藤 (2010)は日本語の品詞を内容語と機能語に分類している。斎藤 (2010)の分類は以下のようになっている。

「内容語 (content word)とは、「イヌ」や「読む」のように語彙的意味を持つもので、新たに加えられる語や使われなくなって消失する語である。それに対して機能語 (function word, grammatical word)というのは代名詞、後置詞/前置詞、冠詞といった文法的な働きをする語で、新たに加えたり減らしたりすることはできない。したがって、前者は開かれた類 (open class)、後者は閉じられた類 (closed class)といえる。」

斎藤 (2010:52)

### 1.3.3 日本語の格助詞

日本語のように目的語の後に動詞が来る SOV タイプの言語では後置詞が用いられる。後置詞は助詞とも呼ばれている。

小泉 (1993:181・182)は、日本語の助詞を「テレビはどの家にもある。」の格助詞「に」と副助詞「も」の2種類に分類している。格助詞は、動詞が名詞を支配するとき、その名詞に付与する役割を表す語であるのに対し、副助詞は、格助詞にある意味を添加する助詞であるとしている(小泉 (1993:182))。

本研究は副助詞には言及しないため、格助詞のみについて述べる。小泉 (1993:182-184)によれば、日本語の格助詞は主格「が」、対格「を」、与格「に」、離格「から」、供格「と」、

具格「で」、向格「へ」、到格「まで」、比格「より」の9種がある。これらの格助詞の役割と例文を以下の表1に示す。

表1 日本語の格助詞の役割

No.	格助詞の名称	格助詞の役割	例文
1	主格「が」	行為者もしくは状態の対象を指す。	1. 赤ちゃんが笑った。〔行為者・行為構造の行為者〕 (小泉 1993:182) 2. まわりが静かだ。〔対象・形相構造の行為〕 (小泉 1993:182)
2	対格「を」	行為の目標を主に表すほか、起点なども表す。	1. 夫が妻をなぐった。〔行為の目標〕 (小泉 1993:183) 2. 日本人は自然を愛する。〔感情の対象〕 (小泉 1993:183) 3. 行列が橋を渡った。〔経路〕 (小泉 1993:183) 4. 朝早くに家を出た。〔起点〕 (小泉 1993:183)
3	与格「に」	着点を中心だが、起点ともなる。	1. 東京に姉がいる。〔位置〕 (小泉 1993:183) 2. 夜遅く東京に着いた。〔着点〕 (小泉 1993:183) 3. 淀川は源を琵琶湖に発する。〔起点〕 (小泉 1993:183)
4	離格「から」	離格は起点格に相当する。	1. 船は横浜から出航した。〔起点〕 (小泉 1993:183) 2. 友人はつまらぬことから失敗した。 〔起点→原因〕 (小泉 1993:183) 3. ウィスキーは小麦から作られる。 〔起点→原料〕 (小泉 1993:183)
5	供格「と」	主として、共同動作の相手を表す。	1. 公園で恋人と会った。〔相手〕 (小泉 1993:184) 2. 春子は秋子と同じ年だ。〔同等〕 (小泉 1993:184)

6	具格「で」	具格は位置格から派生したものである。	1. 講演は公会堂で行われた。 [位置→場所] (小泉 1993:184) 2. 金槌で針をたたく。 [位置→道具] (小泉 1993:184) 3. 母親は病気で入院した。 [起点→原因] (小泉 1993:184)
7	向格「へ」	着点もしくはその方向を表す。	1. 夜半に目的地へ着いた。 [起点] (小泉 1993:184) 2. 東へ30キロ行った地点。 [起点→方向] (小泉 1993:184)
8	到格「まで」	限界を持つ着点を指す。	1. 新幹線は博多まで延びた。 [着点] (小泉 1993:184) 2. 午後の5時まで待ってみた。 [時間的着点] (小泉 1993:184)
9	比格「より」	比較と時間の起点を示す。	1. 春子は夏子より若い。 [起点→比較の準備] (小泉 1993:184) 2. 4月1日より桜祭りが始まる。 [時間的起点] (小泉 1993:184)

小泉 (1993:182-184)を参照し筆者作成

本研究に関する対格「を」、与格「に」、離格「から」、向格「へ」、到格「まで」をそれぞれ「を」格、「に」格、「から」格、「へ」格、「まで」格と呼び、分析していく。

#### 1.3.4 日本語の相 (アスペクト)

斎藤 (2010:88)は、動詞の表す動作の様相を相 (アスペクト) と呼んでいる。また、小泉 (1993)、斎藤 (2010)は、日本語の時制はただ過去形や非過去形を表すだけでなく、アスペクトを表すことにも用いられるとしている。

例えば、(53a)の非過去形「回る」は一般的な真理を表し、(53b)の非過去形「出る」は習慣を表す。



- (53) a. [真理] 地球は太陽のまわりを回る。(小泉 1993:119)  
b. [習慣] 毎朝 8 時に家を出る。出る。(小泉 1993:119)

#### 1.3.4.1 完了と未完了

日本語では、動詞の過去形は過去を表すだけでなく、完了的な意味も含んでいる(cf. 斎藤 (2010:88))。例えば、(54a)の A では、過去形「食べた」は、過去の意味を表すのに対し、(54b)の A では、過去形「食べた」は、完了の意味を表す。

- (54) a. [過去] A 「きのう朝ごはん食べた？」 斎藤 (2010:89)  
B 「いや、食べなかった。」  
b. [完了] A 「もう朝ごはん食べた？」 斎藤 (2010:89)  
B 「いや、まだ食べていない。」

もう 1 つの例文を見てみよう。(55)の過去形「行った」は「あした」と組み合わさっているから、この場合、「行った」は、過去の意味を持たず、完了の意味を持つ。

- (55) あした新宿に行ったとき、新宿駅のキヨスクで飲み物を買おう。斎藤 (2010:88)

上記の例文では、行為の完了、あるいは、未完了を区別することができるが、不明な場合がある。それを、次の小泉 (1993:123)の例文を分析してみよう。

- (56) a. [完了的] 昨夜この本を読んでしまった。(小泉 1993:123)  
b. [未完了的] 昨夜この本を読んだ。(小泉 1993:123)

(56a)の「読んでしまった」は、過去と完了を表すが、(56b)の「読んだ」は、本を読み終えたかどうか不明であるから、未完了的である。この場合、「読む」という行為は、開始の起動相「読み始める」、持続の持続相「読み続ける」、終始の終結相「読み終える」という 3 局面

がある(小泉 1993:123)。この3つのアスペクトは、「～し始める」、「～し続ける」、「～し終える」のような動詞の複合形で表される。

小泉(1993)は、この起動相、持続相、終結相に分解できる動詞を「継続動詞」と呼んでいる。一方、行為の持続部を持たず、行為の開始と終結が直結した動詞を「瞬間動詞」と呼んでいる。

1.2.2で述べたように、ベトナム語では、副詞 *đã* (PAST)、副詞 *rồi* (すでに)は、過去と完了のアスペクトを表すのに用いられる。しかし、これらの副詞は未完了のアスペクトも表す。

(57a)、(57b)は、それぞれ、過去形 *đã* (PAST)、*rồi* (すでに)の例文であるが、これらの副詞は、ただ過去の意味のアスペクトを表し、レポートを書き終えたかどうかは不明である。つまり、この場合、過去形 *đã* (PAST)、*rồi* (すでに)は未完了的である。

(57) a. Tôi *đã* viết báo cáo.

私 PAST 書く レポート  
私はレポートを書いた。

b. Tôi viết báo cáo *rồi*.

私 書く レポート すでに  
私はすでにレポートを書いた。

上の(57a)、(57b)のような完了的アスペクトを表すため、ベトナム語では(58a)、(58b)のような終結相を表す副詞 *xong* (終わった/終えた)が動詞 *viết* (書く)の後ろに置かれる。そして、複合形「書き終えた」で完了相を表す。

(58) a. Tôi *đã* viết *xong* báo cáo.

私 PAST 書く 終えた レポート  
私はレポートを書き終えた。

b. Tôi viết *xong* báo cáo *rồi*.

私 書く 終えた レポート すでに  
私はすでにレポートを書き終えた。

このことから、ベトナム語と日本語の動詞はともに、過去形は完了相と未完了相を表すことがわかる。

#### 1.3.4.2 「ている」型

小泉 (1993:124)によれば、「ている」型は、現在時における、ある行為の継続、もしくは、ある行為の結果を表す表現である。継続動詞であれば、「ている」型は行為の継続進行を示し、瞬間動詞であれば、その行為の結果状態を意味すると述べている。(59)を見てみよう。

- (59) a. [継続相] 広場で子供が遊んでいる。(小泉 1993:124)  
b. [結果相] 時計が止まっている。(小泉 1993:124)

(59a)の「遊ぶ」は継続動詞である。しかし、継続相の「遊んでいる」と持続相の「遊び続ける」とは意味が異なる。持続相の「遊び続ける」は、開始された行為が持続しているという意味であり、起動相の「遊び始める」が前提となっているのに対し、継続相は、その起動相を前提としてはおらず、現在「遊ぶ」という行為が進行中であることのみを表す。

(59b)の「止まる」は瞬間動詞である。「止まる」には持続部がないから、これを引き延ばすわけにはいかない。「止まる」は、行為の終結部を表す。つまり、「止まる」は、行為の完了した状態の継続、言い換えると、完了した行為の結果を意味しているので、「結果相」と呼ばれている(小泉 1993:124)。

しかし、「継続相」にも「結果相」にも用いられる(60)の「散る」のような動詞がある。

- (60) a. [継続相] 風に吹かれて、桜の花が散っている。(小泉 1993:125)  
b. [結果相] 庭に桜の花が散っている。(小泉 1993:125)

(60)の「散る」のように、ある物から離れて、位置を移動し、(61a)の着物を「着る」のように様相の変化を伴う継続動詞は、(61b)の始動部と持続部が終結部に圧縮されると、結果相になる。

- (61) a. [継続相] 花嫁はいま着物を着ている。(小泉 1993:125)  
b. [結果相] あの人ははでな着物を着ている。(小泉 1993:125)

さらに、小泉(1993:125)は、状態動詞の「そびえる」や「似る」は「ている」形で状態相を表すとしている。これは(62)の例文に示した。

- (62) a. [状態相] 山がそびえている。(小泉 1993:125)  
b. [状態相] 母親に似ている。(小泉 1993:125)

以上から、日本語の「～ている」は、動作の進行と結果の持続を表すことがわかる。

ベトナム語でもこれに対応する意味を表すことができるが、日本語と形の上で一致しない。例えば、動作の進行を表すには、日本語「息子は泳いでいる」は、ベトナム語に対応する *Con trai tôi đang bơi* (私の息子+[**継続**]+泳ぐ)という表現があるが、「息子は1時間泳いでいる」は *Con trai tôi đang bơi 1 tiếng* (私の息子+[**継続**]+泳ぐ+NUM) は用いられず、*Con trai tôi đã bơi 1 tiếng* (私の息子+[**完了**]+泳ぐ+NUM)という表現が用いられる。

これと同様、日本語では、「私の犬が死んでいる」という言い方があるが、ベトナム語では、*Con chó của tôi đã chết* (私の犬+[**完了**]+死ぬ)という表現があり、*Con chó của tôi đang chết* (私の犬+[**継続**]+死ぬ)とは言えない。

### 1.3.4.3 完了形と未完了形の組み合わせ

小泉 (1993:129)は、完了相は未完了相と結合できるとしている。小泉 (1993:129)の指摘を以下の(63)の例文で見よう。

- (63) 手紙を書いてしまっている。(小泉 1993:129)

(63)では、「書いている」という継続相は、行為が進行中であることを示しているが、「書いてしまった」という完了形は、行為の終了を表す。「書いている」と「書いてしまった」を

結合すると、「書いてしまっている」となる。しかし、「書いてしまっている」は、「書く」行為が完結した状態にあることを表す。つまり、

完了相+継続相→結果相 (小泉 1993:129)

である。

しかし、瞬間動詞による結果相の場合は、完了した状態ではなく、(64)のように、状態の継続を表す。(64)では、あかりが消えて、消えたままの状態になるという意味である。

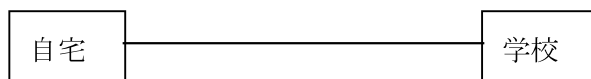
(64) あかりが消えてしまっている。(小泉 1993:129)

#### 1.4 移動動詞とは

移動動詞の定義について、影山 (1997:133)は、移動とは物理的に見れば、ある物体がある起点から動き始め、途中の経路を通りながら、着点にたどり着くことであるとしている。つまり、移動に言及する時、欠かせない要素は、起点、経路、着点の3つである。

例えば、家から学校に行く時を想定すると、自宅が起点、学校が着点であり、途中で通っていく道は中間経路である(影山 2011:136)。

(65) 自宅から学校への移動 (影山 2011:136)



起点(~から) 中間経路(~を経て) 着点(~に)

#### 1.4.1 ベトナム語の移動動詞

ベトナム語の移動動詞に関するベトナム人研究者は Đinh Văn Đức (1986)、Trần Kiều Hué (2005)、Mai Thi Thu Hân (2011)、Lý Ngọc Toàn・Lê Hương Hoa (2014)のみである。

Nguyễn Kim Thán (1977)の動詞の分類の中に、移動動詞という項目はないが、Nguyễn Kim Thán (1977:101)は、単音節語の動詞の中で、方向性を持つ ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)、sang (渡る)、qua (渡る)、lại (来る/帰る)、tới (来る)、đến (来る)を含む特別な動詞のグループがあると述べている。

Đinh Văn Đức (1986)は、動詞の文法的特徴によりベトナム語の動詞を4種類に細分類している。それらは、「自動詞と他動詞」、「法動詞」、「合成動詞」、「移動動詞」である(Đinh Văn Đức (1986:114-120))。移動動詞について、Đinh Văn Đức (1986:141・142)は、動詞の種類に名称を付けておらず、移動の様々な手段を表す đi (行く)、chạy (走る)、bay (飛ぶ)、leo (登る)、bò (這う)などの移動動詞グループと方向性を含む ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)、qua (渡る)、lại (来る/帰る)、tới (来る)、đến (来る)、về (帰る)などのもう1つのグループが存在すると言っている。

現時点(2021年9月)で、ベトナム語の移動動詞と日本語の移動動詞を対照した研究は、Trần Kiều Hué (2005)の“Động từ chuyển động trong tiếng Nhật và tiếng Việt (日本語とベトナム語における移動動詞)”のみである。この中で、Trần Kiều Hué (2005)は、ベトナム語と日本語の移動動詞の文法的特徴を中心に、両言語の対照を行っている。例えば、ベトナム語の移動動詞の後ろには「場所」を表す補語が必要であるが、日本語は膠着語(文法的機能を持つ助詞・助動詞などの付属語が自立語の語幹に結びつくことによって文の意味が示される言語)であるため、方向を表す助詞「へ」が必須であると言っている。

また、移動動詞の分類に関して、Trần Kiều Hué (2005)は、Đinh Văn Đức (1986)と同様、ベトナム語の移動動詞を2種類に分類している。それらは有方向移動動詞と非方向移動動詞である。有方向移動動詞には、一定の方向に移動する動詞と様々な方向に移動する動詞がある。一方、非方向移動動詞は、移動の手段を表す動詞である。

Trần Kiều Hué (2005)は、ベトナム語の移動動詞の有方向移動動詞には、ra (出る)、vào (入る)、xuống (降りる)、lên (上がる)、về (帰る)、qua (渡る)、sang (渡る)、lại (来る)、đến (来る)、tới (来

る)などがあるとする。しかし、日本語では、qua (渡る)、sang (渡る、通る)は、有方向移動動詞ではなく、非方向移動動詞であると言う。

また、非方向移動動詞は、ベトナム語、日本語ともに、移動の手段を表す chạy (走る)、bò (這う)、bơi (泳ぐ)、bay (飛ぶ) などであると言う。

Mai Thi Thu Han (2011)、Lý Ngọc Toàn、Lê Hương Hoa (2014)は、Talmy (1985)<sup>7</sup>の移動表現の類型論に基づき、ベトナム語と英語の移動動詞を対照した。その結果、ベトナム語は英語と同様に、サテライト枠付け言語 (satellite-framed language)であるだけでなく、スペイン語と同様に、動詞枠付け言語 (verb-framed language)にも属すると指摘した。

#### 1.4.2 日本語の移動動詞

日本語の移動動詞の代表的な研究者は、寺村 (1982)、影山 (1997・2001)である。

寺村 (1982)は、移動に必須の「出発点」、「通過点」、「到達点」という特定化された場所のどこに特に関係が深いかにより、日本語の移動動詞をそれぞれ、「出発点の移動動詞」、「通過点の移動動詞」、「到達点の移動動詞」の3種類に分類している。

寺村 (1982:119・120)の分類では、「出発点の移動動詞」は、「を」格、「から」格を取る「出る」、「卒業する」、「出発する」、「離れる」、「這う」、「飛ぶ」などである。そして「を」格を取る「通過点の移動動詞」は、「通る」、「経過する」、「過ぎる」、「渡る」、「越える」、「歩く」、「走る」、「這う」などである。「着点の移動動詞」は、「へ」格、「に」格を取る「入る」、「上がる」、「進む」、「降りる」、「至る」、「集まる」、「集中する」、「泊る」、「住む」、「下宿する」などである。

---

<sup>7</sup> Leonard Talmy (レナード・タルミ)は認知言語学の先駆のアメリカ合衆国の言語学者である。Talmy (1985)は、移動に関する5つの要素は、移動 (Move)、移動物 (Figure)、場所辞/経路 (Path) (位置関係を表す前置詞要素)、背景/地 (Ground) (前置詞によって示される場所表現)、様態・原因 (Manner/Cause)としている。また、この5つの要素の中のどれが動詞に語彙化されるかという観点から世界の諸言語の移動動詞を3つのタイプに分類している。1つ目のタイプは、Motion+Manner/Cause、つまり、移動と様態・原因とが合体 (Conflate)するタイプで、ロマンス系以外のヨーロッパ諸語や中国語、英語などに見られるタイプである。2つ目のタイプは、Motion+Path、移動と場所辞/経路とが合体するタイプで、スペイン語、ロマンス語、ポリネシア諸言語などに見られるタイプである。3つ目のタイプは、Motion+Figure、移動と移動物とが合体するタイプで、アツゲウィ語 (北カリフォルニア、ホカ語族)などに見られると指摘している。

影山 (1997)は、アスペクト的な面から移動動詞を 2 種類に分類している。影山 (1997:133) は、「日本語の多くの動詞は、起点、経路、着点のうちいずれか 1 つに重点を置いて表現する」とし、また、「移動動詞は動作が完了相であるか未完了相であるかに分類できる」としている。これにより、影山 (1997:134)は、移動動詞は完了相を持つ「起点重視/着点重視をする動詞」と、未完了相を持つ「経路重視の動詞」に分類した。

完了相を持つ「起点重視の動詞」は「出発する」、「(町を)出る」、「離れる」、「脱出する」、「去る」、「立つ」、「逃げる」などである。

一方、「着点重視の動詞」は「入る」、「着く」、「到着する」、「(表通に)出る」、「乗る」、「入学する」、「入社する」、「届く」などである。この完了相を持つ起点重視/着点重視のタイプの動詞を影山(1997:134)は、「起点/経路指向」の動詞と呼んでいる。

影山 (1997:134)が分類したもう 1 つの未完了相を持つ「経路重視の移動動詞」を影山 (1997:134)は「経路指向」の動詞と呼んでいる。影山 (1997:134)は、このタイプの動詞を「さまよう、うろつく、放浪する、越える、くだる、回るなど」のような移動の方向に関する動詞と「歩く、走る、泳ぐ、流れる、這う、飛ぶ、転がる、滑る」のような移動の様態に関する動詞に分けている。

影山 (2001:48)の分類では、内在的に方向づけられた移動動詞を「有方向移動動詞」と呼んでおり、この種類の移動動詞は、様態には言及しないのが一般的であるとしている。つまり、「有方向移動動詞」(内在的に方向づけられた移動動詞)は、移動の方向、起点・着点のみを含み、移動の様態(足をゆっくり動かして進む=歩く等)は含まない。この「有方向移動動詞」は「行く、来る、着く、至る、入る、上がる、登る、下がる、降りる、下る、落ちる、帰る、曲がる、出る、去る、抜ける、通る、たどる、過ぎる、渡る」などである。

影山 (2001:48)が分類した移動動詞のもう 1 つの種類は「移動様態動詞」である。移動様態動詞は、移動に伴う様態あるいは手段を表す動詞である。影山 (2001:48)は、「移動様態動詞」を更に、run 動詞(歩く、走る、駆ける、泳ぐ、這う、飛ぶ、滑る、ぶらつく、うろつく、さまよう、急ぐ、跳ねる、跳ぶ)と roll 動詞(滑る、転がる、流れる、漂う)に分けている。前者は、意図的な移動を表す動詞であり、後者は、移動に移動主体の意図が含まれない動詞である。

上記の日本語の移動動詞の分類を以下の表 2 に示す。



表2 日本語における移動動詞の分類

研究者	移動動詞の分類	
寺村 (1982)	出発点「～を、～から」	出る、卒業する、出発する、離れる、這う、飛ぶ など
	通過点「～を」	通る、経過する、過ぎる、渡る、越える、歩く、走る、這う など
	到達点「～へ、～に」	入る、上がる、進む、降りる、至る、集まる、集中する、泊る、住む、下宿する など
影山 (1997:134)	起点/着点指向の移動動詞 (完了相)	起点重視： 出発する、(町を)出る、離れる、脱出する、去る、立つ、逃げる など
		着点重視： 着く、到着する、(表通に)出る、乗る、入学する、入社する、届く など
	経路指向の移動動詞 (未完了相)	移動方向に関する動詞： さまよう、うろつく、放浪する、越える、くだる、回る など  移動の様態に関する動詞： 歩く、走る、泳ぐ、流れる、這う、飛ぶ、転がる、滑る
影山 (2001:48)	有方向移動動詞： 移動の方向、起点・着点を含む動詞	行く、来る、着く、至る、入る、上がる、登る、下がる、降りる、下る、落ちる、帰る、曲がる、出る、去る、抜ける、通る、たどる、過ぎる、渡る など
	移動様態動詞： 移動に伴う様態、あるいは、手段を表す動詞	run 動詞： 歩く、走る、駆ける、泳ぐ、這う、飛ぶ、滑るなど
		roll 動詞： 滑る、転がる、流れる、漂う

### 1.4.3 筆者による移動動詞の再分類

前述したように(1.4.1)、Đinh Văn Đức (1986)は、動詞の種類の名称を付けてはいないが、移動の様々な様子を表す đi (行く)、chạy (走る)、bay (飛ぶ)、leo (登る)、bò (這う)などの移動動詞グループと方向性を含む ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)、qua (渡る)、lại (来る/帰る)、tới (来る)、đến (来る)、về (帰る)などのグループに分類している。また、ベトナム語と日本語の対照を研究した Trần Kiều Huế (2005)は、ベトナム語と日本語の移動動詞を有方向移

動動詞と非方向移動動詞の2種類に分けている。有方向移動動詞には、一定の方向に移動する動詞と様々な方向に移動する動詞があり、非方向移動動詞は移動の様子を表す動詞である。しかし、Đinh Văn Đức (1986)と Trần Kiều Huế (2005)の分類は規準が明確でないため、筆者は規準を作って再分類した。

以下は、ベトナム語の方向移動動詞の選択基準である。ベトナム語の方向移動動詞は以下の5つの規準を満たすものとする。

- ① 方向移動動詞は、単語であり、空間運動の特定の方向を持つ（一定の方向に移動する）が、確定する運動様態を持たないものである。
- ② 確定する運動様態を持たないため、ある様態を持つ動詞（移動様態動詞）の後ろに置かれ、その動詞の方向を確定する。
- ③ 方向移動動詞は単独の動詞として用いられる。この時、方向移動動詞は、空間の方向を示し、この空間方向は有限である。
- ④ 主動詞の後ろに置かれる場合、空間移動の意味がなくなり、他の意味になる。
- ⑤ 方向移動動詞は、到達相を表す。

上記の5つの規準により、đi (行く)、đến (来る)、tới (来る)、lại (来る/帰る)、về (帰る)、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)、sang (渡る)、qua (渡る)を方向移動動詞とする。

ベトナム語の移動動詞のもう1つの種類の移動様態動詞は、以下の3つの条件を満たすものとする。

- ① 移動様態動詞は、文法面では、動詞の基本的な機能を持つ。
- ② 移動様態動詞は、人間/動物の動作の様態を表す。
- ③ 移動様態動詞は無限の空間での運動活動、移動を表すのに用いられる。すなわち、この動詞は、一定の方向だけではなく、様々な方向に移動する。

上記の3つの条件を満たす動詞は、đi (行く)、đi bộ (歩く)、chạy (走る)、bay (飛ぶ)、bò (這う)、bơi (泳ぐ)、bước (歩む)、trèo (登る)、leo (登る)、lặn (沈む)、nhảy (跳ぶ)である。本論では、これらの動詞をベトナム語の移動様態動詞とする。

#### 1.4.4 方向移動動詞

影山 (2001:47)は、方向移動動詞は、「どこかからどこかへ」移動する方向性を指定する動詞であると定義している。

1.4.3 で筆者は規準を作ってそれにあてはまる 11 個を方向移動動詞とした。それらは đi (行く)、đến (来る)、tới (来る)、lại (来る/帰る)、về (帰る)、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)、sang (渡る)、qua (渡る)である。筆者と Đinh Văn Đức (1986)、Trần Kiều Hué (2005)の研究が異なっている点は、筆者の分類には đi (行く)が入っていることである。動詞 đi (行く)が方向移動動詞であることは本論の第3章で証明する。

筆者と Đinh Văn Đức (1986)、Trần Kiều Hué (2005)のもう1つの相違点は、Trần Kiều Hué (2005)は、文法構造のみでベトナム語の移動動詞と日本語の移動動詞の対照を行ったが、本研究では、文法構造と意味構造で、両言語の対照を行うことである。文法構造と意味構造の両方が対象のために必要な理由を以下の(66)、(67)から見てみよう。

(66) a. Hấn đã chạy về thành phố.

彼 PAST 走る về 都市

彼は都市の方へ走っていった。

b. \*Hấn đã chạy thành phố.

彼 PAST 走る 都市

\*彼は都市に走った。

(67) a. Hấn đã nhìn về thành phố.

彼 PAST 見る về 都市

彼は都市の方を見た。

b. Hấn đã nhìn thành phố

彼 PAST 見る 都市

彼は都市を見た。

前述したように(1.1.1)、ベトナム語は孤立語であり、文法的意味は語順によって表現される(cf. 斎藤(2010))。(66a)と(67a)はどちらも、「主語+副要素+主要素+副要素(前置詞句)」の語順

で、(66b)と(67b)はどちらも、「主語+副要素+主要素+副要素(名詞)」の語順である。つまり、文法構造のみに従えば、(66a)の *chạy về* (走る+TO)と(67a)の *nhìn về* (見る+TO)は、同じ文法的な機能を持つ。そして、(66b)の *chạy* (走る)と(67b)の *nhìn* (見る)も同じ文法的な機能を持つ。

つまり、文法面で見れば、(66a)は適格文になり、(67a)も適格文になる。これと同様、(67b)が適格文になると、(66b)も適格文になるはずである。しかし、(67b)は適格文になるが、(66b)は不適格文である。これは、意味論に関するからである。具体的には、(66b)の *chạy* (走る)と(67b)の *nhìn* (見る)の後ろに置かれる名詞が *thành phố* (都市)であるため、意味論で見れば、*nhìn thành phố* (見る+都市=都市を見る)は適格であるが、*chạy thành phố* (走る+都市)は不適格になる。

このことから、ベトナム語と日本語の方向移動動詞を対照するには意味構造と文法構造が必要になるのである。

筆者が分類したベトナム語の方向移動動詞に対応する日本語の方向移動動詞は「行く」、「来る」、「帰る」、「出る」、「入る」、「上がる/上る」、「下がる/降りる」、「渡る」である。これらの日本語の方向移動動詞は、影山(2001)の分類の中の一部である。

本論では、筆者が分類したベトナム語の方向移動動詞の意味構造と文法構造の分析を中心とし、日本語に対応する方向移動動詞と対照をする。

## 1.5 本章のまとめ

本章では、本論の理論根拠として以下のことを示した。

ベトナム語は孤立語で、語形変化をしない。そのため、ベトナム語は日本語と異なり、時制やアスペクトなどを表すために、副詞などが主動詞の前、あるいは、後ろに置かれる。さらに、ベトナム語の語順は、英語と同じく、SVOで、文法的な機能を示す。

これに対し、日本語は語幹に接辞が接合する膠着語である。日本語の語順はSOVで、句の「主要部」は末尾である。また、SVO語順のベトナム語は前置詞を持つのに対し、目的語の後に動詞が来るSOVタイプの日本語では後置詞/助詞が用いられる。

ベトナム語と日本語のアスペクトについては、ベトナム語の過去形は日本語と同様、完了だけではなく、未完了も表す。また、日本語の「ている」は、継続相、結果相、状態相を表す。この内、継続相は、ベトナム語は日本語と一致しない場合がある。

ベトナム語の方向移動動詞の分類については、Đinh Văn Đức (1986)、Trần Kiều Huế (2005)の研究があるが、これらの分類は規準が明確でないため、筆者は5つの規準を設けて再分類した。それらは、①方向移動動詞は、単語であり、空間運動の特定の方向を持つ（一定の方向に移動する）が、確定する運動様態を持たないものである。②確定する運動様態を持たないため、ある様態を持つ動詞（移動様態動詞）の後ろに置かれ、その動詞の方向を確定する。③方向移動動詞は単独の動詞として用いられる。この時、方向移動動詞は、空間の方向を示し、この空間方向は有限である。④主動詞の後ろに置かれる場合、空間移動の意味がなくなり、他の意味になる。⑤方向移動動詞は到達相を表す。

この規準に当てはまるベトナム語の方向移動動詞は、đi (行く)、đến (来る)、tới (来る)、lại (来る/帰る)、về (帰る)、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)、sang (渡る)、qua (渡る)である。これらに対応する日本語は、「行く」、「来る」、「帰る」、「出る」、「入る」、「上がる/上る」、「下がる/降りる」、「渡る」である。

## 第2章 ベトナム語の方向移動動詞

前章の 1.4.3 で記述したように、本論で取り上げるベトナム語の方向移動動詞は、đi (行く)、đến (来る)、tới (来る)、lại (来る/帰る)、về (帰る)、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)、sang (渡る)、qua (渡る)の11個である。

ベトナム語の方向移動動詞の特徴を意味構造と文法構造に基づいて見ると、以下のことが分かる。

まず、意味構造からみると、方向移動動詞は、確定方向への移動を表す。つまり、ベトナム語の方向移動動詞自身は方向の意味を含んでいる。そして空間の移動の意味がなくなり、他の意味になる。

次に、文法構造からみると、方向移動動詞は単独の動詞として使われ、文の述語の機能を果たしている。そして、主動詞の後ろに置かれると、文の述語ではなく、他の文法的機能を担う。

本章では、このような特徴を持っているベトナム語の方向移動動詞は、どのような場合に、方向性を持つか、また、空間の移動の意味以外に、どのような意味を持っているか、文の述語の役割を担わないとすれば、どんな文法的機能を果たしているかを明らかにする。

### 2.1 方向性を持つ方向移動動詞

前述したように(1.4.1)、Nguyễn Kim Thân (1977)、Đình Văn Đức (1986)、Trần Kiều Hué (2005) は、方向移動動詞は動きの方向性を指定する動詞であると定義している。しかし、どのような場合に、方向性を持つかについては言及していない。本節では、ベトナム語の方向移動動詞は、空間的な移動のみ方向性を持つことを明らかにする。

#### 2.1.1 ベトナム語における空間的移動

空間移動は、「移動—方向—目的地」という構造である。この3つの要素は、目的地がある空間移動と緊密な関係がある。目的地に向けて、移動する移動空間に欠かせない要素は、場所名詞である。本論で用いる Việt Nam (ベトナム)、Nhật Bản (日本)、Tokyo (東京)のような地名名詞や bệnh viện (病院)、trường học (学校)、cửa hàng (店)のような地点名詞や đường (道)、sông

(川)、suối (泉)のような通路名詞などである。これらの場所名詞と結合する場合でのみ、ベトナム語の方向移動動詞は方向性を持つ。

語順に関しては、ベトナム語の方向移動動詞は、主動詞として用いられる場合と他の主動詞の後ろに置かれる場合がある。それらがどのような構造になっているかを以下で見てみる。

まず、ベトナム語の方向移動動詞が主動詞として用いられる場合である。この場合は、その方向移動動詞自身が移動と方向の意味を含んでいる。例えば、(1)のように、方向移動動詞 vào (入る)には、移動と方向の意味が含まれ、後ろの目的地の場所名詞 nhà (家)と結合し、空間移動の構造となる。

(1) Cô ấy đã vào nhà.

移動+方向 目的地

方向移動動詞 場所名詞

彼女 PAST vào 家

彼女は家に入った。

(2)の方向移動動詞 qua (通る)も移動と方向を表し、場所名詞 công viên (公園)と結合している。ここでは、通過する場所 công viên (公園)を通過して、ある目的地へ向かって移動したことを表している。

(2) Nam đã qua công viên.

移動+方向

方向移動動詞 場所名詞

ナム PAST qua 公園

ナムさんは公園を通った。

(3)の方向移動動詞 lên (上がる)も移動と方向を表す。この方向移動動詞は、目的地の場所名詞 tầng 4 (4階)と結合し、目的地への空間の移動を表す。

(3) Lan      lên      tầng 4      rồi.

移動+方向      目的地

方向移動動詞      場所名詞

ラン      lên      階      4      すでに

ランさんはすでに4階に上がった。

以上のことから、空間的移動においては、ベトナム語の方向移動動詞が単独動詞（文の主動詞）の場合、移動と方向を表すことがわかる。

次に、ベトナム語の方向移動動詞が他の動詞の後ろに置かれる場合を見る。この場合、方向移動動詞の前に置かれる動詞は、移動を表し、後ろの方向移動動詞は、移動の方向を表す。

(4)を例にすると、方向移動動詞の前に置かれる移動様態動詞 *chạy* (走る)は、移動や移動の様々な方向を表し、方向移動動詞 *vào* (入る)は、移動の一定の方向を表す。この2つの動詞は、後ろの目的地である場所名詞 *nhà* (家)と結合し、「移動—方向—目的地」の空間移動の構造を形成する。

(4) Cô ấy      đã      chạy      vào      nhà.

移動      方向      目的地

主動詞      方向移動動詞      場所名詞

彼女      PAST      走る      vào      家

彼女は家まで走った。

(5)の移動様態動詞 *đi bộ* (走る)は、移動と移動の様々な方向を表し、方向移動動詞 *qua* (通る)は、移動の一定の方向を表す。そのため、通過性の場所名詞 *công viên* (公園)と結合すると、「公園を通り、ある目的地へ向けて移動する」という意味になる。

(5) Nam      đã      đi bộ      qua      công viên.

移動      方向

主動詞      方向移動動詞      場所名詞



ナム PAST 歩く qua 公園

ナムさんは公園を歩き抜けた。

(6)のように、方向移動動詞 *lên* (上がる)の前にある動詞 *nhìn* (見る)は、移動と移動の様々な方向を表し、方向移動動詞 *lên* (上がる)は、移動の一定の方向を表す。これらの動詞は、目的地である場所名詞 *tầng 4* (4階)と結合すると、目的地への空間の移動を表す。

(6) Lan đang nhìn lên tầng 4.

移動 方向 目的地

主動詞 方向移動動詞 場所名詞

Lan さん PRE 見る lên 階 4

Lan さんは4階を見上げている。

以上のように、ベトナム語の方向移動動詞が、他の動詞の後ろに置かれる場合、その移動動詞は、移動の一定の方向を表すことがわかる。

また、空間的移動の場合、場所名詞が省略されていても、方向移動動詞が移動の方向を表す。次の例(7)を見てみよう。

(7) A: Bạn đến đây từ khi nào?

移動+方向 目的地

あなた đến ここ から いつ

あなたはいつからここへ来ていたの？

B: Minh đến lúc 5 giờ

移動+方向

私 đến に 5時

私は5時に来ました。

(7a)では、Aのように目的地を示す場所名詞 *đây* (ここ)がある場合でも、Bのように場所名詞 *đây* (ここ)が省略された場合でも、方向移動動詞 *đến* (来る)は、移動と移動の方向を表す。

このように、ベトナム語の方向移動動詞は、ある目的地へ向けて移動するという空間的移動でのみ方向性があることがわかる。

方向移動動詞が空間的移動ではない場合は、何を表すかについては、次節 2.2 で述べる。

### 2.1.2 ベトナム語における空間移動の起点、経路、着点

すべてのベトナム語の方向移動動詞 *đi* (行く)、*đến* (来る)、*tới* (来る)、*lại* (来る/帰る)、*về* (帰る)、*ra* (出る)、*vào* (入る)、*lên* (上がる)、*xuống* (降りる)、*sang* (渡る)、*qua* (渡る)は、起点と着点を取る。

まず、起点についてである。ベトナム語の方向移動動詞が起点を取るのに前置詞 *từ* (FROM) が用いられる。具体的には、(8a)の方向移動動詞 *đến* (来る)/*tới* (来る)は、直接起点を表す場所名詞 *Việt Nam* (ベトナム)と結合せず、動詞と場所名詞の間に前置詞 *từ* (FROM)が置かれる。つまり、(8a)の方向移動動詞 *đến* (来る)/*tới* (来る)は、前置詞 *từ* (FROM)で起点を取る。

(8b)も方向移動動詞 *về* (帰る)は、直接起点を表す場所名詞 *Nhật Bản* (日本)と結合せず、動詞と場所名詞の間に前置詞 *từ* (FROM)が置かれる。つまり、(8b)の方向移動動詞 *về* (帰る)は、前置詞 *từ* (FROM)で起点を表す。

- (8) a. *Bạn đến/ tới từ Việt Nam à?*  
あなた *đến/ tới* FROM ベトナム ですか  
あなたはベトナムから来たの？
- b. *Chúng tôi đã về từ Nhật Bản.*  
私たち PAST *về* FROM 日本  
私たちは日本から帰った。

(8)と同様、(9a)の方向移動動詞 *lên* (上がる)と(9b)の方向移動動詞 *ra* (出る)も、前置詞 *từ* (FROM)で起点を表す。

(9) a. Anh Nam mới từ quê lên<sup>8</sup>.

さん ナム ばかり FROM 田舎 lên

ナムさんは田舎から来たばかりだ。

b. Đây là cháu tôi. Nó mới từ Thành phố Hồ Chí Minh ra<sup>9</sup>.

これ BE 孫 私 彼 ばかり FROM 市 ホーチミン ra

これは私の孫だ。彼はホーチミン市から来たばかりだ。

次に、着点についてである。ベトナム語の方向移動動詞は動詞単独で着点を取る。代表例として、次の(10)、(11)を挙げる。

(10a)では、方向移動動詞 *đến* (来る)、*lại* (来る/帰る)、*tới* (来る)は、目的地の役割を担う指示語 *đây* (ここ)と結合し、動詞単独で着点を取る。これと同様、(10b)の動詞 *về* (帰る)、(10c)の動詞 *sang* (渡る)/*qua* (渡る)は、直接目的地の役割を担う場所名詞 *nhà* (家)と結合し、動詞単独で着点を取る。

---

<sup>8</sup> ベトナム語では、「田舎から都市へ来る」という意味を表す場合、方向移動動詞 *đến* (来る)ではなく、*lên* (上がる)が用いられる。

<sup>9</sup> ベトナム語では、「南部へ行く」という意味を表す場合、*đi* (行く)は使われず、*vào* (入る)が用いられる。これと同様、「北部へ行く」という意味を表す場合、*đi* (行く)は使われず、*ra* (出る)が用いられる。この *vào nam* (入る+南部)、*ra bắc* (出る+北部)という言い方をするのは次の理由からである。

「現在のベトナム北部は、ベトナム人が埋葬されている場所であり、昔からベトナム人によって開拓されてきた地域であり、文化、政治、経済が発展している。以前、タンロン (現在のハノイの呼び名)がベトナムの首都になったとき、タインホアー (ベトナムの中部にある県)以南の地域はまだ旧農村地域であった。17世紀には、*đường Ngoài* (ジャイン川から北の土地を指す)と *đường Trong* (ジャイン川から南の土地を指す)の2つの土地が形成された。そのため、*vào Nam* (南に入る)、*ra Bắc* (北に出る)という言い方は言語の歴史において昔形成され、現在までも使われている。」

Nguyễn Kim Thân (1977:104)、筆者訳

この例文の *Thành phố Hồ Chí Minh* (ホーチミン市)は、北部にある地名である。

(10) a. *Đến/lại/tới đây với mẹ.*

*đến/lại/tới* ここ と 母

母のところへ来なさい。

b. *Mẹ về nhà lúc 7 giờ.*

母 về 家 に 7時

母は7時に家に帰った。

c. *Nam sang/qua nhà cô (giáo) Lan rồi.*

ナム sang/qua 家 先生 ラン すでに

ナムさんはすでにラン先生の家へ行った。

(11a)、(11b)は、それぞれ方向移動動詞 *lên* (上がる)、*xuống* (降りる)が動詞単独で着点を取ることを表す例文である。(11a)では、動詞 *lên* (上がる)は、目的地の役割を担う名詞 *ô tô* (車)と直接結合し、(11b)の動詞 *xuống* (降りる)は、目的地の役割を担う位置 *tầng 2* (2階)と直接結合し、それぞれ動詞単独で着点を取る。

(11) a. *Đứng ở đây nóng quá, tôi muốn lên ô tô ngay.*

立つ いる ここ 暑い 過ぎる 私 たい 上がる 車 すぐ

ここは暑すぎるので、すぐ車に乗りたい。

b. *Xuống tầng 2, tôi thấy con mèo đang ngủ.*

降りる 階 2 私 見える CLF 猫 PRE 寝る

2階に着いた時、寝ている猫が見えた。

次に、起点と着点が共起する場合である。ベトナム語の方向移動動詞は、同時に起点、着点を表すことができる。

(12a)の動詞 *vào* (入る)は、前置詞 *từ* (FROM)で起点を取り、動詞単独で着点を取る。(12b)の動詞 *đến* (来る)、*tới* (来る)も前置詞 *từ* (FROM)で起点を取り、動詞単独で着点を取る。

(12) a. *Từ Hà Nội vào Thành phố Hồ Chí Minh mất bao lâu?*

FROM ハノイ vào 市 ホーチミン かかる どのぐらい  
ハノイからホーチミン市までどのぐらいかかる？

b. Đi từ nhà đến/tới trường bằng xe đạp.  
行く FROM 家 đến/tới 学校 で 自転車  
自転車で家から学校まで行く。

ここまで見てきたように、ベトナム語の方向移動動詞の多くは起点、着点を取るという共通点がある。しかし、共通点だけではなく、相違点も持つ。

例にあげたように、方向移動動詞 ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)は、前置詞 từ (FROM)で起点を取り、動詞単独で着点を取る。

しかし、これらの方向移動動詞は、前置詞 từ (FROM)でだけではなく、動詞単独でも起点を取ることができる。言い換えると、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)は、動詞単独で起点を取ることもあり、着点を取ることもある。例えば、ra sân (出る+庭)、ra vườn (出る+園)の場合、場所名詞 sân (庭)と vườn (園)は着点 (庭に出る、園に出る)だけでなく、起点 (庭を出る、園を出る)を表すこともできる。

以下の(13a)では、方向移動動詞 xuống (降りる)の後ろに目的地の役割を担う名詞 thuyền (船)が置かれ、xuống (降りる)は、動詞単独で着点を取る。それに対し、(13b)では、方向移動動詞 xuống (降りる)の後ろに起点の役割を担う名詞 tàu (船)が置かれており、xuống (降りる)は、動詞単独で起点を取る。

(13) a. Bước chân xuống thuyền nước mắt như mưa. (Cao Xuân Hạo 2007:182)

歩む 足 xuống 船 涙 のよう 雨  
雨のように涙を流しながら船に足を踏み入れる。

b. Vừa xuống tàu, tôi đã chạy về nhà ngay. (Cao Xuân Hạo 2007:182)

ばかり xuống 船 私 PAST 走る về 家 すぐに  
船を出たとたん、すぐ家に向かって走った。

次の(14)も方向移動動詞 *ra* (出る)が動詞単独で起点、着点を取る例文である。(14a)では *ra* (出る)の後ろに起点の役割を担う場所名詞 *sân*<sup>10</sup>(グラウンド)が置かれ、*ra* (出る)は、動詞単独で起点を取る。それに対し、(14b)の *ra* (出る)の後ろに着点の役割を担う場所名詞 *sân* (グラウンド)が置かれ、*ra* (出る)は、動詞単独で着点を取る。

(14) a. *Minh bị thương phải ra sân.* (Cao Xuân Hạo 2007:182)

ミン られる 負傷 なければならない *ra* グラウンド

ミンさんは負傷のためグラウンドを出なければならない。

b. *Hùng ra sân thay Minh.* (Cao Xuân Hạo 2007:182)

フン *ra* グラウンド 代わり ミン

フンさんはミンさんの代わりにグラウンドに出た。

上の(13)、(14)は、方向移動動詞 *ra* (出る)、*vào* (入る)、*lên* (上がる)、*xuống* (降りる)が起点と着点を取ることが分かりやすい例文である。これに対し、以下の(15)は、それらの方向移動動詞は、起点を取るか、着点を取るか判別しにくい場合である。

(15) *Ra! Vào! Lên! Xuống! Vào đi! Lên đi! Xuống đi!*

出る 入れ 上がれ 降りろ 入りなさい 上がりなさい 降りなさい

(15)は場所名詞や指示語の役割を担う起点、目的地がない命令文の例である。起点、目的地がないため、命令を出す人は、行為を実行する人と同じ位置にいるか、別の位置にいるか確定できない。つまり、方向移動動詞 *ra* (出る)、*vào* (入る)、*lên* (上がる)、*xuống* (降りる)が起点を取るか、着点を取るかは状況による。二人(話し手と聞き手)とも同じ位置にいる場合、方向移動動詞 *ra* (出る)、*vào* (入る)、*lên* (上がる)、*xuống* (降りる)は起点を取る。これに対し、話し手と聞き手が別々の位置にいる場合、着点を取る。

この場合、(15)を(16)のように、行動者の空間目的地 *đây* (ここ)を確定すると、方向移動動詞 *ra* (出る)、*vào* (入る)、*lên* (上がる)、*xuống* (降りる)は起点でなく、着点を取る。

<sup>10</sup> この場合の *sân* は「庭」ではなく、*sân bóng* (グラウンド)である。

- (16) Ra đây! Vào đây! Lên đây! Xuống đây!  
 Ra ここ Vào ここ Lên ここ Xuống ここ  
 ここに出なさい！ ここに入りなさい！ ここに上がりなさい！ ここに降りなさい！

(16)では、命令を出す人の位置は行動者の空間目的地である。つまり、動作の目的地が確定されている。そのため、この場合、方向移動動詞 ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)は、着点を取るのである。

このことから、ベトナム語の方向移動動詞 ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)は、動詞単独で起点、着点を取るが、場面により判断する必要がある。

次は、ベトナム語の方向移動動詞 đi (行く)についてである。この方向移動動詞は単独では様態と方向の両方の意味を持っている。Đi (行く)は、đi bộ (歩く)、chạy (走る)、bay (飛ぶ)、bò (這う)、bơi (泳ぐ)、bước (歩む)、trèo (登る)、leo (登る)、lặn (沈む)、nhảy (跳ぶ)のような移動様態動詞と同様、体の動きなどの動作の様態を表す意味と đến (来る)、tới (来る)、lại (来る/帰る)、về (帰る)、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (降りる)、sang (渡る)、qua (渡る)と同様、動きの方向を表し、目的地に関係する意味も持っている。

様態の đi (行く)と方向の đi (行く)の関係は、文法面から以下のようになっている。

まず、様態の đi (行く)である。例(17)は、空間目的地がない例文で、đi (行く)は、体の動きのみ表す。

- (17) Con trai tôi đang tập đi.  
 移動  
 息子 私 PRE 学ぶ đi  
 私の息子は歩くことを学んでいる。

また、(17)の例文に(18)のように動詞 đi (行く)の後ろに空間目的地にならない場所名詞 trong phòng (部屋の中)を付けると、(18)の đi (行く)の本質は(17)の đi (行く)と同様、体の動きのみ表

す。すなわち、場所が空間目的地にならない構造では、đi (行く)は「動作の様態」の意味を持っている。

(18) Con trai tôi đang tập đi trong phòng.

移動

息子 私 PRE 学ぶ đi 中 部屋

私の息子は部屋の中を歩くことを学んでいる。

さらに、(17)に(19)のように、動詞 đi (行く)の後ろに、方向移動動詞 vào (入る)と空間目的地になる場所名詞 phòng (部屋)を付けると、đi vào phòng (移動+方向+目的地)の構造となる。この構造は、2.1.1 で述べたように移動様態動詞の特徴である。つまり、移動様態動詞は、直接目的地と結合できず、方向移動動詞が移動様態動詞と空間目的地を繋ぐ要素になるのである。

(19) Con trai tôi đang tập đi vào phòng.

移動 方向

息子 私 PRE 学ぶ đi vào 部屋

私の息子は部屋に歩いて行くことを学んでいる。

また、上の(17)の移動様態動詞 đi (行く)を đi bộ (歩く)、chạy (走る)、bò (這う)などの移動様態動詞に変えると、(20)のように適格文となる。

(20) Con trai tôi đang tập đi bộ /chạy/bò vào phòng.

移動 方向

息子 私 PRE 学ぶ đi bộ /chạy/bò vào 部屋

私の息子は部屋まで歩く/走る/這うことを学んでいる。

上記の根拠をもとに、動詞 đi (行く)は移動様態動詞であると結論できる。



次は方向の *đi* (行く) である。空間移動構造「*đi* (行く) — 方向移動動詞 — 目的地」を(21)のように、方向移動動詞を切り捨て、「*đi* (行く) — 目的地 (地名)」の構造に変え、分析していく。

(21) *Mẹ tôi đi Hà nội.*

移動 + 方向

母 私 *đi* ハノイ

私の母はハノイへ行く。

(21)の *đi* (行く) が移動様態動詞であれば、(21)に *đi* (行く) を他の移動様態動詞 *đi bộ* (歩く)、*chạy* (走る)、*bay* (飛ぶ)、*bò* (這う)、*bơi* (泳ぐ) などに変えると、(22)は適格文となるはずであるが、そうはならない。

(22) \**Mẹ tôi đi bộ/chạy Hà nội.*

移動

母 私 *đi bộ/chạy* ハノイ

\*私の母はハノイに歩く/走る。

ただし、(21)の *đi* (行く) は、(23)の *đến* (来る)、*tới* (来る)、*lại* (来る/帰る)、*về* (帰る)、*ra* (出る)、*lên* (上がる) のような方向移動動詞に変更することができる。

(23) *Mẹ tôi đến/tới/lại/về/ra/lên Hà nội.*

移動 + 方向

母 私 *đến/tới/lại/về/ra/lên* ハノイ

私の母はハノイへ来る/帰る/出る/上がる。

(23)の例文に見られるように、方向移動動詞がなく、直接目的地と結合する場合の *đi* (行く) は、本質が変わったことが分かる。この場合は、*đi* (行く) は移動の様態ではなく、移動の方向を表し、方向移動動詞となる。

ここから、動詞 *đi* (行く) は移動様態動詞でもあり、方向移動動詞でもあることが分かる。

動詞 *đi* (行く) が移動様態動詞の時は、他の方向移動動詞より制約がある。その制約は着点を取ることである。先に述べたように、ベトナム語の移動様態動詞は、直接空間目的地と結合できず、方向移動動詞の連結が必須である。そのため、*đi* (行く) は、目的地となるすべての場所名詞と結合できない。例えば、*đi phòng* (部屋に行く)、*đi sân* (庭に行く) は不適格になる。

一方、方向移動動詞 *đi* (行く) は、他の方向移動動詞より着点を取るのに制約があるのに対し、*ra* (出る)、*vào* (入る)、*lên* (上がる)、*xuống* (降りる) と同様、動詞単独で起点を取る。(24a)、(24b) の *đi* (行く) は、話し手と聞き手の位置をはっきり確定しなくても、*đi* (行く) は、起点を取ることが分かる。具体的には、(24a) の *đi* (行く) は「家を出る」の意味を持ち、(24b) の *đi* (行く) は「港を出る」の意味を持っている。

(24) a. *Đi! Đi ngay!*

*đi đi* すぐ

行け！すぐ行け！

b. *Chùng nào tàu đi?*

いつ 船 *đi*

船はいつ出るの？

一方、方向移動動詞 *đến* (来る)、*tới* (来る)、*lại* (来る/帰る)、*về* (帰る) は、起点を取りにくいという制約がある。

まず、(25) のように、方向移動動詞 *đến* (来る)、*tới* (来る)、*lại* (来る/帰る)、*về* (帰る) は、他の方向移動動詞と同様、これらの動詞の後ろに置かれる前置詞 *từ* (FROM) で起点を取る。

(25) *Tôi đã đến/tới/lại/về từ trường.*

私 PAST *đến/tới/lại/về* FROM 学校

私は学校から来た/帰った。

(25)の前置詞 *từ* (FROM) の代わりに、(26)のように、方向移動動詞 *đến* (来る)、*tới* (来る)、*lại* (来る/帰る)、*về* (帰る)の後ろに直接目的地の場所名詞 *trường* (学校)が置かれると、これらの方向移動動詞は着点を取る。

(26) Tôi đã đến/tới/lại/về trường.  
私 PAST đến/tới/lại/về 学校  
私は学校に来た/帰った。

(25)と同様、(26)の *đến* (来る)、*tới* (来る)、*lại* (来る/帰る)、*về* (帰る)は、起点を表す *đến/tới/lại/về từ trường* (来る/帰る+FROM+学校=学校から来た/帰った)とも、着点を表す *đến/tới/lại/về trường* (来る/帰る+TO+学校=学校に来た/帰った)とも言えるが、*lúc 5 giờ* (5時に)のような時点を表す副詞を付けた場合、(27a)は不適格文であるが、(27b)は適格文になる。このように、*đến* (来る)、*tới* (来る)、*lại* (来る/帰る)、*về* (帰る)は起点を取るのに制約がある。

(27) a. \*Tôi đã đến/tới/lại/về từ trường lúc 5 giờ.  
私 PAST đến/tới/lại/về FROM 学校 に 5 時  
\*私は学校から5時に来た/帰った。  
b. Tôi đã đến/tới/lại/về trường lúc 5 giờ.  
私 PAST đến/tới/lại/về 学校 に 5 時  
私は5時に学校に来た/帰った。

次に、方向移動動詞 *sang* (渡る)と *qua* (渡る)<sup>11</sup>についてである。これらの動詞も、ここまで述べたように、他の方向移動動詞と同様、前置詞 *từ* (FROM)で起点を取り、動詞単独では着点を取る。しかし、この2つは他の方向移動動詞と異なり、起点と着点以外に経路も取れる。

---

<sup>11</sup> ベトナム語の方向移動動詞 *sang* (渡る)と *qua* (渡る)は、日本語の「渡る」という意味である。この内、*qua* (渡る)は中国語から導入され、空間移動の意味においては *qua* (渡る)は *sang* (渡る)より広い意味がある。例えば、*người qua người lại* (渡る人、来る人)とは言えるが、*người sang người lại* は使えない。また、*sang xã bạn* (渡る 友達の村)と言うと、*sang* (渡る)は「友達の村に渡る」という着点のみを取るが、*qua xã bạn* (渡る 友達の村)と言うと、*qua* (渡る)は「友達の村に渡る」という着点と「友達の村を渡る」という経路を取ることができる。

方向移動動詞 sang (渡る)、qua (渡る)が、起点、経路、着点を取ることを以下の(28)で示す。

- (28) Qua/Sang! Qua đi/ Sang đi!  
qua/sang qua 命令 sang 命令  
渡れ！ 渡れ！

(28)は場所名詞がない例文である。この例文は命令文で、話者の位置は確定されない。そのため、この場合、sang (渡る)、qua (渡る)は、起点 (聞き手が今の位置を去り、新しいところに移動する)、経路 (あるところを渡り、次の過程を続ける)、着点 (空間目的地に到達する(ここは場所名詞が省略されている))を取る可能性がある。言い換えれば、空間表現の 3 つの中のどれを取るか具体的に確定できない。

方向移動動詞 sang (渡る)、qua (渡る)が起点を取るか、経路を取るか、着点を取るかは、文脈によって確定される。例えば、場所名詞は動詞の後ろには置かれないが、話者の位置が確定される文脈のみで起点が取られる。(29)の例文を見てみよう。

- (29) Minh sang/qua luôn.  
私 sang/qua すぐ  
すぐ渡る。

(29)の sang (渡る)、qua (渡る)は、話者がこれから出発するという意味である。つまり、この場合、sang (渡る)、qua (渡る)は、起点を取る。

次は、sang (渡る)、qua (渡る)が経路を取ることにについてである。場所名詞は、動詞 sang (渡る)、qua (渡る)の後ろに置かれるが、この場所名詞は通過名詞、つまり、空間目的地にならない文脈でのみ方向移動動詞 sang (渡る)、qua (渡る)は経路を取る。Qua sông (川を渡る)、qua cầu (橋を渡る)、qua đường (道を渡る)などは、この場所名詞の例である。(30)を例にとると、đường (道)は、空間目的地ではない。つまり、đường (道)は、主体が到達したい移動の最終の場所ではない。

(30) Khi sang/qua đường, cần chú ý xe cộ.

時 sang/qua 道 ほうがいい 注意 車

道を渡る時、車に注意した方がいい。

最後は着点である。場所名詞が空間目的地になる文脈のみで方向移動動詞 sang (渡る)、qua (渡る)は、着点を取ることができる。特に、目的地の後ろに目的を入れると、目的地がはっきりわかる。

(31) Bây giờ, con sang/qua nhà bạn Hà chơi.

今から 私 sang/qua 家 ハーさん 遊ぶ

今から私はハーさんの家に遊びに行く。

(31)では、nhà bạn Hà (ハーさんの家)は、主体が遊びに行くための空間目的地になり、方向移動動詞 sang (渡る)、qua (渡る)は、「行く」の意味を持ち、着点を取る。

以上の分析から、ベトナム語の方向移動動詞は、前置詞 từ (FROM)で起点を、動詞単独で着点を取る。ところが、前置詞 từ (FROM)を使わなくても、いくつかの動詞は動詞単独で起点が取れる。それらの動詞は đi (行く)、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる)、xuống (下がる)である。しかし、sang (渡る)と qua (渡る)のみが動詞単独で経路を取ることは、この方向移動動詞が他の方向移動動詞と異なる点である。そして、sang (渡る)と qua (渡る)が起点、経路、着点のいずれを取るかは、文脈によって決まる。

以上説明したベトナム語の方向移動動詞と起点、経路、着点の関係を表3に示す。(○は「取る」ことを表す)

表3 ベトナム語の方向移動動詞の空間表現

	起点 (前置詞 từ (FROM)で)	起点 (動詞単独で)	経路 (動詞単独で)	着点 (動詞単独で)
動詞 đi (行く)	○	○		○
動詞 đến (来る)	○			○
動詞 tới (来る)	○			○
動詞 lại (来る/帰る)	○			○
動詞 về (帰る)	○			○
動詞 ra (出る)	○	○		○
動詞 vào (入る)	○	○		○
動詞 lên (上がる)	○	○		○
動詞 xuống (降りる)	○	○		○
動詞 sang (渡る)	○		○	○
動詞 qua (渡る)	○		○	○

### 2.1.3 ベトナム語の方向移動動詞のアスペクト

前述(1.2.2)したように、ベトナム語の動詞は、過去、現在、未来の時制、アスペクトを表すために副詞が用いられる。過去は副詞 đã (PAST)と rồi (すでに)、現在は副詞 đang (PRE)、未来は副詞 sẽ (FUT)である。ベトナム語の方向移動動詞は、一般の動詞と同様、これらの現象が見られる。(32a)-(32c)はそれぞれ過去、現在、未来の例文である。

(32) a. Tuần trước, chúng tôi đã vào đất liền một lần. (過去)

先週 私たち PAST vào 陸 1回

先週私たち1回陸に入った。

b. Mai đang đi Huế. (現在)

マイ PRE đi フエ

マイさんはフエへ行っている。

c. Ngày mai, chồng tôi sẽ ra đảo. (未来)

明日 夫 私 FUT ra 島

明日夫はまた島に出る。

しかし、ベトナム語の方向移動動詞は、動詞一般の特徴を持つだけでなく、自分のグループの特徴も持つ。それは、副詞 *đã* (PAST)、*sẽ* (FUT)と結合しなくても、方向移動動詞が単独で過去、未来のアスペクトを表すことである。この場合、過去と未来のアスペクトを表すのは語順である。

具体的には、(33a)と(33b)の方向移動動詞 *về* (帰る)が、同じ副詞 *bao giờ* (いつ)と結合する例文である。(33a)の A の語順は、方向移動動詞 *về* (帰る)が副詞 *bao giờ* (いつ)の前に置かれ、*về bao giờ* (方向移動動詞+副詞)となっており、これは、過去のアスペクトを表す。

一方、(33b)の A の語順は方向移動動詞 *về* (帰る)が副詞 *bao giờ* (いつ)の後ろに置かれ、*bao giờ về* (副詞+方向移動動詞)となっており、これは、未来のアスペクトを表す。

(33) a. A: Anh *về bao giờ?* (過去)

君 *về* いつ  
君はいつ帰ったの？

B: *Về hôm qua.*

*về* 昨日  
昨日帰った。

b. A: Anh *bao giờ về?* (未来)

君 いつ *về*  
君はいつ帰るの？

B: *Ngày mai về.* (未来)

明日 *về*  
明日帰る。

次は疑問文である。(34a)と(34b)の方向移動動詞 *đi* (行く)が同じ副詞 *bao giờ* (いつ)と結合する例文である。

(34a)の A の語順は、方向移動動詞 *đi* (行く)が、副詞 *bao giờ* (いつ)の前に置かれ、*đi bao giờ* (方向移動動詞+副詞)となっており、これは、過去のアスペクトを表す。

一方、(34b)のAの語順は、方向移動動詞 *đi* (行く)が、副詞 *bao giờ* (いつ)の後ろに置かれ、*bao giờ đi* (副詞+方向移動動詞)となっており、これは、未来のアスペクトを表す。

(34) a. A: Anh *đi bao giờ?* (過去)

君 *đi* いつ  
君はいつ行ったの？

B: *Đi năm ngoái.*

*đi* 去年  
去年行った。

b. A: Anh *bao giờ đi?* (未来)

君 いつ *đi*  
君はいつ行くの？

B: *Ngày mai tôi đi.* (未来)

明日 私 *đi*  
私は明日行く。

1.3.4.1 で述べたように、ベトナム語の動詞は、過去形で完了と未完了のアスペクトを表している。では、ベトナム語の方向移動動詞で完了と未完了のアスペクトを表すには、どのように表現するかを説明する。

本論では、*đi* (行く) は方向移動動詞でもあり、移動様態動詞でもあるため、未完了と完了を表すという立場をとる。そして、*đến* (来る)、*tới* (来る)、*lại* (来る/帰る)、*ra* (出る)、*vào* (入る)、*lên* (上がる)、*xuống* (降りる)、*qua* (渡る)、*sang* (渡る)、*về* (帰る)は、完了を表すとする。

筆者のこの主張を証明するため、2つの方法を用いることにする。1つは、完了を表す動詞に否定形をつけてみる方法で、もう1つは、時間副詞を付けてみる方法である。

まず、完了を表す動詞 *đến* (来る)の否定形を文の後ろの命題に付けると、適格文になるか、不適格文になるかを調べてみる。



(35a)の *đã đi Nhật* (PAST+ *đi*+日本=日本へ行った) は、過去を表すが、この方向移動動詞 *đi* (行く)は、完了相を表すか、未完了相を表すか分からない。しかし、(35b)のように、完了を表す動詞 *đến* (来る)の否定形 *chưa đến* (NEG+ *đến*=来ていない)を付けると、適格文になる。つまり、この場合、*đi* (行く)は、未完了相を表す。

(35) a. Mai *đã đi Nhật*. [完了]

マイ PAST *đi* 日本

マイさんは日本へ行った。

b. Mai *đã đi Nhật nhưng chưa đến Nhật*. [未完了]

マイ PAST *đi* 日本 が まだ *đến* 日本

マイさんは日本へ行ったが、まだ来ていない。

これに対し、*đến* (来る)、*tới* (来る)、*lại* (来る/帰る)、*ra* (出る)、*vào* (入る)、*lên* (上がる)、*xuống* (降りる)、*qua* (渡る)、*sang* (渡る)、*về* (帰る)は、移動の完了を表す。

例えば、(36a)の *đã đến/tới/lại Nhật* (PAST+ *đến/tới/lại* +日本=日本へ来た) は、完了を表すために、後ろに未完了を表す否定形 *chưa đến/tới/lại* (NEG+ *đến/tới/lại* =来ていない)を付けると、不適格文になる。これと同様、(36b)の 方向移動動詞 *về* (帰る)と(36c)の *qua* (渡る)/*sang* (渡る) は、完了を表している。

(36) a. \*Mai *đã đến/tới/lại Nhật nhưng chưa đến/tới/lại Nhật*.

マイ PAST *đến/tới/lại/về* 日本 が まだ *đến/tới/lại* 日本

\*マイさんは日本へ行った/帰ったが、まだ日本に来ていない。

b. \*Nam *đã về nhà nhưng chưa về đến nhà*.

ナム PAST *về* 家 が まだ *về đến* 家

\*ナムさんは家へ帰ったが、まだ帰ってこない。

c. \*Máy bay *đã bay sang/qua Mỹ nhưng chưa bay đến Mỹ*.

飛行機 PAST 飛ぶ *sang/qua* アメリカ が まだ 飛ぶ 来る アメリカ

\*飛行機がアメリカへ飛び渡ったが、まだ着いていない。

完了か未完了かを確認するもう 1 つの方法は、完了を表す時間副詞を付ける方法である(cf. 影山 1997:133))。

(37a)の *đã đi du lịch* (PAST+行く+旅行=旅行に行った) は、過去の動作を表すが、この動作は完了か否か分からない。しかし、(37b)のように、*trong 2 ngày* (二日で)という完了を表す時間副詞を付けることはできるが、(37c)のように、*2 ngày* (二日)という継続時間を表す副詞をつけることはできない。方向移動動詞 *đi* (行く)は、アスペクト的には完了相だからである。

(37) a. Mai đã đi du lịch.

マイ PAST đi 旅行

マイさんは旅行に行った。

b. Mai đã đi du lịch trong 2 ngày.

マイ PAST đi 旅行 で 2 日

マイさんは2日間で旅行に行った。

c. \*Mai đã đi du lịch 2 ngày.

マイ PAST đi 旅行 二日

\*マイさんは二日旅行に行った。

(38a)では、*đã về nước* (PAST+帰る+国=国へ帰った) は、過去の動作を表すが、この動作は完了か、未完了かは分からない。しかし、(38b)のように、*được 2 tháng* (二カ月で)という完了を表す時間副詞を付けることはできるが、(38c)のように、*2 tháng* (二カ月)という継続時間を表す副詞をつけることはできない。方向移動動詞 *về* (行く)は、アスペクト的には完了相だからである。

(38) a. Lan đã về nước .

ラン PAST về 国

ランさんは国へ帰った。

b. Lan đã về nước được 2 tháng.

ラン PAST về 国 で 2 カ月

ランさんは2カ月で国へ帰った。

c. \*Lan đã về nước 2 tháng.

ラン PAST về 国 2 カ月

\*ランさんは2カ月国へ帰った。

このように、ベトナム語の方向移動動詞の内、動詞 đi (行く)は、方向移動動詞であるとともに、移動様態動詞でもあるため、完了相と未完了相を表す。これ以外の方向移動動詞は、完了相を表すと結論できる。

## 2.2 方向性を持たない方向移動動詞

本節では、ベトナム語の方向移動動詞が方向性を持たない場合を述べる。

2.1.1 で述べたように、ベトナム語の方向移動動詞は、空間的移動 (ある目的地へ向けて移動する/場所名詞がある場合)のみ方向性を持つ。つまり、場所名詞ではない名詞と結合する場合、ベトナム語の方向移動動詞は方向性を持たない。

以下の表 4 は、方向性のある方向移動動詞の例文(目的地の役割を担う場所名詞の場合)と方向性のない方向移動動詞の例文である。

表 4 ベトナム語の方向移動動詞の方向性

No.	方向性がある方向移動動詞	方向性がない方向移動動詞
1	<p>a. Đàn gà con chạy ra sân.</p> <p>移動 方向 目的地</p> <p>NUM 鶏 子 走る ra 庭</p> <p>ひよこたちは庭に走り出した。</p>	<p>b. Cuối cùng, tôi đã tìm ra đáp số.</p> <p>ra 名詞</p> <p>やっと 私 PAST 探す ra 未知数</p> <p>やっと私は未知数を見つけた。</p>

2	a. Mưa rồi, chạy về nhà thôi! <sup>12</sup> 移動 方向 目的地 雨すでに走る về 家 意向形 雨だ。家まで走ろう。	b. Ngày nào tôi cũng nhớ về gia đình. về 名詞 毎日 私 も 思い出す về 家族 私は毎日家族のことを思い出す。
3	a. Tôi sẽ qua Nhật dự hội nghị. 移動+方向 目的地 私 FUT qua 日本 参加する 会議 会議に参加するために日本に行く。	b. Mọi khó khăn đã qua. qua NUM 苦情 PAST qua 全部の困難はもう過ぎた。
4	a. Tôi thích lên núi sống. 移動+方向 目的地 私 好き lên 山 住む 私は山へ住みに行きたい。	b. Gạo lên giá. lên 名詞 米 lên 値段 米の値段が上がった。

表4の左側の1aのように、方向移動動詞 ra (出る)の後ろに目的地を表す場所名詞 sân (庭)が置かれると、ra (出る)はまだ空間方向を持っている。しかし、右側の1bの ra (出る)の後ろには、目的地を表さない名詞 *đáp số* (未知数)が置かれているため、空間移動の構造がなくなり、ra (出る)は空間の方向性を持たない。この場合の ra (出る)は、動作の過程の完了、結果を強調するだけで、空間表現(本来の意味)がなくなっている。

2aの方向移動動詞 về (帰る)の後ろに、目的地である場所名詞 nhà (家)があり、3aの方向移動動詞 qua (渡る)の後ろに、目的地である場所名詞 Nhật (日本)があり、4aの方向移動動詞 lên (上がる)の後ろに、目的地である場所名詞 núi (山)が置かれているため、これらの動詞は空間の方向性を持つ。

これに対し、2bの動詞 về (帰る)の後ろには、目的地の役割を担わない普通の名詞 gia đình (家族)が置かれ、3bの動詞 qua (渡る)には、名詞 mọi khó khăn (全部の苦情)が置かれ、4bの動詞 lên (上がる)の後ろには、名詞 gạo (米)が置かれている。これらは目的詞の役割を果たす名詞ではないため、方向移動動詞 về (帰る)、qua (渡る)、lên (上がる)は方向性を持たない。

以上から、空間的移動ではない場合(場所名詞と結合しない場合)、ベトナム語の方向移動動詞は空間方向性がなくなることが分かる。そして、本来の移動の意味がなくなり、他の語彙的

<sup>12</sup> 第1章で述べたように、ベトナム語は孤立語であり、語形が変化しないという特徴がある。そのため、ベトナム語は日本語と異なり、意向形を表す場合、動詞の形を変えず、thôi、nàoのような意向形を表す言葉を入れる。

意味を持つのである。場所名詞と結合しない方向移動動詞の意味は、殆どの場合、その動詞の本来の意味に基づき、広がる。

次の(39)を見てみよう。

(39) a. Lan chạy ra đường.

ランさん 走る ra 道

ランさんは道まで走った。

b. Bây giờ đang là mùa bưởi ra hoa.

今 PRE COP 季節 ザボン ra 花

今はザボンの花が咲く季節だ。

c. Sau mấy năm không gặp, anh ấy béo ra nhiều.

後 NUM 年 NEG 会う 彼 太い ra たくさん

彼に会わなかった数年後、彼はとても太っていた。

(39a)の ra (出る)は、「狭いところから広いところへ移動する」という本来の意味を持つ。抽象的には、「何かが広がる、何かが変化する」という意味である。(39b)の ra hoa (花が咲く)の意味はザボンの蕾が花に変化する状態を表し、(39c)の béo ra (太ってきた)は、体の体質、体重の変化について述べている。この変化は、大きくなることを表すことが多い。つまり、方向移動動詞 ra (出る)派生の語彙的な意味は、本来の意味に基づいている。

一方で、ベトナム語の方向移動動詞は意味が拡張されると、多義の意味を持つ。それらがどのような語彙的な意味を持っているかを説明する。本論では、意味のバリエーションを「抽象的な意味」、「変化を表す意味」、「心理的な意味」、「催促と激励の意味」の4つに分類する。

第一に、ベトナム語の方向移動動詞が「抽象的な意味」を持つことについてである。ベトナム語の方向移動動詞が抽象的概念を持ち、はっきり定義できない nói (言う)、nghĩ (考える)のような動詞と結合する場合、抽象的な意味を持つ。

(40a)の方向移動動詞 đến (来る)、(40b)の方向移動動詞 về (帰る)は、この抽象的意味の例である。

(40) a. Anh ấy nói đến tương lai.

彼 話す đến 将来

彼は将来について話す。

b. Tôi luôn nghĩ về quê hương.

私 いつも 考える về ふるさと

私はいつもふるさとのことを考えている。

第二に、方向移動動詞が「変化を表す意味」を持つことについてである。変化も「変化の始まり」、「変化の継続」、「過程の終わり・変化の結果」の3つに分類される。

「変化の始まり」は前の出来事がなくなり、新しい出来事が出現する、あるいは、突然新しい出来事が出現することである。例えば、時間の変化の始まりの *sang năm mới* (*sang*+お正月=お正月になると)、*sang tuần tới* (*sang*+来週=来週になると)、*sang tháng* (*sang*+月=来月になると)の *sang*、あるいは、(41a)のような *ra tết* (*ra*+お正月=お正月になると)がある。

また、急に新しい出来事が始まることを意味する *Thời cơ đã đến* (時期+PAST+*đến*=時期が来た)、*Sự việc đến bất ngờ* (出来事+*đến*+急に=出来事が急に来た)、*Được sinh ra đời* (てもらう+生まれ+*ra*+世の中=世の中に生まれてもらう)、あるいは、従来の出来事が終わり、新しい出来事が起こることを意味する(41b)の方向移動動詞 *đến* (来る)などが挙げられる。

(41) a. *Ra tết, tôi sẽ bắt đầu công việc mới.*

*Ra* お正月 私 FUT 始める 仕事 新しい

お正月になったら、私は新しい仕事を始める。

b. *Mùa hè qua, mùa thu đến*

夏 qua 秋 đến

夏が過ぎ、秋が来る。

次に、方向移動動詞が「変化の継続」の意味を持つことを見る。これは、方向移動動詞 *tới* (来る)、*lại* (来る/帰る)の2つのみで見られる。例えば、(42)の *lại* (来る/帰る)は、雨がよく降ることを言っている。

(42) *Trời lại mưa.*

天気 lại 雨

雨がまた降り出す。

最後に、ベトナム語の方向移動動詞が拡張的に「過程の終わり・変化」の結果を表すことについてである。過程の終わりを表す意味には、方向移動動詞 *qua* (渡る) が用いられる。例として、*Qua mấy cái tết xa nhà* (*qua*+NUM+CLF+お正月+離れる+家=家を離れて幾年か過ぎた)、*Qua thời kì khó khăn* (*qua*+時期+困難=困難な時期が過ぎた)、*1 năm đã qua* (1+年+PAST + *qua*=1年が過ぎた)などが挙げられる。

また、変化の結果にも、良い結果と悪い結果がある。*Tìm ra* (見つける)、*hiểu ra* (分かって来る)、*nhận ra* (心得る)、*nói ra* (言い出す)の方向移動動詞 *ra* (出る) は良い結果を表す。一方、*đi* (行く) は変化の悪い結果を表す。下の(43a)は変化の良い結果で、(43b)は悪い結果の例文である。

(43) a. *Tôi đã tìm ra đáp án cho câu hỏi của Lan.*

私 PRF 探す ra 回答 使役 質問 POSS ラン

私はランさんの質問の回答を見つけた。

b. *Do ốm nặng, ông tôi đã đi tối qua.*

ため 病気 重い 祖父 私 PAST đi 夜 昨日

重い病気のため、私の祖父は昨夜亡くなった。

第三に、方向移動動詞の心理的な意味について述べる。人間の肯定的な心理、感覚を表すため、*khỏe ra* (元気になる)、*xinh ra* (きれいになる)、*thông minh ra* (頭がよくなる) の方向移動動

詞 ra (出る)、あるいは、*tốt dần lên* (だんだんよくなる)、*giàu lên* (お金持ちになる)などの *lên* (上がる)が用いられる。

一方、人間の否定的な心理、感覚を表現する場合、*đi* (行く)が用いられる。例えば、*già đi* (老けてくる)、*ngu đi* (バカになる)、*kém đi* (下手になる)、*nghèo đi* (貧乏になる)などである。

人間の通常の場合、*lại* (来る/また) を用いる。例えば、*vui vẻ lại* (また楽しくなる)、*buồn lại* (また寂しくなる)、*ốm lại* (また病気になる)などのように表現する。

(44a)は積極的な心理、(44b)は消極的な心理、(44c)は普通の心理を表す例文である。

(44) a. Sau khi uống thuốc, tôi đã thấy khỏe ra.

てから 飲む 薬 私 PAST 感じる 元気 ra

薬を飲んだ後、元気に感じる。

b. Tại sao càng học càng kém đi?

なぜ ば 勉強する ほど 下手 đi

なぜ勉強すれば勉強するほど下手になるのか?

c. Nếu được gặp gia đình, tôi sẽ vui vẻ lại.

たら てもら 会う 家族 私 FUT 楽しい lại

家族に会ったら、私はまた楽しくなる。

第四に、「激励と催促の意味」について述べる。すべてのベトナム語の方向移動動詞は、激励と催促の意味を持つ。以下の(45a)は激励の意味で、(45b)、(45c)は催促の意味の代表的な例文である。

(45) a. Cố lên! / Nhanh nữa lên!

頑張る lên 速く もっと lên

頑張れ! もっと急げ!

b. Ăn đi! / Về đi! / Xuống đi!

食べる đi 帰る đi 降りる đi

食べろ! 帰れ! 降りろ!



c. *Làm nhanh vào!*

やる 速く vào

速くやれ!

### 2.3 ベトナム語の方向移動動詞の文法面の分析

上節では、ベトナム語の方向移動動詞を意味面から分析した。本節では、ベトナム語の方向移動動詞を文法面から分析する。

方向移動動詞が主動詞の後ろに置かれると、文の主動詞ではなくなる。では、その方向移動動詞は、文法面でどのような役割を担っているのだろうか。

前述したように(1.2.3.2)、Nguyễn Kim Thân (1977)は、「動詞+動詞」の構造を複合動詞と呼んでいる。つまり、Nguyễn Kim Thân (1977)は、後項動詞は補助動詞であるとしたが、後項動詞が方向移動動詞の場合、それはどのような役割を担うかについては言及していない。

本論では、ベトナム語の方向移動動詞を主動詞の後ろに置いた場合、それは動詞ではなく前置詞であるという立場をとる。TDTVTD (2015:460)は、前置詞は、2つの単語をつなぐのに用いられる品詞であるとし、Nguyễn Cảnh Hoa (1999)が、前置詞は、後ろに付いている名詞と緊密な関係があると言っているからである。

(46) a. *Hoa sen nở vào mùa hè.* (Nguyễn Kim Thân 1977:83)

花 蓮 咲く IN 夏

蓮の花は夏に咲く。

b. *Vào mùa hè, hoa sen nở.* (Nguyễn Kim Thân 1977:83)

IN 夏 花 蓮 咲く

夏に蓮の花が咲く。

(46a)のように、前置詞 *vào* (IN/AT) は、動詞 *nở* (咲く)と名詞 *mùa hè* (夏)をつなぐのに用いられている。前置詞 *vào* (IN/AT)は、名詞 *mùa hè* (夏)と緊密な関係があるため、前置詞句になり、(46b)のように、位置を文の先頭に変えることができ、前置詞句が副詞の役割を担う。

(47)の前置詞 *vào* (IN/AT)と(48)の前置詞 *về* (ABOUT)も、それぞれ後ろの名詞 *lúc này* (今)と名詞 *vấn đề* (問題)を緊密に結合し、(47a)、(47b) の *vào lúc này* (今)と(48a)、(48b) の *về vấn đề này* (この問題について)は、副詞の役割を担う前置詞句になる。

(47) a. Tôi không muốn nói gì thêm vào lúc này.

私 NEG たい 言う 何 もっと AT 今

私は今何も言いたくない。

b. Vào lúc này, tôi không muốn nói gì thêm.

AT 今 私 NEG たい 言う 何 もっと

今、私は何も言いたくない。

(48) a. Ngày mai chúng ta hãy bàn về vấn đề này.

明日 私たち ください 相談する ABOUT 問題 この

明日私たちはこの問題について相談しよう。

b. Về vấn đề này, ngày mai chúng ta hãy bàn.

ABOUT 問題 この 明日 私たち ください 相談する

この問題について、明日私たちは相談しよう。

ベトナム語の前置詞と名詞の緊密な関係は、以下の(49)、(50)でも見られる。

(49) a. Đặt bát đĩa lên bàn

置く 食器 ON テーブル

テーブルの上に食器を置く。

b. Đặt lên bàn bát đĩa

置く ON テーブル 食器

テーブルの上に食器を置く。

c. \*Đặt lên bát đĩa bàn

置く ON 食器 テーブル

\*食器の上にテーブルを置く。

(49)では、前置詞 *lên* (ON)は、後ろに付いている名詞 *bàn* (テーブル)と緊密な関係があるので、(49a)と(49b)は適格文である。しかし、(49c)では、前置詞 *lên* (ON)と名詞 *bàn* (テーブル)の位置を変えたため、不適格文である。

(50)では、前置詞 *xuống* (ON)は、後ろに付いている名詞 *sàn nhà* (床)と緊密な関係があるので、(50a)と(50b)は適格文になる。しかし、(50c)では、前置詞 *xuống* (ON)と名詞 *sàn nhà* (床)の間に単語が入り、離れたため、不適格文になる。

(50) a. *Đừng vứt sách vở xuống sàn nhà.*

NEG 捨てる 書籍 ON 床 家

家の床に書籍を捨てないでください。

b. *Đừng vứt xuống sàn nhà sách vở*

NEG 捨てる ON 床 家 書籍

家の床に書籍を捨てないでください。

c. \* *Đừng vứt xuống sách vở sàn nhà*

NEG 捨てる ON 書籍 床 家

\*書籍の下に家の床を捨てないでください。

このように、前置詞は名詞と緊密な関係があるので、間に単語を入れることはできない。しかし、名詞が省略される場合がある。具体的には、(51a)では、前置詞 *vào* (IN/INTO/AT)の後ろに、目的地の役割を担う場所名詞 *phòng* (部屋)が置かれ、前置詞句 *vào phòng* (部屋に入る)となった。しかし、(51b)では、目的地の役割を担う場所名詞 *phòng* (部屋)が省略されているが、(51b)は適格文になる。

(51) a. *Tay ôm chồng sách, Nam bước vào phòng.*

手 持つ 山積み 本 ナム 歩む INTO 部屋

山積みした本を手で持って、ナムさんが部屋に入った。

b. Tay ôm chông sách, Nam bước vào. (Cao Xuân Hạo 2006:171)

手 持つ 山積み 本 ナム 歩む INTO

山積みした本を手で持って、ナムさんが入った。

(52a)では、前置詞 *ra* (OUT OF/TO)の後ろに、目的地である場所名詞 *đất* (地面) が置かれ、前置詞句 *ra đất* (地面に出た)となった。しかし、(52b)では、目的地である場所名詞 *đất* (地面)が省略されているが、(52b)は適格文になる。

(52) a. Nam bị ngã ra đất.

ナム られる 転ぶ TO 地面

ナムさんは地面に倒れた。

b. Nam bị ngã ra.

ナム られる 転ぶ TO

ナムさんは倒れた。

ベトナム語の前置詞のもう1つの特徴は、前置詞は品詞の1つで機能語であり、文法的な機能を果たすことである(cf.1.2.1)。つまり、他の語との関係を示すのに欠かせない品詞である。

(53a)では、前置詞 *ra* (TO)は、名詞 *thư* (手紙)と名詞 *Huế* (フエ)をつなぐのに用いられるため、(53a)の例文は適格文になる。しかし、(53b)では、前置詞 *ra* (TO)がないため、名詞 *thư* (手紙)と名詞 *Huế* (フエ)の関係を示す語がなく、不適格文となる。

(53) a. Anh Hùng gửi thư ra Huế. (Srichampa 1998:202)

さん フン 送る 手紙 TO フエ (地名)

フンさんはフエに手紙を送る。

b. \*Anh Hùng gửi thư Huế.

さん フン 送る 手紙 フエ

\*フンさんはフエ手紙を送る。

(54a)では、前置詞 *ra* (TO)は、名詞 *rác* (ごみ)と名詞 *đường* (道)をつなぐのに用いられるため、適格文になる。しかし、(54b)では、名詞 *rác* (ごみ)と名詞 *đường* (道)の間に、この2語の関係を示す前置詞 *ra* (TO)がないため、不適格文になる。

(54) a. *Đừng vứt rác ra đường.*

ないで 捨てる ごみ TO 道

道にごみを捨てないでくれ。

b. *\*Đừng vứt rác đường.*

ないで 捨てる ごみ 道

\*道ごみを捨てないでくれ。

このように、2つの単語の間に前置詞がなければ、不適格文になる。上記の(53)、(54)の例文以外に、不適格文になるものを表5に示す。

表5 ベトナム語の方向移動動詞の前置詞的機能

No.	前置詞がある場合(適格文)	前置詞がない場合(不適格文)
1	<i>đi lên gác</i> 行く UP 狭い部屋 狭い部屋に行く	<i>*đi gác</i> 行く 狭い部屋
2	<i>bay lên trời</i> 飛ぶ UP 空 空に飛び上がる	<i>*bay trời</i> 飛ぶ 空
3	<i>chạy ra sân</i> 走る TO 庭 庭に走り出す	<i>*chạy sân</i> 走る 庭
4	<i>viết ra sàn</i> 書く TO 床 床に書き込む	<i>*viết sàn</i> 書く 床
5	<i>đi bộ về nhà</i> 歩く TO 家 家まで歩く	<i>*đi bộ nhà</i> 歩く 家
6	<i>chạy về nhà</i> 走る TO 家	<i>*chạy nhà</i> 走る 家

	家まで走る	
7	bò lên cầu thang 這う UP 階段 這って階段を上がる	*bò cầu thang 這う 階段
8	bước lên cầu thang 歩く UP 階段 階段を上がる	*bước cầu thang 歩く 階段
9	đá vào goal 蹴る INTO ゴール ゴールに蹴る	*đá goal 蹴る ゴール
10	ném gạch vào lớp học 投げる 煉瓦 INTO 教室 教室に煉瓦を投げる	*ném gạch lớp học 投げる 煉瓦 教室
11	bước xuống cầu thang 歩く DOWN 階段 階段を下りる	*bước cầu thang 歩く 階段
12	lăn xuống thác 転ぶ DOWN 滝 滝に転がり落ちる	*lăn thác 転ぶ 滝

上記の分析から、ベトナム語の方向移動動詞は、前置詞の役割を担っていることが分かる。筆者の観点も Nguyễn Hoàng Phương (2010)(cf.1.2.4)の主張と同じである。

しかし、Nguyễn Cảnh Hoa (1999)は、「前項動詞+方向移動動詞」の構造では、この方向移動動詞は、前置詞の役割を果たしているのではなく、後項動詞であるとしている。方向移動動詞が後項動詞になるとすると、「前項動詞+後項動詞」の構造になる。つまり、前項動詞と後項動詞の間に、何も入れることができないはずなのに、そうではない。前項動詞と後項動詞の間に、副詞や否定形を入れることができる。それを証明するために、表 5 を用いて、前項動詞と後項動詞の間に副詞や否定形を入れた文を作り、表 6 に示した。

表 6 方向移動動詞が後項動詞の役割を担わない例

No.	副詞を入れた例	否定形を入れた例
1	đi <b>nhanh</b> lên gác 行 速く UP 狭い部屋 狭い部屋に速く行く	đi (mà) <b>không</b> lên gác 行 (CONJ) NEG UP 狭い部屋 狭い部屋に上がらない
2	bay <b>nhanh</b> lên trời	bay (mà) <b>không</b> lên trời

	飛ぶ 速く UP 空 空に速く飛び上がる	飛ぶ (CONJ) NEG UP 空 飛ぶが空までは飛ばない
3	chạy <b>nhANH</b> ra sân 走る 速く TO 庭 庭に速く走り出す	chạy ( <b>mà</b> ) <b>khÔNG</b> ra sân 走る (CONJ) NEG TO 庭 走るが庭までは走らない
4	viết <b>nhIỀU</b> ra sán 書く たくさん TO 床 床にたくさん書き込む	viết ( <b>mà</b> ) <b>khÔNG</b> ra sán 書く (CONJ) NEG TO 床 書くが床には書かない
5	đi bộ <b>nhANH</b> về nhà 歩く 速く TO 家 家まで速く歩く	đi bộ ( <b>mà</b> ) <b>khÔNG</b> về nhà 歩く (CONJ) NEG TO 家 歩くが家までは歩かない
6	chạy <b>nhANH</b> về nhà 走る 速く TO 家 家まで速く走る	chạy ( <b>mà</b> ) <b>khÔNG</b> về nhà 走る (CONJ) NEG TO 家 走るが家までは走らない
7	bò <b>nhANH</b> lên cầu thang 這う 速く UP 階段 這って階段の上に速く上がる	bò ( <b>mà</b> ) <b>khÔNG</b> lên cầu thang 這う (CONJ) NEG UP 階段 這うが階段の上までは這わない
8	bước <b>nhANH</b> lên cầu thang 歩む 速く UP 階段 階段の上まで速く歩む	bước ( <b>mà</b> ) <b>khÔNG</b> lên cầu thang 歩く (CONJ) NEG UP 階段 歩くが階段の上までは上がらない
9	đá <b>nhANH</b> vào goal 蹴る 速く INTO ゴール ゴールに速く蹴る	đá ( <b>mà</b> ) <b>khÔNG</b> vào goal 蹴る (CONJ) NEG INTO ゴール 蹴ったがゴールに入らなかった
10	ném <b>nhIỀU</b> gạch vào lớp học 投げる たくさん 煉瓦 INTO 教室 教室にたくさんの煉瓦を投げる	ném gạch ( <b>mà</b> ) <b>khÔNG</b> vào lớp học 投げる 煉瓦 (CONJ) NEG INTO 教室 煉瓦を投げたが教室に当たらなかった
11	bước <b>nhANH</b> xuống cầu thang 歩く 速く DOWN 階段 階段の下まで速く降りる	bước ( <b>mà</b> ) <b>khÔNG</b> xuống cầu thang 歩く (CONJ) NEG DOWN 階段 歩くが階段の下までは歩かない
12	lăn <b>nhANH</b> xuống thác 転ぶ 速く DOWN 滝 滝の下まで速く転ぶ	lăn ( <b>mà</b> ) <b>khÔNG</b> xuống thác 転ぶ (CONJ) NEG DOWN 滝 転ぶが滝の下までは転ばない

前述した通り、「前項動詞+方向移動動詞」の構造では、方向移動動詞は、後項動詞の役割ではなく、前置詞の役割を担っている。

以下の表7は、前置詞の役割を担う方向移動動詞のリストである。

表7 前置詞の役割を担う後項の方向移動動詞

方向移動動詞	前置詞の役割
đi (行く)	TO
đến (来る)	TO
lại (来る/帰る)	TO
lên (上がる)	UP/ON
qua (渡る)	THROUGH/TO
ra (出る)	OUT OF/TO
sang (渡る)	THROUGH/TO
tới (来る)	TO
vào (入る)	INTO/IN/AT
về (帰る)	BACK /ABOUT
xuống (下がる)	DOWN/ON

以上のことから、ベトナム語の方向移動動詞は、主動詞であるだけでなく、後項に置かれる場合、前置詞の機能を果たすことが分かる。そのため、ベトナム語の方向移動動詞は、空間的移動で前置詞 từ (FROM)、動詞単独で空間表現の起点(đi (行く)), 経路 (qua (渡る)、sang (渡る)), 着点(本研究のすべてのベトナム語の方向移動動詞)を表すことができる (cf.2.1.2)だけではなく、後項の方向移動動詞は、前置詞の役割を担い、経路、着点を表すこともできる。

具体的には、経路は前置詞 qua (THROUGH)、sang (THROUGH)で表す。そして、着点は全ての方向移動動詞から転成した前置詞 đi (TO)、đến (TO)、tới (TO)、về (BACK)、lại (TO)、ra (TO)、vào (INTO/IN)、lên (UP/ON)、xuống (DOWN/ON)、qua (TO)、sang (TO)で表す。このことを以下に詳しく記す。

経路については、ベトナム語では、後項に方向移動動詞から転成した前置詞 qua (THROUGH)、sang (THROUGH) が用いられる。(55)のように動詞 chạy (走る)の後ろに、方向移動動詞から転成した前置詞 qua (THROUGH)、あるいは、sang (THROUGH)を付け、それが前置詞の機能を果たし、経路を表す。

- (55) Khi chạy qua/sang đường, cần chú ý xe cộ.  
 時 走る THROUGH 道 ほうがいい 注意 車  
 道を走る時、車に注意した方がい。



着点については、ベトナム語では方向移動動詞から転成した前置詞 *đi* (TO)、*đến* (TO)、*tới* (TO)、*về* (BACK)、*lại* (TO)、*ra* (TO)、*vào* (INTO/IN)、*lên* (UP/ ON)、*xuống* (DOWN/ ON)、*qua* (TO)、*sang* (TO)で表す。

(56)では、動詞 *đi* (行く)の後ろに、方向移動動詞から転成した前置詞 *đến* (TO)を付け、(57)では、動詞 *về* (帰る)の後ろに、方向移動動詞から転成した前置詞 *tới* (TO)を付け、これが前置詞の機能を果たし、着点を表す。

(56) *Đi đến ngã tư, sẽ thấy bưu điện bên trái.*

行く TO 交差点 FUT 見える 郵便局 左側  
交差点に着くと、左側に郵便局が見える。

(57) *Vừa về tới nhà, Nam chạy ngay vào phòng ngủ.*

ばかり 帰る TO 家 ナム 走る すぐ INTO 寝室  
家に帰るとすぐに、ナムさんはすぐに寝室に走って行った。

(58)では、動詞 *chạy* (走る)の後ろに、方向移動動詞から転成した前置詞 *ra* (TO)を、(59)の動詞 *đá* (蹴る)の後ろに、前置詞 *vào* (INTO)を付け、これで着点を表す。

(58) *Chạy ra sân, tôi thấy một con chó.*

走る TO 庭 私 見える NUM CLF 犬  
庭に走って行く時、一匹の犬が見えた。

(59) *Tôi cố đá vào khung thành của đối phương mà không được.*

私 頑張る 蹴る INTO ゴール の 相手 CONJ NEG 使役形  
私は相手のゴールに一生懸命蹴ったが、ゴールに入らなかった。

このことから分かるように、ベトナム語では、後項に置かれる方向移動動詞は前置詞の機能を果たし、経路、着点を取る。

ベトナム語の方向移動動詞が前置詞の機能を果たすものをまとめると、以下の表 8 のようになる。

表 8 ベトナム語の後項方向移動動詞の前置詞的機能

ベトナム語の経路表現	
経路	着点
前置詞 qua (THROUGH) 前置詞 sang (THROUGH)	前置詞 đi (TO) 前置詞 đến (TO) 前置詞 lại (TO) 前置詞 lên (UP/ ON) 前置詞 qua (TO) 前置詞 ra (TO) 前置詞 sang (TO) 前置詞 tới (UP/ ON) 前置詞 vào (INTO) 前置詞 về (BACK) 前置詞 xuống (DOWN/ ON)

## 2.4 本章のまとめ

本章では、ベトナム語の方向移動動詞の分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、ベトナム語の方向移動動詞は普段、一定の方向を持ち、空間的移動 (ある目的地へ向かう移動)の時のも方向性を持つ。

次に、ベトナム語の方向移動動詞は、動詞単独の時と方向移動動詞から転成した前置詞で空間表現の起点、経路、着点を表す。具体的には、すべての方向移動動詞は、着点を表す。また、đi (行く)、ra (出る)、vào (入る)、lên (上がる/上る)、xuống (降りる/下る)は、起点を表し、方向移動動詞 qua (渡る)、sang (渡る)は、経路を表す。

前置詞による空間表現については、起点は前置詞 từ (FROM)で表し、経路は方向移動動詞から転成した前置詞 qua (THROUGH)、sang (THROUGH)で表し、着点は全ての方向移動動詞から転成した前置詞 đi (TO)、đến (TO)、tới (TO)、về (BACK)、lại (TO)、ra (TO)、vào (INTO/IN)、lên (UP/ ON)、xuống (DOWN/ ON)、qua (TO)、sang (TO)で表す。

本研究の 11 個のベトナム語の方向移動動詞の中では、動詞 **đi** (行く)のみが完了と未完了を表し、これ以外の方向移動動詞は完了を表す。それは、**đi** (行く)は、方向移動動詞であり、また、移動様態動詞でもあるからである。

空間的移動ではない場合、ベトナム語の方向移動動詞は、「抽象的な意味」、「変化を表す意味」、「心理的な意味」、「催促と激励の意味」の意味を持つ。

文法的に、ベトナム語の方向移動動詞は、文の主動詞であり、文の述語としての機能を果たしている。しかし、方向移動動詞が他の動詞の後ろに置かれる場合、前置詞としての機能を果たす。

## 第3章 日本語の方向移動動詞との対照

日本語の方向移動動詞はベトナム語の方向移動動詞と同様、動きの方向性を指定する動詞である。1.4.4 で述べたように、本論においては、ベトナム語の方向移動動詞に対応する日本語の方向移動動詞「行く」、「来る」、「帰る」、「出る」、「入る」、「上がる/上る」、「下がる/降りる」、「渡る」を取り上げ、両言語の方向移動動詞を対照する。

日本語の方向移動動詞は、基本的には、ベトナム語の方向移動動詞と同様、移動の方向を持っているものと移動の方向を持っていないものがある。また、文の主動詞の役割以外に、文の主動詞ではない役割も担っている。

そこで本章では、日本語の方向移動動詞が、具体的にどの場合に方向性を持っているか、また持っていないのか、あるいは、文の主動詞の役割以外に、どのような役割を果たしているか、そして、ベトナム語と日本語の方向移動動詞の共通点と相違点は何かを詳細に分析する。

### 3.1 方向性を持つ日本語の方向移動動詞

まず、日本語の方向移動動詞が移動の方向を表す場合を見てみよう。

#### 3.1.1 日本語における空間的移動

2.1.1 では、ベトナム語の方向移動動詞は、空間的移動 (ある目的地へ向ける移動)、つまり、方向移動動詞が場所名詞と結合する場合でのみ方向性を持つと結論した。本節においては、日本語の方向移動動詞はどうであるかを見ていく。

日本語の方向移動動詞の方向性について、小原 (2007:166) は、「方向」は方向移動動詞で表さなければならないとしているが、具体的には、どのような時に方向移動動詞が「方向」を表すかは明らかにしていない。

本節では、ベトナム語の方向移動動詞に基づき、日本語の先行研究中の例文を使用して、日本語の方向移動動詞の空間的移動での方向性について検討する。

日本語の方向移動動詞は、ベトナム語の方向移動動詞と同様、単独で主動詞となる場合と主動詞の後ろに置かれる場合がある。

まず、日本語の方向移動動詞が主動詞として用いられる場合を見てみよう。

文の主動詞の役割を担う場合、日本語の方向移動動詞は自身が移動と方向の意味を含んでいる。以下の(1a)のように、方向移動動詞「帰る」は、前にある目的地の場所名詞「故郷」と結合し、空間の移動と方向を表す。これと同じように、(1b)では、方向移動動詞「出る」の前に、目的地の場所名詞「外」を付けると、「出る」は空間の移動と方向を表す。

- (1) a. 留学生が 故郷 に 帰る。(小泉 et al. 1989:117)

目的地 移動+方向

場所名詞 方向移動動詞

- b. 寝癖のついたこの頭じゃ、きまりが悪くて、外 に 出られないよ。

(荻野 et al.2003:1402)

目的地 移動+方向

場所名詞 方向移動動詞

(2a)の方向移動動詞「降りる」も移動と方向を表す。「降りる」の前に出発する場所「木」を置く。(2b)の方向移動動詞「入る」も場所名詞「入り口」と結合し、空間移動と方向を持つ。

- (2) a. サルが 木 から 降りた。(小泉 et al. 1989:108)

移動+方向

場所名詞 方向移動動詞

- b. 入り口 から 入って すぐ2脚のテーブル、奥にソファ、その隅にカラーテレビがある。(荻野 et al.2003:1650)

移動+方向

場所名詞 方向移動動詞

次の(3a)の方向移動動詞「行く」は、空間の移動と方向を表す。この方向移動動詞は、通過点を表す場所名詞「道」と結合し、「道を通り、ある目的地へ移動する」という意味になる。

また、(3b)では、方向移動動詞「渡る」は、前にある場所名詞「海峡」と結合し、空間の移動と方向を表している。

- (3) a. その人はこの道 を 行きました。(小泉 et al.1989:41)

移動+方向

場所名詞 方向移動動詞

- b. 船が海峡 を 渡る。(小泉 et al.1989:560)

移動+方向

場所名詞 方向移動動詞

以上のことから、空間的移動においては、日本語の方向移動動詞はベトナム語と同じく、単独の動詞（文の主動詞）の役割を担い、移動と方向を表すことが分かる。

次は、日本語の方向移動動詞を2つ並べて用いる場合である。この場合、前項の方向移動動詞は、移動を表し、後の方向移動動詞は、移動の方向を表す。

具体的に(4a)を例にとると、方向移動動詞「行く」の前の主動詞の役割を果たしている方向移動動詞「下りる」は、移動を表し、「行く」は、移動の一定の方向を表す。(4b)の方向移動動詞「来る」は、主動詞「帰る」と結合し、移動の方向を表す。また、主動詞「帰る」の前に出発する場所名詞「東京」を置くと、空間的移動が成り立つ。

- (4) a. 成績の悪い順に名前をいって、舞台から 下りて 行く。(荻野 et al.2003:346)

移動 方向

場所名詞 主動詞 方向移動動詞

- b. 父が東京から 帰って 来たときは、霜柱の立った十一月の寒い朝のことだ。

(荻野 et al.2003:400)

移動 方向

場所名詞 主動詞 方向移動動詞

次の(5a)の文の主動詞の役割を担う「渡る」は、移動を表し、方向移動動詞「行く」は、移動の一定の方向を表す。また、前に置く経路を表す場所名詞「湖上」と結合し、空間的移動が成り立つ。これと同じく、(5b)の主動詞「戻る」は移動を表し、方向移動動詞「行く」は、方向を表す。

(5) a. 涼風が湖上 を 渡って 行く。(小泉 et al.1989:561)

移動 方向

場所名詞 主動詞 方向移動動詞

b. 子供はいま来た道 を 戻って 行った。(小泉 et al.1989:511)

移動 方向

場所名詞 主動詞 方向移動動詞

(5)と同様、(6a)、(6b)に見られるように、(6a)の主動詞「渡る」の後ろに置かれた「来る」と(6b)の「移る」の後ろに置かれた「来る」は、移動の方向を表す。また、それぞれ前に置いた目的地の場所名詞「北海道」、「地域」と結合し、空間的移動になる。

(6) a. 白鳥がシベリアから北海道に 渡って 来る。(小泉 et al.1989:561)

目的地 移動 方向

場所名詞 主動詞 方向移動動詞

b. この国の経済力が、東都からこれらの地域に 移って 来た反映でもある。

(荻野 et al.2003:184)

目的地 移動 方向

場所名詞 主動詞 方向移動動詞

上記から、日本語の方向移動動詞は、他の動詞の後ろに置かれる場合は、移動の方向を表す。また、空間的移動においては、場所名詞が省略された場合でも、方向移動動詞は、移動の方向を表す。具体的には、次の(7)を見られたい。

(7) a. ラン: ナムさん、いつ国 へ 帰るの？

目的地 移動+方向

場所名詞 方向移動動詞

b. ナム: 来月 帰る つもりだ。

移動+方向

方向移動動詞

(7a)のように、方向移動動詞「帰る」が目的地の場所名詞「国」と結合する場合でも、(7b)のように、目的地「国」が省略された場合でも、方向移動動詞「帰る」は、移動と移動の方向を表す。

本節では、日本語の方向移動動詞は、ベトナム語の方向移動動詞と同じように、空間的移動においては方向性を持つことを示した。

なお、日本語の方向移動動詞が方向性を持たない場合は、次節 3.2 で説明する。

### 3.1.2 日本語における空間移動の起点、経路、着点

上述したように、ベトナム語の空間移動は、方向移動動詞自身と前置詞で表す。本節においては日本語の方向移動動詞は、どのように起点、経路、着点を表すかを分析していく。

日本語の空間移動においては、移動物がたどる経路の起点、中間経路、着点を助詞で表す。前述(1.3.3)したように、小泉 (1993)では、対格「を」、与格「に」、離格「から」、向格「へ」、到格「まで」の助詞を用いる。また、寺村 (1982)は、出発点(起点)は、「を」格と「から」格で表し、通過点(経路)は、「を」格で、到達点(着点)は、「へ」格と「に」格で表すと指摘している(cf.1.4.2)。以下に、空間移動の起点、経路、着点について詳しく説明する。

まず、日本語の起点である。寺村 (1982)、三宅 (1996)は、主語が人間、動物 (あるいは「自動車」、「車」、「船」のように人間が操縦するもの)で自ら動くことができる場合、つまり主格名詞句が動作主(意識的/意図的な動き)の場合は、起点を「を」格と「から」格で表示すると主張している。

具体的には、(8a)-(8f)の主語は、人間 (彼、子ども、太郎、私)であり、自ら動くことができるため、起点は「を」格と「から」格で表す。



- (8) a. 彼が部屋 {を/から} 出る/出ていく。(寺村 1982:107)  
b. 子どもが電車 {を/から} おりる。(寺村 1982:107)  
c. 太郎が部屋 {を/から} 出た。(三宅 1996:121)  
d. 太郎が車 {を/から} 降りた。(三宅 1996:121)  
e. 入り口 {を/から} 入る。(松本 1997:198)  
f. 私は毎日 8 時に会社 {を/から} 下がる。

(9a)は動物「犬」の意図的移動の例文である。ここでは、場所「窓」において開始される移動を表すため、「を」格、「から」格が用いられる。同様に、(9b)の乗り物「船」は、文の主語で、人間ではないが、人の意志的なコントロールで主語を移動させることができるので、場所「港」において開始される移動を表すため、「を」格、「から」格が用いられる。

- (9) a. 犬が窓 {を/から} 入った。  
b. 船が港 {を/から} 出る。

これに対し、主語自らが意図的に移動しない物体の場合は「を」格は使えず、「から」格しか使えない(cf.寺村(1982)、三宅(1996))。意志的にコントロールできない移動の場合は、「起点」は対格で表示できないからである。

(10a)-(10d)の主語の「煙」、「ゴミ袋」、「湯気」のような意図的に移動しない物体の場合、起点を表すため、「から」格のみが用いられる。

- (10) a. 煙が部屋 {\*を/から} 出る/出ていく。(寺村 1982:107)  
b. 煙が煙突 {\*を/から} 出た。(三宅 1996:121)  
c. ゴミ袋がグラウンド {\*を/から} 上がった。  
d. 湯気が風呂 {\*を/から} 上がった。

上の(10)は、物体の物理的な場所「部屋」、「煙突」、「グラウンド」、「風呂」での自然の動きの例文である。自然の動きの場合、物理的な場所だけではなく、概念的な場所でも、起点を表すため、「から」格のみ用いられる(cf. 寺村(1982:107))。

次の(11)は、概念的な場所「スカート」で意図的に移動しない物体(膝)の例文である。この場合、「から」のみが用いられるため、(11a)は適格文になるが、(11b)は不適格文である。

(11) a. スカートから膝が出る。(寺村 1982:107)

b. \*膝がスカートを出る。(寺村 1982:107)

また、寺村(1982:108)は、(12)のように意識的な動きか、それに似た動きをするかどうか判断が難しい場合、「から」しか許されないとする。

(12) 二階/屋上 {\*/を/から} おりる。(寺村 1982:108)

このことからわかるように、意志的にコントロールできない移動の場合、起点を表すため、「を」格は、「から」格より制約を受ける。

「を」格のもう1つの制約は、「起点」が「着点」と同時に共起する場合には、「を」格が使えないことである(cf. 三宅(1996:145))。

(13a)は、開始場所「部屋」から終了場所「庭」に移動する例文であり、場所「部屋」の中で開始される移動を表すため、「を」格は使用されず、「から」格のみが用いられる。これと同様、(13b)は開始場所「店/出口」から終了場所「車道」に移動する場合で、場所「店/出口」において開始される移動であるため、「を」格は許されない。

(13) a. 太郎が部屋 {\*/を/から} 庭に出た。(三宅 1996:145)

b. \*店/出口を車道に出た。(松本 1997:200)

さらに、三宅 (1996:145)は、「帰る」、「来る」のような「着点」を含意するタイプの動詞の移動では、起点を表すため、「から」格は許されるが、「を」格は許されないと言っている。

(14a)、(14b)は、それぞれ「着点」を含意する動詞「来る」、「帰る」の例文である。この場合、場所の「東京」、「学校」において開始される移動を表すため、「から」格のみが許される。

(14) a. 太郎が東京 {\*/を/から} 来た。(三宅 1996:145)

b. 太郎が学校 {\*/を/から} 帰った。(三宅 1996:145)

「を」格のもう 1 つの制約について、田中 (1997:31)は、「バスから外へ出た」は「バスの中から外へ出た」と言い換えられるが、「バスの中を外へ出た」とは言えないとする。その理由は、「バスの中から」の場合には、「から」は〈起点〉を表すが、「バスの中を」とすると、「バスの中」は〈対象〉になり、不適格になるからである<sup>13</sup>。

逆に、起点になる名詞と主語との機能的な関係を絶つ場合、「を」が適切になる(影山 (2011))。

(15)の例文の主語はタクシーの乗客である。タクシーの機能は乗客を運ぶことであり、乗客が「タクシーを降りる」ということは、客としての役割がそれで終わるということである。

(15) 先生のお宅は、駅前でタクシー{を/\*から}降りて、そこから徒歩で 1 分ほどのところです。

(影山 2011:139)

以上から、日本語の起点を、以下の表 1 にまとめた。

---

<sup>13</sup> 「を」は起点を表すのではなく、あくまで対象を表すとする国広(1967)の主張に従うことを前提とした説明である。

表1 日本語の起点

日本語の起点	を	から
意志的にコントロールできるもの	○	○
意志的にコントロールできないもの	×	○
「起点」が「着点」と同時に共起する	×	○
「着点」を含意する動詞	×	○
起点になる名詞と主語との機能的な関係を絶つ時	○	×

次は日本語の経路である。通過する場所を表すには、起点を表すのと同じ形の「を」格が用いられる。

下記の(16a)-(16c)は、方向移動動詞「上がる」の例文である。これらの例文では、場所の「階段」、「歩道橋」を通過する移動を表すため、「を」格が許される。

- (16) a. 階段を上ってしばらく行くと..... (寺村 1982:108)  
 b. 老人が歩道橋を上った。(小泉 et al.1989:5)  
 c. その階段を(10秒)で上がった。(松本 1997:185)

下の(17a)-(17e)は、方向移動動詞「行く」、「入る」、「渡る」、「おりる」、「下がる」の例文である。これらの例文では、通過する場所の「草原」、「門」、「橋」、「階段」、「国道」を表すため、「を」格が用いられている。

- (17) a. シマウマの一団が草原を行く。(小泉 et al.1989:41)  
 b. 一行は門を入った。(小泉 et al.1989:411)  
 c. 太郎がこの橋を渡った。(三宅 1996:146)  
 d. 長い階段をおりる。(影山 1997:136)  
 e. 南北に走る国道を少し下がる。(森山 2012:195)

上述したように、「を」格は経路だけではなく、起点を表すのに用いられる。そのため、起点、経路が同時に共起する場合、起点は「から」格で表す。

(18a)、(18b)では、場所「その場所」、「裏口」において開始される移動を表すのに、「から」格が用いられるのに対し、通過する場所「店/出口」、「家」を表すには、「を」格が使われている。

- (18) a. その場所から {店/出口} を出た。(松本 1997:199)  
b. 裏口から家を出た。

「起点」を表す「を」格と経路を表す「を」格の違いは、日本語の「起点」は、意志的にコントロールできない移動の場合は、「を」格による表示ができないのに対し、「経路」は「を」格による表示ができることである(cf. 三宅 1996:147)。例えば、(19)の意志でコントロールできない風、時雨の移動では、「を」格を用い、通過する場所「波間」、「通り」を示す。

- (19) a. 風が波間を渡る。(小泉 et al.1989:561)  
b. 時雨が通りを渡ってゆく。(小泉 et al.1989:561)

最後は、日本語の着点である。日本語の方向移動動詞の着点は、「に」格で表す。

(20a)-(20c)のように、それぞれ移動の終了場所、つまり着点の「隣の部屋」、「こちら」、「地下室」を表すために、「に」格が用いられる。

- (20) a. 隣の部屋に行く。(小泉 et al.1989:41)  
b. 真一がこちらに来た。(小泉 et al.1989:179)  
c. 地下室におりる。(影山 1997:136)

(21a)-(21c)でも、「実家」、「部屋/家/学校」、「2階」において終了する移動を表すために、「に」格が用いられる。

- (21) a. 会社の盆休み、いつも何げなく実家に帰って母の手料理をたくさん食べ、最後は必ずけんかして帰ってしまう。(荻野 et al.2003:400)

- b. 部屋/家/学校に入る。(寺村 1982:112)
- c. 呼ばれて2階に上がった。(大島 2004:45)

さらに、着点を表すため、「に」格だけではなく、「へ」格も用いられる(cf. 寺村(1982:112)、三宅(1996:143))。

(22)では、着点である「学校」への移動を表すため、「に」格、「へ」格が許される。

(22) 子供たちが学校 {に/へ} 行った。(三宅 1996:143)

以上のように、日本語の着点は「へ」格、「に」格で表す。

日本語のもう1つの特徴は、起点と着点が同時に共存することである。

(23a)-(23d)は、行為がそれぞれ「裏通り」、「台の上」、「海」、「地下駅」において開始され、「家」、「地面」、「河川」、「地下駅」において終了する移動を表した例文である。この場合、移動の開始場所を「から」格で、移動の終了場所を「に」格で表す。

(23) a. 裏通りから家に入る。(寺村 1982:113)

b. 健二さんは台の上から地面に降りた。(小泉 et al.1989:108)

c. また船が海から河川に入ると、海水と淡水の比重差によって喫水が増加する。

(荻野 et al.2003:1650)

d. 東京駅の丸の内口、地上駅から地下駅に下りる階段のところに、大きなステンドグラスが飾りつけられている。(荻野 et al.2003:346)

しかし、日本語の着点は経路と同時に表すことはできない(cf. 影山(1997:136)、松本(1997:186))。

具体的には、(24a)の通過する場所「長い階段」と終了する場所「地下室」は、同時に表せないため、(24a)は不適格文になる。これと同様、(24b)-(24d)のそれぞれの通過する場所「その道」、「その階段」、「その橋」は終了する場所「駅」、「3階」、「向こう岸/中間地点」も同時に表せないため、(24b)-(24d)は不適格文になる。

- (24) a. \*地下室に長い階段をおりた。(影山 1997:136)  
 b. 彼はその道を駅{?に/まで/へと}行った。(松本 1997:186)  
 c. 彼はその階段を3階{?に/まで/へと}上がった。(松本 1997:186)  
 d. ジョンはその橋を{?向こう岸に/\*中間地点に}渡った。(松本 1997:187)

最後に、着点は、「へ」格、「に」格で表す以外に、小泉(1993)は、「まで」格で表すとしている。本研究では、「まで」格は「着点」ではなく、影山の説である「到達範囲」を表すと主張する(cf. 影山 1997:141)。それは次の理由による。

日本語では、移動の終わりを示す助詞に「まで」と「に」がある。(25)の例文の「に」と「まで」を見ると、両者にほとんど違いがないように見える。

- (25) 東京スカイツリー{まで/に}行くにはどうしたらいいですか？(影山 2011:153)

しかし、「まで」と「に」には違いがある。影山(2011)は、日本語の「まで」は距離表現、「に」は中間経路の役割を担うとしている。そして、「まで」と「に」の違いは行為連鎖であるとしている。行為連鎖とは、「動詞が表す意味を動作や変化の連続として捉えたものである」(影山 2011:154)。

「まで」の行為連鎖

<行為> → <変化> → <結果状態>

「に」の行為連鎖

<行為> → <移動> → <結果位置>

そのため、(26a)、(26b)の山登りのような物理的移動を表すためには、「まで」だけを使うのに対し、(26c)のピョンヤンは、結果位置を表すため、「まで」は用いられず、「に」が用いられる。

- (26) a. 二人は登山路を6合目{まで/\*に}歩いた。(影山 2011:153)  
 b. 私は展望台{まで/\*に}5キロ登った。(影山 2011:153)  
 c. \*ハイジャックされた飛行機がピョンヤンまで着陸した。(影山 1997:141)

「まで」と「に」の違いは、影山(2011)の(27)の例文を分析すれば明らかである。

- (27) a. 私は東京まで夜行バスで行った。  
 (しかし、東京より先は別の乗り物に乗って移動した。)  
 b. 私は東京に夜行バスで行った。(旅は東京で終わった。)

(27)では、「夜行バスで」という移動手段を表す。移動手段は、中間経路上の移動の方法を表すため、(27a)では、「東京までは夜行バス、それより先は別の交通手段」という解釈ができ、この場合、「東京」は旅の最終点ではない。

一方、「東京に」を用いた(27b)では、夜行バスで東京に行き、旅はそこで終わりという意味になる。

以上の分析から、日本語の空間移動の表現をまとめたものを、以下の表2に示す。

表2 日本語の空間表現

	「から」格	「を」格	「に」格	「へ」格
起点	○	○	×	×
経路	×	○	×	×
着点	×	×	○	○

以上、日本語の方向移動動詞は、助詞/後置詞で空間移動の起点、経路、着点を表すことを説明した。



### 3.1.3 日本語の方向移動動詞のアスペクト

前章(2.1.3)で、筆者は、ベトナム語の方向移動動詞では、*đi* (行く)は、過去形で「完了」と「未完了相」を表すが、他の動詞は「完了相」を表すと主張した。日本語の方向移動動詞についても、筆者は、「行く」は「完了」と「未完了」を表し、「来る」、「帰る」、「出る」、「入る」、「上がる/上る」、「下がる/降りる」、「渡る」は「完了」を表すと主張する。筆者のこの主張を証明するため、2つの方法を用いることにする。1つは、完了を表す動詞に否定形をつけてみる方法で、もう1つは、時間副詞を付けてみる方法である。

まず、完了を表す動詞「来る」、「着く」の否定形を文の後ろの命題に付けると、適格文になるか、不適格文になるかを調べてみる。

日本語の方向移動動詞「行く」は「未完了」を表すため、「まだ着いていない」という表現ができ、(28)は適格文になる。

(28) アメリカへ行ったが、まだ来ていない/まだ着いていない。

これに対し、日本語の方向移動動詞「来る」、「帰る」、「出る」、「入る」、「上がる/上る」、「下がる/降りる」、「渡る」は、「完了」を表すために、(29a)-(29g)の後ろの命題に未完了を表す「まだ来ていない」、「まだ着いていない」を付けると、(29a)-(29g)は、すべて不適格文<sup>14</sup>になる。

(29) a. \*アメリカへ来たが、まだ来ていない/まだ着いていない。

b. \*アメリカへ帰ったが、まだ来ていない/まだ着いていない。

c. \*庭に出たが、まだ来ていない/まだ着いていない。

d. \*家に入ったが、まだ来ていない/まだ着いていない。

e. \*4階に上がったが、まだ来ていない/まだ着いていない。

f. \*地下に降りたが、まだ来ていない/まだ着いていない。

g. \*日本に渡ったが、まだ来ていない/まだ着いていない。

---

<sup>14</sup> 本節における筆者が作成した不適格文は、山口市にある医療機関の「はあと日本語学校」の日本人教員4名と事務員1名により確かめられた。

日本語の方向移動動詞が「完了相」、あるいは、「未完了相」を表すことを明らかにするためのもう1つの方法は、完了を表す時間副詞を付ける方法である(cf. 影山 1997:133)。

(30b)「学校へ1時間で行った」のように、「1時間で」という完了を表す時間副詞を付けると、1時間後に「そこ」に着くことが含意されるため、(30b)は適格文になる。また、(30c)は「1時間」というような継続時間を表す副詞をつけることができないため、(30c)は不適格文になる。動詞「行く」は、アスペクト的には完了相だからである。

- (30) a. 田中さんは学校へ行った。  
b. 田中さんは学校へ1時間で行った。  
c. \*田中さんは学校へ1時間行った。

同様に、日本語の方向移動動詞「来る」は「完了」を表す。そのため、(31b)「ここに1時間で来た」のように、「1時間で」という完了を表す時間副詞を付けると、1時間後に「ここ」に着くことが含意されるため、(31b)は適格文になる。しかし、(31c)は「1時間」というような継続時間を表す副詞をつけることができないため、(31c)は不適格文になる。

- (31) a. 森竹先生はここに来た。  
b. 森竹先生はここに1時間で来た。  
c. \*森竹先生はここに1時間来た。

(31)と同様、(32b)「アメリカに2日で渡った」のように、「2日で」という完了を表す時間副詞を付けると、2日後にアメリカに着くことが含意されるため、(32b)は適格文になる。しかし、(32c)では、「2日」というような継続時間を表す副詞をつけることができないため、(32c)は不適格文になる。「渡る」が「完了相」だからである。

- (32) a. 彼はアメリカに渡った。  
b. 彼はアメリカに2日で渡った。

c. \*彼はアメリカに2日渡った。

この方法で日本語の方向移動動詞「帰る」、「出る」、「入る」、「上がる/上る」、「下がる/降りる」を調べてみると、(31)と(32)と同様の結果となる。

このことから分かるように、日本語の方向移動動詞はベトナム語と同様、「行く」は「完了相」と「未完了相」で、それ以外の動詞は「完了相」である。

次に、現在形「ている」について述べる。1.3.4.2 で述べたように、日本語の動詞は「ている」形で「継続相」を表す。このことは方向移動動詞にも当てはまる。

以下の(33)を見てみよう。

(33) a. 鈴木さんは大学に行っている。

b. 母は庭に出ている。

c. 田中さんは故郷へ帰っている。

(33a)は、動作の進行を表すために、「鈴木さん+大学+行く+[継続]」と表現している。同様に、(33b)、(33c)でも、それぞれ、「母+今+庭+出る+[継続]」、「田中さん+故郷+帰る+[継続]」と動作の進行を表現している。

一方、日本語の方向移動動詞の「ている」は「継続」だけではなく、「完了」も表す。具体的には、上の(33)の継続相の「ている」の例文に、「すでに」という副詞をつけることによって簡単に有界性を与えることができ、完了の意味が生じる。(34)を見てみよう。

(34) a. 鈴木さんはすでに大学に行っている。

b. 母はすでに庭に出ている。

c. 田中さんはすでに故郷へ帰っている。

(34)のように、継続相を表す日本語の方向移動動詞の「ている」形では、完了を表す副詞「すでに」をつけても、適格文となる。つまり、日本語の方向移動動詞の「ている」形は、「すでに」をつけた場合は、「継続相」ではなく、「完了相」を表す。

ベトナム語の方向移動動詞の「ている」形も、(35)に示したように、日本語と同様、「継続相」を表す。

(35) a. Lan đang sang nhà Nam.

ラン PRE sang 家 ナム

ランさんはナムさんの家に行っている。

b. Bố tôi đang lên núi.

父 私 PRE lên 山

父は山に行っている。

c. Anh Tài đang vào Nam.

さん タイ PRE vào 南部

タイさんは南部に行っている。

しかし、注意しなければならないのは、ベトナム語の方向移動動詞の「ている」形は日本語と異なり、「完了相」を表すことである。これを証明するために、(35)の「継続相」の例文に完了を表す副詞「すでに」をつけると、(36)のように不適格文になる。

(36) a. \*Lan đã đang sang nhà Nam.

ラン PAST PRE sang 家 ナム

\*ランさんはナムさんの家に行って行った。

b. \*Bố tôi đã đang lên núi.

父 私 PAST PRE lên 山

\*父は山に行って行った。

c. \*Anh Tài đã đang vào Nam.

さん タイ PAST PRE vào 南部

\*タイさんは南部に行って行った。

このことから分かるように、ベトナム語と日本語の方向移動動詞の「ている」形では、両言語とも「継続相」を表している。しかし、日本語が「完了相」も表していることは、ベトナム語と異なっている点である。

### 3.2 方向性を持たない日本語の方向移動動詞

前節では空間的移動における日本語の方向移動動詞について述べた。本節では、方向性のない場合を考察する。

日本語の方向移動動詞はベトナム語と同様、場所名詞でない名詞と結合する場合、本来の意味(空間で移動する意味)がなくなり、別の意味になる。以下の表3は、方向性のある方向移動動詞と方向性のない方向移動動詞の意味の違いを示したものである。

表3 方向移動動詞の方向性

No.	方向性がある例文	方向性がない例文
1	a. プール から 上がる。 (森山 2012:30) 起点 移動+方向 場所名詞 方向移動動詞	b. 物価が2パーセント上がる。 (小泉 et al.1989:5) 程度 物 方向移動動詞
2	a. 空中を 飛び 上がる。 (姫野 1999:36) 経路 移動 方向 場所名詞 主動詞 方向移動動詞	b. 相手がつけ あがる。 (姫野 1999:36) 移動 増長 人 主動詞 方向移動動詞
3	a. 飛行機[ヘリコプター]が空港に降りた。 (小泉 et al.1989:108) 目的地 移動+方向 場所名詞 方向移動動詞	b. 田中さんは委員長を降りた。 (小泉 et al.1989:108) 引退 職務 方向移動動詞
4	a. 町に サーカスが 来た。 (小泉 et al.1989:179) 目的地 移動+方向 場所名詞 方向移動動詞	b. この世の終わりが 来た。 (小泉 et al.1989:179) 変化 時点 方向移動動詞
5	a. 私は部屋から廊下に 出た。 (小泉 et al.1989:345) 起点 目的地 移動+方向	b. なくしたと思った財布が出てきた。 (小泉 et al.1989:345) 変化

	場所名詞 方向移動動詞	物 方向移動動詞
6	a. 客船が穏やかな海の上を滑って 行った。 (小泉 et al.1989:261) 経路 移動 方向 場所名詞 主動詞 方向移動動詞	b. 部屋が暖かく なって いく。 (小泉 et al.1989:42) 変化 主動詞 方向移動動詞

表 3 の 1、2 は方向移動動詞「上がる」の例文である。1 は「上がる」が文の主動詞の役割を担い、2 は「上がる」を文の主動詞の後ろに置き、移動動詞の方向を表す役割を担う。1a、2a では、動詞「上がる」、「飛び上がる」の前にそれぞれ場所名詞「プール」、「空中」が置かれ、空間的移動を意味する。この時、1a の「上がる」は移動と方向を表し、2b の「飛ぶ」は移動を表し、「上がる」は方向を表す。これに対し、1b、2b では、動詞「上がる」、「つけあがる」は、場所名詞ではなく、物「物価」と人「相手」の名詞と結合し、空間的移動の意味がなくなり、それぞれ「程度」、「増長」の意味になる。

3a では、方向移動動詞「降りた」の前に目的地の役割を担う場所名詞「空港」が置かれ、空間的移動を表す。この場合、「降りた」は移動と方向を表す。他方、3b の「降りた」は場所名詞ではなく、職務を表す名詞「委員長」と結合し、「引退」の意味になる。

4a、5a の方向移動動詞「来た」、「出た」は、それぞれ場所名詞「町」、「廊下」と結合し、移動と方向を表す。また、6a の「滑って行った」の方向移動動詞「行った」は、移動の方向を表す。これに対し、4b-6b の動詞「来た」、「出てきた」「なっていく」は、「変化」を意味する。

このように、空間的移動ではない場合、日本語の方向移動動詞は、空間方向性がなくなる。すなわち、本来の意味がなくなり、「程度」、「増長」、「引退」、「変化」などの他の語彙の意味を持つ。

そこで、日本語の方向移動動詞が方向性を持たない場合は、どのようなことを表すかを見てみよう。

本研究においては、日本語の方向移動動詞が方向性を持たない場合の多義の意味を 3 つに分類する。それらは、「変化を表す意味」、「完了・結果を表す意味」、「心理的な意味」である。このような意味のバリエーションは 2.2 で筆者が指摘したように、ベトナム語の方向移動動詞でも見られる。

まず、日本語の方向移動動詞が方向を示さない場合、「変化を表す意味」を持っていることについてである。方向移動動詞の「変化」の意味を「出現・開始」、「変化の維持」、「減少・消失」の3つに分類してみていく。

「出現・開始」による変化とは、「出現・開始」は前の出来事が消失し、新しい出来事が出現する、あるいは、突然新しい出来事が出現することである。この意味は、方向移動動詞「出る」、「上がる」、「入る」、「降りる」、「来る」などで見られる。

具体的には、(37a)の「出る」は、自然の生育で、(37b)の「出る」は、けがをした人(出来事)の出現、あるいは、発生である。(38a)の「上がる」は、「叫び声」が突然聞こえたことで、(38b)の「上がる」は、「地響き」が生じたことを述べている。

- (37) a. 木の芽が出た。(小泉 et al.1989:345)  
 b. 事故でけが人が出る。(小泉 et al.1989:345)
- (38) a. 叫び声上がる。(小泉 et al.1989:6)  
 b. 雪崩による地響きが上がる。(小泉 et al.1989:6)

上の(37)、(38)と同様、下の表 4 の方向移動動詞「入る」は、言語と月の出現で、「降りる」は、自然の現象(夜露と夕闇)、「来る」は、自然の現象(地震/大雨/大雪)と季節の出現で、「渡る」は、話の状況について述べている。

表 4 日本語の方向移動動詞の「出現・開始」の意味を表す例文

No.	日本語の方向移動動詞	例文
1	入る	フランス語はロマンス語に入る。(小泉 et al.1989:412)
		今日から 12 月に入った。(小泉 et al.1989:412)
2	降りる	草の葉に夜露が降りる。(小泉 et al.1989:108)
		街に夕闇が降りる。(小泉 et al.1989:108)
3	来る	地震/大雨/大雪が来る。(小泉 et al.1989:179)
4	渡る	もうすぐ夏が来る。
		彼の話は多岐に渡る。(小泉 et al.1989:561)

次の「変化の維持」の変化とは、ある物/人/出来事が変わり、その変化を維持する、あるいは、その変化が続いて発展するという意味である。

(39a)の「成長していく」は子供が大きくなり、これからもこの変化が続くということの意味する。(39b)は、木の幹が太くなり、これからもこの変化が続くことを意味する。

(39) a. 子供が成長していく。(小泉 et al.1989:42)

b. 木の幹が太くなっていく。(小泉 et al.1989:42)

(40a)と(40b)の「来ている」は、病気の原因は過労で、不安の原因はストレスであり、その原因がまだ残って維持しているということの意味している。

(40) a. 君の病気は過労から来ている。(小泉 et al.1989:179)

b. 彼の精神的不安はストレスから来ている。(小泉 et al.1989:179)

(41a)の「下がっている」と(41b)の「出ている」も変化した状態が続いていることを意味している。

(41) a. ズボンが下がっている。(小泉 et al.1989:207)

b. 浅間山の噴火口から煙が出ている。(小泉 et al.1989:345)

「減少・消失」による変化とは、何かの物・人・出来事が少なくなる、あるいは、物・人・出来事がなくなることの意味する。

(42a)、(42b)は、それぞれ成績、温度の数値の「減少」という変化である。この場合、方向移動動詞「下がる」は、空間的移動ではなく、成績と温度が下がったことを意味している。

(42) a. 成績が10番から15番まで5番下がった。(小泉 et al.1989:207)

b. 温度が3度下がる。(小泉 et al.1989:207)



(42)は「減少」による変化であるのに対し、(43)はお金と火の消失である。

- (43) a. お金がだんだんなくなっていく。  
b. 火が消えていく。

次は、日本語の方向移動動詞が方向性を持っていない場合の多義の意味の「完了・結果を表す意味」についてである。この「完了・結果」の意味は、方向移動動詞「来る」、「出る」、「行く」などで見られる。

(44a)の方向移動動詞「入った」は、部屋の電話の設置が完了したことを表し、(44b)の「入っていた」は、ワインの検査の結果を表す。

- (44) a. 部屋に電話が入った。(小泉 et al.1989:412)  
b. ワインに毒が入っていた。(小泉 et al.1989:412)

次の(45a)、(45b)の方向移動動詞「出た」、「出ていた」は、動作の過程、あるいは、派生の原因を表す。

- (45) a. コンピューターの解答が出た。(小泉 et al.1989:345)  
b. この言葉はオランダ語から出た。(小泉 et al.1989:346)

上記の方向移動動詞「入る」、「出る」以外に、「行く」、「上がる」、「来る」も「完了・結果を表す意味」を持っている。それらの例文を以下の表5に示す。

表5 日本語の方向移動動詞が方向性を持っていない場合の「完了・結果を表す意味」の例文

No.	日本語の方向移動動詞	例文
1	行く	北国の短い夏は行ってしまった。(小泉 et al.1989:41)
		あの子はもう年が行っている。(小泉 et al.1989:41)
		計画がうまくいった。(小泉 et al.1989:42)

		研究が思い通りにいった。(小泉 et al.1989:42)
2	上がる	この研究からすばらしい成果が上がった。(小泉 et al.1989:6)
		その男は大臣の位に上がった。(小泉 et al.1989:406)
		ようやく原稿が上がった。(小泉 et al.1989:6)
3	来る	私の番が来た。(小泉 et al.1989:179)
		桜の花が咲いてきた。(小泉 et al.1989:179)
		真由美は近ごろ太ってきた。(小泉 et al.1989:179)

最後は、日本語の方向移動動詞が方向性を持っていない場合の多義の意味の「心理的な意味」についてである。この意味のバリエーションは、人間の感情、感覚、表情、態度などを表す、あるいは、人・物・出来事の人数・数量・程度を表す。

(46)の「行く」は、人間の感情、感覚を表す例である。

(46) 納得がいく・合点がいく・満足がいく(小泉 et al.1989:42)

(47)の「出る」は、「顔」、「口」を通して、態度を表すことを意味する。

(47) a. あの先生は怒りがすぐ顔に出る。(小泉 et al.1989:345)

b. 非難の言葉が口に出る。(小泉 et al.1989:345)

以上のように、日本語の方向移動動詞が方向性を持っていない場合には、本来の意味(空間的移動)の他に、「変化を表す意味」、「完了・結果を表す意味」、「心理的な意味」を持っている。これらの3つの拡張意味は、ベトナム語の方向移動動詞でも見られる。

### 3.3 日本語の方向移動動詞の文法面の変更

3.1 と 3.2 は、日本語の方向移動動詞の意味面について述べた。本節では、日本語の方向移動動詞の文法面について説明する。

前述したように、ベトナム語の方向移動動詞を主動詞の後ろに置くと、前置詞の役割を担っていた。本節では、日本語の方向移動動詞は、文法面でどのような役割を担うか考察する。

日本語の動詞と動詞が結びつく場合、姫野(1999:3)は、2つの形式があるとする。それらは、「て」の形に続くものと、動詞の連用形に続くものである。

姫野(1999:3)は、「て」の形に続く動詞類を、「補助動詞」と呼び、連用形に続く動詞類を、複合動詞の「後項動詞」と呼んでいる。また、姫野(1999:6)は、補助動詞の種類は、少ないが、多くの動詞に接続し、生産性が高いとしている。

本論では、姫野(1999)の分類により、日本語の方向移動動詞を他の動詞に後に置いた時は、補助動詞と後項動詞の役割を担うとする。

下の表6は、筆者が作成した日本語の方向移動動詞を他の動詞の後ろに置いたものである。

表6 日本語の方向移動動詞の補助動詞と後項動詞

日本語の方向移動動詞	日本語の「動詞+動詞」の形式	
	動詞「て形」(補助動詞)	動詞連用形(後項動詞)
出る	買ってでる	流れ出る
入る	買って入る	読み入る
上がる	跳んで上がる	飛び上がる
上る	飛んで上る	飛び上る
降りる	飛んで降りる	飛び降りる
行く	転がって行く	*飛び行く
来る	転がって来る	*飛び来る
渡る	歩いて渡る	歩き渡る
帰る	歩いて帰る	*飛び帰る

筆者作成

### 3.4 本章のまとめ

本章では、2章で分析したベトナム語の方向移動動詞と日本語の方向移動動詞の対照を行った。その結果から、両言語の方向移動動詞の共通点と相違点が明らかになった。詳細は以下の通りである。

まず、ベトナム語と日本語の方向移動動詞の共通点である。両言語の共通点は4点ある。

1点目は、両言語の方向移動動詞は、空間的移動(ある目的地へ向け、移動する活動)でのみ方向性を持つことである。

2 点目は、ベトナム語と日本語の方向移動動詞の中では、đi (行く)、「行く」は「完了相」と「未完了相」を表し、これ以外の方向移動動詞は、「完了相」であることである。また、両言語の方向移動動詞の「ている」形では、「継続相」を表す。

3 点目は、方向移動動詞は、本来の意味の他に、方向性を持たない場合、「変化を表す意味」、「完了・結果を表す意味」、「心理的意味」を持っていることである。

4 点目は、方向移動動詞の語彙的な意味のバリエーションにより、両言語は文法面で影響を受けている点である。つまり、方向移動動詞が文の述語の役割から他の役割 (前置詞、補助動詞、後項動詞)を担っているのである。

次に、ベトナム語と日本語の方向移動動詞の相違点は3点ある。

1 点目は、空間表現の起点、経路、着点に関する相違である。ベトナム語の方向移動動詞は、方向移動動詞単独と前置詞で起点、経路、着点を表すのに対し、日本語は助詞で表す。

2 点目は、日本語の方向移動動詞の「ている」形では、「完了相」を表すが、ベトナム語の方向移動動詞にはこのような表現が存在しないという点である。

3 点目は、両言語の文法面についての相違点である。「動詞+方向移動動詞」の形式では、ベトナム語の方向移動動詞は、前置詞の役割を担うのに対し、日本語の方向移動動詞は、補助動詞と後項動詞の役割を担っている。

## 結論

本論においては、ベトナム語の方向移動動詞 *đi* (行く)、*đến* (来る)、*tới* (来る)、*lại* (来る/帰る)、*về* (帰る)、*ra* (出る)、*vào* (入る)、*lên* (上がる)、*xuống* (降りる)、*sang* (渡る)、*qua* (渡る)の11個とそれらに対応する日本語の方向移動動詞「行く」、「来る」、「帰る」、「出る」、「入る」、「上がる/上る」、「下がる/降りる」、「渡る」の8個を研究範囲とし、意味面と文法面での対照を行った。その結果、両言語の方向移動動詞の共通点と相違点が明らかになった。

まず、ベトナム語と日本語の方向移動動詞の意味面での共通点は3点ある。

1 点目は、両言語の方向移動動詞は、空間的移動 (ある目的地へ向け、移動する活動)でのみ方向性を持つことである。

2 点目は、ベトナム語と日本語の方向移動動詞の中の *đi* (行く)、「行く」は、方向移動動詞でもあり、移動様態動詞でもあるため、「完了相」と「未完了相」を表し、これ以外の方向移動動詞は「完了相」であることである。また、両言語の方向移動動詞の「ている」形では、「継続相」を表す。

3 点目は、両言語の方向移動動詞は、空間的移動でない場合、本来の意味に加えて、「変化を表す意味」、「完了・結果を表す意味」、「心理的な意味」を持つ。

そして、意味的面での両言語の相違点は3点ある。

1 点目は、空間表現の起点、経路、着点に関する相違である。ベトナム語の方向移動動詞は、方向移動動詞単独の場合と前置詞を用いることで起点、経路、着点を表すのに対し、日本語は助詞で表す。

具体的には、すべてのベトナム語の方向移動動詞は動詞単独で着点を表す。また、*đi* (行く)、*ra* (出る)、*vào* (入る)、*lên* (上がる/上る)、*xuống* (降りる/下る)は、動詞単独で起点を表し、*qua* (渡る)、*sang* (渡る)は、動詞単独で経路を表す。前置詞で空間表現を表す場合は、起点は本来の前置詞 *từ* (FROM)で表し、経路は方向移動動詞から転成した前置詞 *qua* (THROUGH)、*sang* (THROUGH)で表す。着点は全ての方向移動動詞から転成した前置詞の役割を担う方向移動動詞 *đi* (TO)、*đến* (TO)、*tới* (TO)、*về* (BACK)、*lại* (TO)、*ra* (TO)、*vào* (INTO/IN)、*lên* (UP/ ON)、*xuống* (DOWN/ ON)、*qua* (TO)、*sang* (TO)で表す。

これに対し、日本語では、起点は「から」格と「を」格で表し、経路は「を」格で、着点は「に」格と「へ」格で表す。

2点目は、日本語の方向移動動詞の「ている」形は、「完了相」を表すが、ベトナム語の方向移動動詞には「完了相」が存在しないという点である。

3点目は、空間的移動ではない場合、ベトナム語の方向移動動詞は日本語と異なり、「催促と激励の意味」を持つことである。

最後に、ベトナム語と日本語の方向移動動詞の文法面の共通点は、両言語の方向移動動詞は、「文の主動詞の役割を担うことである。一方、相違点は、「動詞＋方向移動動詞」では、ベトナム語の方向移動動詞は、前置詞の役割を担う。しかし、日本語の方向移動動詞は、補助動詞と後項動詞の役割を担う。

## 問題点と今後の課題

本論の 3.3 において、日本語の方向移動動詞を他の動詞に後置する場合、補助動詞と後項動詞の役割を担うとしているが、概略のみで、十分ではない。そのため、この補助動詞と後項動詞に関するより詳細な研究は今後の課題としたい。

次に、本論においては、日本語の方向移動動詞「行く」、「来る」、「帰る」、「出る」、「入る」、「上がる/上る」、「下がる/降りる」、「渡る」をベトナム語と対照をしたが、これらの方向移動動詞以外に、「落ちる」、「戻る」、「登る」、「下る」や他動詞「出す」、「上げる」、「上がる」などの方向移動動詞もある。今後、これらの方向移動動詞についても、両言語の対照をする予定である。

移動動詞には方向移動動詞と移動様態動詞の 2 種類ある。本論においては、ベトナム語と日本語の方向移動動詞のみの対照を行ったが、今後は、移動様態動詞についても同様の研究を行いたい。

## 参考文献

- Cao Xuân Hạo (2007) *Tiếng Việt mấy vấn đề Ngữ âm- Ngữ pháp- Ngữ nghĩa* (ベトナム語の音韻、文法構造、意味構造の問題), Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Diệp Quang Ban・Hoàng Văn Thung (1996) *Ngữ pháp tiếng Việt* (ベトナム語の文法), Tập một, Nhà xuất bản Giáo dục, Hà Nội.
- Đình Văn Đức (1986) *Ngữ pháp tiếng Việt* (ベトナム語の文法), Nhà xuất bản Đại học và trung học chuyên nghiệp, Hà nội.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究者出版.
- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店.
- 影山太郎 (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店.
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店.
- 小泉保 (1993) 『日本語教師のための言語学入門』大修館書店.
- 小原真子 (2007) 「移動表現の日英比較：小説とその翻訳を題材に」『神戸言語学論叢』第 5 号、pp.161-174.
- Lý Ngọc Toàn・Lê Hương Hoa (2013) “Kiểu hình của động từ chuyển động trong tiếng Việt có sự liên hệ với tiếng Anh” (ベトナム語の移動動詞の表現型—英語との対照—), *Tạp chí Đại học Thủ Dầu Một*, số 5(12), pp.51-56.
- Mai Thi Thu Hân (2011) Verbs of motion and their lexicalization patterns in English and Vietnamese- A perspective from cognitive semantics, *VNU Journal of Science, Foreign Languages*, Vol. 27, pp.107-114.
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』第 110 号、pp.143-168.
- 森山新 (2012) 『日本語多義語学習辞典 動詞編』アルク.
- Nguyễn Cảnh Hoa (1999) “Tìm hiểu Nhóm từ chỉ hướng trong tiếng Việt” (ベトナム語の方向移動動詞の研究), *Kỷ yếu hội thảo khoa học “Ngữ dụng học”*, số 1, pp.181-187.



- Nguyễn Công Hoan (1957) *Truyện ngắn chọn lọc* (厳選短編), Nhà xuất bản Văn học.
- Nguyễn Du (1820) *Truyện Kiều* (キエウの物語), Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Nguyễn Hoàng Phương (2010) “Chức năng của giới từ tiếng Việt (xét trên bình diện ngữ pháp và ngữ nghĩa)” (ベトナム語の前置詞の機能 (文法面と意味面から見る)), *Tạp chí Khoa học ĐHSP TPHCM*, số 20, pp.129-139.
- Nguyễn Kim Thân (1977) *Động từ trong tiếng Việt* (ベトナム語の動詞), Nhà xuất bản Khoa học xã hội.
- Nguyễn Kim Thân (1977) *Nghiên cứu ngữ pháp tiếng Việt* (ベトナム語の文法の研究), Nhà xuất bản Giáo dục.
- Nguyễn Trãi (1868) *Quốc âm thi tập* (国語の詩集), Nhà xuất bản sử địa Hà nội.
- 荻野孝野・小林正博・井佐原均 (2003) 『日本語動詞の結合価』三省堂.
- 小原真子 (2007) 「移動表現の日英比較：小説とその翻訳を題材に」『神戸言語学論叢』第 5 号、pp.161-174.
- 大島一 (2004) 「日本語における複合動詞の後項動詞 “あがる・あげる”について：ポーランド語データとの対照研究から」巻 28(4)、一橋研究、pp.43-54.
- Phạm Lê Liên (編) (2015) *Từ điển tiếng Việt thông dụng (TDTVTD)*(ベトナム語の通用の辞書), Nhà xuất bản Hồng Đức.
- 齋藤純男 (2010) 『言語学入門』三省堂.
- Scrichampa Sophana (1998) *Vietnamese Verbs*, MSc. La Trobe University Bundoora, Victoria 3083, Australia.
- 竹沢幸一・John Bradford Whitman (1998) 『日英語比較選書 格と語順と文法構造』研究者出版.
- Talmy Leonard (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. *Language typology and syntactic description*, vol.3, *Grammatical categories and the lexicon*, ed. Tim Shopen, Cambridge: Cambridge University Press, pp.57-149.
- 田中茂範・松本曜 (1997) 『空間と移動の表現』研究者出版.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.

Trần Kiều Hué (2005) “Động từ chuyển động trong tiếng Nhật và tiếng Việt” (日本語とベトナム語の移動動詞), *Kỷ yếu hội thảo ngành thông tin - Thư viện (LIC)*, Đại học Quốc gia Hà Nội, pp.530-540.

Trần Thị Chung Toàn (2014) *Ngữ pháp tiếng Nhật dành cho sinh viên Việt Nam* (ベトナム人学生のための日本語文法), Nhà xuất bản từ điển Bách Khoa.

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、ご指導を頂いた指導教員の和田学先生に心より感謝致します。和田学先生の丁寧なご指導のおかげで、本論を完成することができました。和田先生には研究への熱意と指導に対する責任感も学ばせていただき、日頃の質問に対して多くの知識や示唆を頂きました。また、何度もご心配をおかけしたり、悩ませたりして、先生に大変ご迷惑をおかけしましたことを心からお詫び申し上げます。

また、副指導教員として、様々なご指導とご助言を下された富平美波先生と更科慎一先生にも心から感謝を申し上げます。先生方には学会の情報や研究に関する本などを紹介して頂きました。緊急時、いつもすぐにメールでお返答下さいました。この場をお借りして御礼申し上げます。

そして、山口大学東アジア研究科の先生方からも多くのご助言を頂き、留学生担当の事務の方はいつも快く書類を用意して頂き、質問にも多く応えていただきました。誠にありがとうございました。

最後になりましたが、これまで温かい目で見守ってくれたゼミの友人、日本人の友人、特に、はあと日本語学校の教職員、そして家族に深く感謝致します。

皆様、誠にありがとうございました。

2021年9月